

フラウイウス・アツリアノス『アレクサンドロス東征記』

第六卷および第七卷・訳

大牟田 章

第六卷

第六卷目次（前三二六年初——三二四年初）

アレクサンドロス、インドス川の川下りを決意する。インドス川はナイル川の源流かどうか。川下りの準備。全軍を川岸伝いの陸行組と船団組とに分ける（一・一—二・四）

ヒュダスペスの川筋からインドス川下りを開始する。出発時の賑々しい光景（三・一—三・五）

川筋一帯を制圧しながら南下をつづける。アケシネス川との合流点で急流と大渦の危険に遭遇する（四・一—五・四）

泊地に集結した陸行組の軍勢の再編成。アレクサンドロス、手勢をひきいてマッロイ人を攻め各地を制圧（五・五—八・三）

ヒュドラオテス河畔に邀撃のマッロイ人を追ってその防備集落を囲む。アレクサンドロス、将兵の戦意沈滞に苛立ち、単身敵中突入の危険をおかす（八・四—九・六）

アレクサンドロス、瀕死の重傷を負って昏倒する。従者三人の勇戦と味方の奮起（一〇・一—一一・一）

著者による誤った伝承の指摘と訂正——王を庇って奮戦した従者は誰々か。併せて「アルベラの合戦」という誤伝

について（一一・二―一一・八）

アレクサンドロス戦死の噂が基地に広がる。軍中の深刻な嘆きと今後への不安（一二・一―一二・三）

基地に帰った王が強いて自分の健在ぶりを披露する。将兵の歓喜と安堵。王の冒険にたいする側近者の批判と著者の感想（一三・一―一三・五）

マッロイ人、オクシュドラカイ人の降伏帰順申し入れ（一四・一―一四・三）

ヒュドラオテス・アケシネス川の川下りを再開する。インドス川四支流の名称について。アケシネス、インドス両河の合流域一帯を服属させ、その合流点に都市を建設する（一四・四―一五・四）

インドス川の本流に川下りをつづける。向背不明のムシカノイ人の地へ向け急速航行する。ムシカノス王の降伏（一五・五―一五・七）

オクシカノス、サンボスのふたつの領国を平定。ムシカノスが反乱を起こして誅滅される。クラテロスの麾下に別働隊を編成し、アラコシア経由でカルマニアへ向け出発させる（一六・一―一七・四）

パトラ到着。逃散した住民の宣撫と町や泊地の建設。アレクサンドロス、みずから三角州の右手水路を下って河口までの探査を行なう。外洋性の烈しい風浪と潮汐現象の初体験。大洋に乗り出し海中の島で諸神を祀る（一七・五―一九・五）

三角州左手の水路を再度パトラから河口まで探査。河口の渦に泊地を建設、ネアルコス艦隊の沿岸航行のための準備にかかる。航海の適季（二〇・一―二一・二）

アレクサンドロス、艦隊出航に先立って沿岸に西進を開始する。オレイタイ人の降伏帰順（二一・三―二二・三）

ガドロシア地方の珍しい植生について（二二・四―二二・八）

ガドロシア砂漠に六十日の難行軍が始まる。予期に反して艦隊補給の目途が立たず空しい連絡努力をくり返す。ア

レクサンドロスはこの進路の未曾有の危険を事前に知らなかったのかどうか、著者の考察（二三・1—二四・3）炎熱と飢渴のなかでの砂漠踏破の苦難。アレクサンドロスが衆目に示した克己自製の逸話（二四・4—二六・5）砂漠を脱出してプラにいたり、更にカルマニア地方に入る。クラテロス部隊との再会。属州統治の非違に肅清の手を加える。いわゆる「カルマニア行軍のお祭騒ぎ」について。ネアルコス、この地方で王と邂逅する（二七・1—二八・7）

アレクサンドロス・ペルシス地方に入り、パサルガイに到着。反逆陰謀や非違の摘発肅清がつづく。荒らされたキュロスの廟墓を再訪する。廟の旧観と現状の修復。ペルセポリス到着とペルシス統治の建て直し（二九・1—三〇・3）

一 さてアレクサンドロスは、ヒュダスぺス川の岸边に多数の三十人橈船や舟艇群、数多くの馬運搬船やその他、およそ川筋によって軍勢を輸送するのに役立つさまざまな船舶の準備がすでに完了していたので、ヒュダスぺス川2を下って大洋にまで出ようと決意した。彼は少なくともこれまでのところ、各地の河川のうちナイル川を除くとインドス川にだけ鰐がいるのを目撃していたし、それにアケシネス川の岸边にはエジプトの地に生えているのと同じ種類の豆が生育しているのを目にしてもいたが、さらにそのアケシネス川もインドス川に合流していると聞くに及んで、彼は自分がナイル川の源流を発見したのだと思うようになった。つまりナイル川はインドのどこかそのあたりにその源を発して広大な砂漠を流れ抜け、その辺でいつの間にかインドス川という名前も失ってしまうが、そこからまた改めて人の住む土地を通って流れ始めると早くもその地域のエティオピア人から、次いでエジプト人からもナイルの名で、あるいはホメロスに歌われてアイギュプトス（エジプト）なる地名の由来ともなったアイギュプトス（川）の名で呼ばれるようになり、こうして果ては内海（地中海）へと注ぎこんでいるというのである。実際アレ

クサンドロスは「母の」オリュンピアスに宛ててインドの風土のことを書き送ったさいにも、いろいろなことを記したなかで自分はナイル川の源を見つけたように思うとも書いていたのである。尤もこんな大問題を扱うには何とも瑣末な事柄に、その根拠が求められているわけなのだが。しかしその後インドス川についての調査をより正確に進めてゆくうち、彼は現地の住民たちから次のようなことを聞き知るようになったという。彼らによればヒュダスPes川はアケシネス川に流れこみ、そのアケシネス川の方もまたインドス川に合流していて、「ヒュダスPes・アケシネス川は」ともにその固有名を「インドス川に」譲っているのであり、一方インドス川そのものはついにはふたつの河口によって大海に注ぎこんでいるから、したがってエジプトの土地とはまったく何の関係もないというのである。

アレクサンドロスもそこで母に宛てた手紙のうち、ナイル川について書いた部分に関してはそれを取り消すことになったという話だ。彼はそこでこれらの河川を下って大海にまで到達しようという構想を立て、部下に命じてそのための船団を準備させることにしたという。彼の船団に乘組む要員としては遠征に従軍中のポイニキア人、キュプロス人、カリヤ人それにエジプト人がそれに充てられることになった。

二 この時にあたってアレクサンドロス側近のヘタイロイのなかでもっとも信任厚いひとりであったコイノスガ、病を得て死ぬと、アレクサンドロスはさし当ってできる限りの手を尽して盛大に彼を葬ってやった。それが終ると彼は側近のヘタイロイと当時彼の許にやって来ていたインド人の使者たち全員を招集して、これまでに服属させたインドの地、二千以上もの町を含む併せて七つの種族には、ポロスを王として指名した。その上で彼は全軍を次のように区分けした。まずアレクサンドロス自身は近衛歩兵部隊の全員と弓兵隊、アグリアネス人部隊それに騎兵親衛隊を自分とともに船団に乗りこませることにした。またクラテロスは彼に託された歩兵部隊と騎兵部隊をひきいてヒュダスPes川を右岸沿いに進むこととなり、今一方の川岸伝いに最大最強の軍勢と当時およそ二百頭にも達していた戦象とを引率して前進することになったのはヘパイスティオンであった。この部隊にはソペイテスの王

3 城の地を目ざして急速前進せよという指示がなされていたのである。インドス川の向い〔西〕側、バクトリアにいたる一帯を統治していたピリッポスにたいしても、三日の間を^{*}おいた上で手勢をひきいて彼らの後を追うよう命令が発せられた。ニュサ人の騎兵隊も〔この時〕ニュサへ返されたのである。船団の指揮をとったのはネアルコスであつて、アレクサンドロスが坐乗した船に操舵手をつとめたのはオネシクリトスであつた。このオネシクリトスはアレクサンドロスについて書きとめた記録の中で、実際は操舵手でしかなかったのに自分が船団の指揮官だつたように4 記していて、この点でも嘘を書いているのである。船団の船の数は私が依拠するところもとても大きいラゴスの子プトレマイオスの伝えによれば、三十人橈船約八十隻をはじめ馬運搬船や荷運び船^{ぶね}を含めて大小の船舶、その他以前から川筋を往き来しているものであれ、当時新たに建造されたものであれ、およそ有りとあらゆる川船を合せて全部でほとんど二千隻にも達する数にのぼつた。

三 一切の準備が完了すると部隊は夜明けを期して乗船を開始した。一方アレクサンドロス自身はその間仕来りに^{のつと}則つて神々に供犠の式を行ない、また占師たちの勧めに従つてヒュダスぺス川にも犠牲をささげた。彼はさらに船に上がると舳^{みよし}に立つてこのヒュダスぺスばかりでなくアケシネス川にも呼びかけながら、黄金づくりの鉢から川中へ酒をそそいで灌奠の儀式を執り行なつた。アケシネス川はヒュダスぺス川と合流する諸々の河川のうちでも最大の川であり、このふたつの川が合流する地点もさほど遠くはないと聞いていたからだが、彼はまたそのアケシネス川がヒュダスぺス川とともに流れ入るインドス川のためにも、これに呼びかけながら酒を^{そそ}ぐいたのであつた。アレクサンドロスは祖先に当るヘラクレスとアモンその他、日頃祀るのを慣わしにしている神々のためにも灌奠の儀式を済ませると、ラッパの音で出発の合図をさせた。合図が発せられるとともに〔船団は〕整然と動きはじめた。川を下るに当りてんでばらばらに航行してお互いに衝突事故を起こすことがないよう、貨物船同士はどれ程の間隔をとるべきか、また馬運搬船同士はどれ程、軍船はどれ程の間隔をとつて船団を組むべきかが予め指示されていたか

3 らだ。快速船にたいしても船団の列を外れて先に出ることは許されなかったのである。漕ぎ進む賑やかな騒々しきときでは何に譬えようもなかった。たくさん船からは水をたたき、櫓の音が見事に揃って川面にひびいた上、漕ぎ手たちにストロークの始め終りを号令する整調手の掛け声も、調子を合せて一斉に櫓音高く川水を打ちながら漕ぎ手が発する関の声も、それ程に勇壮をきわめたからだ。川の兩岸はあちこちで船よりも高くせり上がっていたから、そうした喚声を狭く凹んだ水路に籠らせ、無理に閉じこめられたその分だけ一層増幅された喚声を兩岸にこだまさせた。しかも川の兩岸のここ彼処には密林が繁茂していて、それがまたその森閑とした広い空き地のために、また4 物音のはね返りもあってなおのこと音量を拡大させたのであった。それに馬が船に乗っているなど、インドではかつて見られなかった図なので（けだしディオニュソスのインド遠征が船で行われたことは、もうインド人たちの記憶からは失せていたからだ）、この時馬の群れが輸送船で運ばれる光景はそれを目撃した現地の住民たちをひどく驚かせ、出発のその場に居合わせた者たちは長い道程を船団の後を追ってきた。のみならず漕ぎ手たちの掛け声だの、櫓の騒々しい物音だのが、もうすでにアレクサンドロス側に靡いているインド人たちの耳にも届くと、それを聞いた者たちもまた川岸へと馳せ下つてきては、土地の鄙歌をうたいながらどこまでもついてくるのであった。数ある種族のなかでわけてもインド人は、ディオニュソスとこの神につき従う信者たちとがインドの地で狂宴乱舞の祝祭をくりひろげたその時以来、歌舞音曲が殊の外に好きなのである。

四 こんな風に航行を続けて三日目にアレクサンドロス（の船団）は、予めパイステイオンとクラテロスとにたししそれぞれ相對する岸辺ながら同一の地点に止當するよう指示しておいた、その地点に到達した。そこで二日間停泊している間にピリッポスが残った部隊をひきいて彼に追いついてくると、アレクサンドロスは彼が引率してきた部隊をそのまま彼に託した上、アケシネスの川岸に沿って進むよう指示してピリッポスをアケシネス川へと向わせた。彼はまたクラテロスおよびパイステイオンがひきいている二手の軍勢にたいしても、それぞれどこに進路

2をとるべきかの指示をあたえた上で、彼らをふたたび出発させたのである。一方彼自身はヒュダスPes川の川下りをつづけた。このヒュダスPes川の川幅は川下りの間を通じて二十スタディア（約三・六八キロメートル）より狭まることは決してない。アレクサンドロスは船泊りに適した場所が見つかりしだい接岸投錨しては、ヒュダスPes川沿いのそのあたりに住むインド人で、降伏してくる者たちには協定を結んでその降伏を認め、また抵抗してきた連中にたいていはこれを力づくで服従させていったのだ。それからアレクサンドロスは速度を上げてマッロイ人とオクシュドラカイ人の地へ船団を進めた。そのあたりのインド人のなかでは彼らが数ももっとも多いし、好戦的なことでも一番だと聞き込んだからである。しかも相手は女子供を彼らのもつとも防備堅固な町に移した上、アレクサンドロスにたいしてはあくまで抗戦の決意でいることが彼に伝えられたからでもあった。そんなわけで彼の方としては相手が戦闘態勢もまだととのわず準備にもこと欠き、取込みでゴった返しているその最中に攻撃をかけんものと、一層航行の速度を上げさせたのである。二度目の出立から数えて五日目に彼（の船団）は、ヒュダスPes川とアケシネス川との合流点に達した。これらの川が合流している箇所ではふたつの流れがごく幅の狭い一本の川に合わさっており、その流れも川幅の狭さに堰かれて一段と速く、その上逆流までも生じて異常に大きい渦ができ、川水は波立ち轟々と音を立てて流れていて、川筋からかなり離れたところにおいても波立つ轟きは耳に聞こえる程なのだ。そういった事情は現地の住民たちの口から予めアレクサンドロスに伝えられており、アレクサンドロスからはまた麾下の將兵にたいしても、事前に警告が発せられていたのであった。それでも彼らが合流点に近づくにつれ、流れの響動は人を圧倒するばかりに高まると、船員たちは橈を漕ぐ手を誰に命令されるともなく止めてしまった。整調手が驚き怖れるあまり号令をかけ忘れて黙りこんでしまい、船員たち自身の方も鳴りとよむ轟音にただ茫然自失の体だったのである。

五 そこでいよいよ合流点が間近にせまると船の操舵手たちは、橈を力一杯漕いで狭いところを切り抜けるよう

に指令を出した。船が大渦に巻きこまれてそのために転覆させられるといったことのないよう懸命に漕いで、水中2の大渦を乗り切るように船を持っていかせたのだ。ずんぐり型の船の場合は、たまたま流れに引きこまれてぐるぐる旋回させられることはあっても、乗組員が驚き騒ぐだけで渦のなかでも何ら被害を蒙ることはなく、かえって流れそのもののおかげで船体をまっすぐに立てながら、進路を一直線に保ったのだが、細長型の船の場合はそんな風は無傷で、渦巻く流れをうまく乗り切るといわけにはいかなかった。この型の船は「舷側が」ずんぐり型のように水しぶきを上げる波の上に高く顕われてはいなかったので、漕ぎ手の席が二段式になっている船だと、下段の櫓は水面から上にはんの僅かしか上がらなかったからだ。船が横ざまに渦に突っこんだとなると、せめて渦巻く川水に掴まる前にいち早く櫓を立てない限り、櫓という櫓は折れ砕けてしまうのであった。このようにして損害を受けた船は少なからぬ数にのぼった。しかも内二隻は互いに衝突して船そのものが沈没し、船に乗っていた者たちもその多くが失われたのである。しかし川幅がしだいに広がってくると流れもようやくそれまでのように荒々しくはなくなり、渦ももう同じように強くは巻かなくなった。アレクサンドロスはそので船団を川の右岸に着けることにした。船団が碇を下ろしたところは流れから外れて水も淀んだ避難場所で、格好の船泊ふなどまりを成していたし、しかも川に向って突き出た箇所があつて、難破した船の船体を取り集めるにも好都合だった。難破した船がまだ船体に生存者を乗せているような場合は、アレクサンドロスはその者たちを救助させたのである。損壊した船の修理が終ると彼はネアルコスに命じて、マッロイ人の領地の国境くにざかいに到着するあたりまで川を下るよう指示し、一方彼自身は現地住民のうちでまだ彼に靡いていない者たちの土地に侵入攻撃をかけ、彼らがマッロイ人を支援できないようにした上で、ふたたび船団に合流したのであった。

5 その地点ではまたヘパイステイオンもクラテロスもそれにピリッポスもすでに、それぞれ麾下の軍勢をひきいて彼の許に集結を終えていた。彼はそこで戦象の集団とポリュペルコンの「歩兵」部隊、それと弓兵隊およびピリッポ

ス麾下の軍勢に命じてヒュダスぺス川を〔西〕対岸へと渡らせ、クラテロスにこれら部隊の指揮をとらせることにした。彼はまたネアルコスにも船団をひきいて先に川を下るよう指示し、軍勢〔が発発する〕よりも三日早く船団を進発させたのである。アレクサンドロスは残った軍勢を三隊に分けると、まずヘパイスティオン（の部隊）はこれを五日分だけ先行させることにした。自分の部隊から脱走する者が出て先へ先へと懸命に逃げのびようとしても、〔先行する〕ヘパイスティオン部隊の手に落ちて捕えられるようにしたのだ。さらに彼はラゴスの子プロトレマイオスにも軍勢の一部を託し、この方には三日だけ遅れて追尾してくるよう指示した。彼自身の配下から脱走してふたたび後方に逃げもどろうとする者があれば、その連中が今度は〔後詰の〕プロトレマイオス部隊におさえられるように計らったのである。先発する部隊にたいしては、部隊がアケシネス川とヒュドラオテス川の合流点まで到達したならばそこで前進を停めて、アレクサンドロス自身が到着するまで、またクラテロス部隊とプロトレマイオス部隊とが彼に合流してくるまで、その位置で待機するよう指示されたのである。

六 それから彼自身は近衛歩兵部隊に弓兵隊、アグリアネス人部隊、「アステタイロイ」と呼ばれるペイトン指揮下の〔歩兵〕部隊、騎馬弓兵隊の全員とそれにヘタイロイ騎兵隊の半数をひきいると、水のない地域をマッロイ人に2向って進軍した。マッロイ人というのは独立自治のインド人に属するインド人の一種族なのである。第一日目にはアケシネス川からおよそ百スタディア（一八・四キロメートル）へだたった、さして豊かでもない水場の近くに止営した。彼は將兵に食事をとらせ短時間の休息をさせると、陣中に触れ回らせて各自何でも携帯している容器という容器には水を十分充たすように指示した。その上で彼はその日の残りの時間と夜の間をぶっ通しで、およそ四百スタディア（七三・六キロメートル）の距離を踏破して、明け方には多くのマッロイ人が避難して逃げこんでいる、とある3町に到達した。マッロイ人の方はいくらアレクサンドロスでもまさかあの水無しの土地を突破して自分たちのところ押し寄せて来ることはあるまいと思っていたので、大多数の者がそれも丸腰で町の外に出ていたのである。ア

レクサンドロスがどんな理由からその道筋をとったのかはまさにこの有様からも明らかになった。その道を彼が辿るのは容易なことではなく、だからこそ敵方にも彼がそこを進軍してくるなど、およそ信じがたいことに思われていたからなのだ。実際アレクサンドロスは敵襲など全く予想もしていなかった彼らに襲いかかったのであって、相手方は手近かに武器もないため反撃に転ずることもできず、多くの者たちが殺戮されてしまったのである。残った連中が町のなかに封じこめられてしまうとアレクサンドロスは、その時はまだ密集歩兵部隊が彼の許に到着していなかったので騎兵隊を防柵代りに用い、彼らを城壁のまわりにぐるりと配置した。しかしその歩兵部隊が到着したとなると、アレクサンドロスは即刻ペルディッカスに、その指揮下にある騎兵隊とクレイトスの騎兵隊およびアグリアネス人部隊を付け、現地のインド人多数が避難して逃げこんでいる別のマッロイ人の町へと彼を派遣した。アレクサンドロスはその彼に市内の者たちの動きを監視するよう、ただし自分が到着するまでは戦闘に入ってはならないと指示したのである。つまりこうすることによってこの町から脱出した住民の一部が、アレクサンドロスはもうすぐそこまで迫っていると他の現地民に通報することのないようにしたのであった。そのように措置した上で彼自身は囲壁の攻撃にとりかかった。一方現地住民の方は攻略戦の過程で多くの人命が失われ、残った者たちも手傷を負って戦闘不能の状態に陥るといふ有様で、もはやこれ以上は守り抜けないと見て囲壁の防衛を放棄してしまった。彼らは次いで砦に立てこもってなおしばらくの間は、攻撃するにも困難な高みから抵抗を続けたが、マケドニア軍は四方八方からはげしくひた押しに攻め立て、アレクサンドロスもまたみずからここ彼処（かこ）と戦闘の現場いたるところに姿を見せたので、砦は強襲によってついに攻略され、そこに逃げこんでいた者たちもその全員が命を落したのである。その数はおよそ二千人にも及んだ。

6 さてペルディッカスの方は差し向けられた目当ての町に行き着いてみると、町がもぬけの殻になっていることを知った。しかし住民たちもまだ町からさほど遠くの方まで逃げてはいないことが分ると、逃げる彼らの後を騎兵で

全速追跡してこれに追討ちをかけることにした。軽装兵部隊もまた徒歩ながら最大限に急いで彼に追尾したのである。逃げ走る相手に追いついた彼は、湿地帯へといち早く逃げ隠れなかった限りの相手をここで残らず殲滅してしまった。

七 アレクサンドロスは麾下の將兵に食事をさせ休息をとらせたあと、夜の第一刻ごろふたたび前進を開始し、夜を徹してかなりの道程を踏破したあげく、明け方になってヒュドラオテス川に到達した。そこまで来て彼にも、マッロイ人のほとんどがもうすでに川を渡り終えてしまっていることが判明したが、それでも彼はその時ちようど2渡りかけていた者たちに攻撃を加えてその大部分を渡河の最中に斃したのであった。彼自身の方もそのままだちに同じ渡で川を押し渡って追撃を続け、退却にあたってこちらに先んじた連中をばげしく追い詰めた。彼は相手の多くを殺戮し一部はこれを生きながら捕虜にしたが、それでも大多数の者は堅固な防壁で固めた場所に逃げこんでしまった。アレクサンドロスはそこで歩兵部隊が彼に追いついてくるのを待って、ペイトンに彼の部隊と騎兵隊の3二箇部隊を付けて、彼をそこへ立ち向わせることにした。このペイトンの部隊はその場所を攻撃すると一撃の下にこれを攻略し、そこに逃げこんでいた者たちは攻略戦の間に命を落さなかった限り、その全員を奴隷とした。この任務を果し終えるとペイトンの部隊はふたたび陣営に帰還したのである。

4 そこでアレクサンドロス自身はブラフマネス人の、とある町に向って軍を進めることにした。そこにもまたマッロイ人の一部が逃げこんでいることを知ったからだ。その町に到着すると彼は、ひしひしと固く戦列を組んだ密集歩兵部隊をぐるり四方から囲壁に向って繰り出した。相手方は囲壁が掘り崩されつつあるのを目にし、しかも飛道具攻撃のために撃退され気味になってくると、彼らもまた囲壁の守りを棄てて砦に難をのがれ、そこでなおも抵抗を続けた。ところがマケドニア軍の小部隊が逃げる相手もろとも砦の内部に入りこんだとなると、彼らは俄然反撃に転じ、戦列を固めてマケドニア人たちを砦の外へ撃退し、退却中の彼らおよそ二十五人を斃したのである。この

時に當つてアレクサンドロスはまわり四方から砦に向けて一斉に梯子を立て掛け、また同時に囲壁の下を掘り抜くように命じた。土台を掘り抜かれて周壁の塔が倒壊し、つなぎの塁壁の一部も破碎されたために、その箇所から一段と砦が攻めやすくなると、囲壁をよじ登ってこれに一番乗りしたのはアレクサンドロスであり、囲壁を確保して6いる彼の姿が人びとの眼に映った。これを見ては他のマケドニア人たちもさすがに慚愧の念に駆られて、此処から彼処^{かしこ}からと周壁を上へよじ登っていったのである。砦もその時までにはもはやマケドニア軍に占拠されていた。インド人たちの一部は家々に火を放ち、そこで火に囲まれて死んだが、大部分の者は戦いながら斃れたのである。こうして全部でおよそ五千人が命を落したが、生きて捕えられた者は彼らの武勇の程を示して僅かしかいなかった。

八 アレクサンドロスはそこに一日滞留して將兵を休息させたあと、その翌日はまた別のマッロイ人たちに向つて軍を進めた。ところが彼らの町々はすでに放棄されていることが判明し、住民たちは荒野に逃げ出していることが知られた。彼はまたそこで一日兵を休ませると次の日、ペイトンと騎兵指揮官のデメトリオスとに各自の手勢をひきいさせ、これに加えて作戦に十分なだけの輕装兵部隊をも付けてやつて、二人を後方の川まで立ち戻らせることにした。彼は二人に川岸に沿つて進み、川の近くには密林がたくさんあるが、その密林のなかに集団で逃げこんだ者たちの一部と、もしも行き合うようなことがあれば、進んで降伏してこない連中は残らず殺戮するようにと指示した。ペイトンとデメトリオスの部隊は實際密林のなかで彼らと遭遇して、その多数を殺戮したのであった。

4 一方アレクサンドロス自身は兵をひきいてマッロイ人の最大の町に向かった。そこには他の町々からも住民多数が避難集結していると伝えられたからだ。しかしインド人たちはアレクサンドロスが向つて来つつあることを知ると、その町をも放棄してしまった。彼らはヒュドラオテス川を対岸に渡りはしたものの川岸が高くなっていたので、5アレクサンドロスの渡河をここでこそ食い止めんものとのまま、その川岸に戦列を組んで頑張っていた。これを聞いたアレクサンドロスは手勢の騎兵隊全部を引き具してマッロイ人が戦列を整えていると報告されたヒュドラオ

テス川へと馳せ向った。歩兵部隊の方は後から彼に追尾してくるよう命ぜられたのである。彼は川筋までやって来て敵が対岸に布陣しているのを認めると、進軍してきた態勢をそのまま、やにわに騎兵隊だけで川の渡へと躍りこんだ。相手はアレクサンドロスが早くも川の中程にあるのを見てとると、川岸の線からさっと後退はしたものの、整然たる戦列はそのままであった。アレクサンドロスの方は手勢の騎兵隊だけでこれを追撃したのである。インド人の方は相手が騎兵隊だけなのを認めると向きを変えて反撃に転じ、その数およそ五万勢猛に攻めかかってきた。アレクサンドロスは彼らの歩兵部隊が緊密に戦列を組んでいると見るや、味方の歩兵はその時まで戦場に到着していなかったため、敵軍のまわりに円を描いて馬を駆けさせながらこれに攻撃を加え、なおもインド人との接戦には入らずにいた。しかしこの間にアグリアネス人部隊とアレクサンドロスが手勢の精兵として引き具してきたその他の軽装兵部隊および弓兵隊の団が戦場に駆けつけ、程遠からぬあたりに歩兵の密集部隊もその姿を現わしたとなると、インド人たちの方はあらゆる危険が一時に自分たちの目前に迫ってきたので、踵を返すなり手近かにあるもつとも守りの固い町へと、今は一目散に逃げこんでしまった。一方アレクサンドロスは退却する彼らを追ってその多数を殺したが、逃げた相手が町の中に封じこめられてしまうと、彼もはじめは騎兵隊をして一気に町のぐるりを包囲させたものの、次いで歩兵部隊が追いついてくると、その日は町の囲壁をとりまく格好で軍を止營させることにした。攻撃にかかるにもその日はもう残り少なかったし、麾下の軍勢も歩兵はその強行軍のために、また騎兵の方もぶっ続けの追撃とわけでも渡河のために、ともどもすっかり疲労困憊していたからである。

九 翌日アレクサンドロスは軍勢を二手に分けると、その一方は自らこれをひきいて囲壁に攻撃をかけた。もう一方の部隊に指揮をとったのはペルディッカスであった。この時はさしものインド人側もマケドニア軍の総攻撃を持ちこたえきれず、市壁の守りを放棄して砦のなかへ逃げこんでしまった。アレクサンドロスとそのひきいる一隊は潜り門を打ち壊すと、他よりもかなり先んじて市内に突入した。これに反してペルディッカスの指揮する部隊の

方は、その多くが梯子を携行していなかったこともあって囲壁を乗り越えるのに手間取り、立ち遅れてしまった。

彼らとしては囲壁に立ちはだかって防戦する敵影を見なくなったので、町そのものももうてつきり陥落したものだと思いこんだからであった。しかし実際には砦はいまだ敵側の確保するところであり、多くの敵兵が砦を死守せんものとその前面に陣を構えている有様が見てとれたので、一部の兵は囲壁の下を掘り崩すことにより、他の兵はどこへなりと立て掛けられるところに梯子を立て掛けることで、砦への強行突入を企てたのであった。けれどもアレクサンドロスには梯子を携行するマケドニア兵の動作がのろのろとまどろっこしく思われたので、担いでいるひとりからその梯子を引いたくろみずから囲壁にそれを立て掛けると、楯の陰かげに身を潜ひそませながら上へ登っていった。彼に続いたのはアレクサンドロスがイリオンなる女神アテネの神殿から持ち来たって常に身辺から離さず、合戦のさいにも自分の前方に進ませた、かの聖なる楯を捧持するペウケスタスであった。その彼の後には同じ梯子を伝って護衛官のレオンナトスが登っていった。別の梯子伝いに登ったのは、将兵のなかで倍額取りのひとりであるアブ4レアスだった。その時もう胸壁の近くにまで達していた王は、胸壁に楯を凭もたせかけて囲壁上のインド人を、あるいは内側へと追い斥けあるいは手にした剣でその場に斃すなどしながら、囲壁上のそのあたりから何とか敵を排除しようとしていた。近衛歩兵たちは王の身の危険を気遣うあまり、同じひとつの梯子に大急ぎで詰めかけたために梯子をへし折ってしまい、そのあげくもう梯子を上の方まで登っていた者たちは転落するし、他の者たちには攀なじ上る方法手段がなくなるという有様になってしまった。

5 アレクサンドロスが囲壁の上に立つと彼は四方八方、近くの見張塔から矢玉を浴びせられるようになった。インド人は誰ひとり勇を鼓して彼に近づこうとはしなかったからだ、その見張塔からばかりか彼はまた町中なかにいる敵からも、近距離から投槍を放つ格好の目標とされたのだった（囲壁と相対してちょうどそこには、やや小高くなつた土塁があつたからだ）。アレクサンドロスは身につけた武具のきらびやかさからしても、その人並み外れた勇猛果

敢ぶりからしても、今はひととき目立つ存在となったが、その彼も今いる場所にじっと停まっただけでは、所詮言うに足る勲^{いさおし}ひとつ樹てないまま、いたずらに危険に身をさらすばかり、もしここで思いきって圜壁の内部に躍りこめば、まさにその行動でもって必ずやインド人たちの胆を挫^ひぐことになるう。さなくともどのみち危険を冒さねばならないのは同じことだとすれば、いっそ華々しく敵と戦い、天晴れ後の世にも語り継ぐべき輝かしい勲^{いさおし}を残してここに討死しよう——そう決意したのであった。彼はこう決心すると圜壁の上から砦の中へと跳び降りたのである。跳び降りたそこで彼は圜壁を背の支えにすると、至近距離に迫ってきた若干のインド人たち、なかでもひときわ大胆に跳びかかってきたその隊長を、手にした剣で刺し殺し、近づく別の敵には石を投げつけてこれを阻み、更なる新手の敵をも石でくい止め、身近に肉迫してきた相手にはこれまた剣で応戦した。こうなると現地民たちももうこの上彼に直接襲いかかろうとはせず、彼を遠巻きに取り囲んで何によらず、偶ま携えていた、あるいはその時手に取ることできた飛道具を浴びせかけるようになった。

一〇 この時ペウケスタスと倍額取りのアブレアス、これに続いてはレオンナトス、この三人だけがちょうど梯子がへし折れてしまうより早く圜壁上に登りついていたので、彼らもまた跳び降りるなり王を守って戦闘に入った。倍額取りのアブレアスは真向から顔に矢を受けてその場に斃れ、アレクサンドロス自身もまた胴鎧を貫いて胸は乳頭の上部に矢を射当てられた。プトレマイオスが伝えるところによると、息も血と一緒に傷口から吐き出されたといい。アレクサンドロスはその血がまだ温かい間は、苦しい状態にありながらも防戦に力めたのだったが、多くの血液が呼吸するにつれてどっと溢れだすと彼は目が眩^{くら}み気を失って、そのまま楯の上に崩折れてしまった。ペウケスタスは昏倒した王を庇って立ちはだかると、イリオンから持ってきた聖なる楯を振りかざして彼の身を護り、レオンナトスの方も反対側で防戦に立った。彼らは二人とも矢傷を受けたが、アレクサンドロスはこの時すでに出血多量で瀕死の状態にあったのだ。マケドニア軍の攻撃も実際のところこの付近では手詰りの状況に立ちいたってい

た。アレクサンドロスが囲壁の上で矢面やおもてにさらされて砦のなかへ躍りこむのを目撃した将兵は、自分たちの王が前後の見境もなくあえて危険に挑んで、ひどい目に遭うのではないかという焦りあせと恐れから、梯子はもう折れてしまつて使いものにならなかつたし、この窮地にあつて今はどうしたらよいか、てんでに囲壁をよじ登る手段方法を案出したのであつた。ある者たちは粘土でできた囲壁に杙えを打ちこんでそれを足掛りに苦心惨澹の末によじ登り、別の将兵は互いにそれぞれの肩を貸し合つて登つたのである。一番乗りで上にあがつた者は自分もまた囲壁から町の内な部へと身を躍らせたが、そこで彼が目にしたのは地上に横たわつた王の姿であつた。そこでは誰もがうめき声とも雄叫たけびともつかぬ声を挙げたのだ。倒れた王の周囲ではすでにして、マケドニア人たちが入れ替り立ち替り楯を前方にかざしながら、彼を護つて激しい戦闘が始まつていた。一方その間に一部の者は、つなぎの塁壁にある門を固く閉ざした門かぬきをこじあけて、小人数ずつを内部へもぐりこませ、また別の組は門扉がすこし開いたところに肩を押し当てる。囲壁の内側へ扉を押し開かせ、その地点で砦への突破口を拓いたのであつた。

一一 ここにいたつて彼らの一部はインド人たちの殺戮に乗り出した。實際相手を皆殺しにしたのであつて、女子供といえども容赦はしなかつたのだ。一部の者は王を楯に乘せて運び出したが容態は危険で、生命を取りとめられるかどうかともいまだに覚束ない有様だつた。ある著作が伝えるところではクリトデモスという、コス島の出身でアスクレピアダイの家系に属する医師が傷口を切開して、患部から鏃やじりを抉出てきしゅつしたという。また一説によればこの危急の事態にあつて医師も手近にはいなかったため、護衛官のペルディッカスがアレクサンドロスの命を受けて自2分の剣で傷口を切開し鏃を取り出したとも伝えられる。取り出すさいに多量の出血があり、そのためアレクサンドロスはふたたび気を失つたが、出血の方はこうして気絶したおかげで止まつたのであつた。この王の遭難事件については記録者たちも多くさまざまなことを書きとめているが、聞書ききがきは最初に虚伝が書かれたそれに倣つて、同じ誤りをそのまま受入れ引継いでおり、その命脈を今日にいたるまで保ち続けているのである。これなるこの記録に

よってそれに歯止めをかけない限り、虚伝はなおも順送りに他の作物へ受け継がれて止まるところを知らないことだろう。

3 まずその一例として通説は、この遭難事件がアレクサンドロスの身にふりかかったのはオクシュドラカイ人の許でのことだとしているが、事実は独立自治のインド人種族であるマッロイ人のところで起こったことであり、その町はマッロイ人の町、アレクサンドロスに矢傷を負わせたのもまたマッロイ人であった。たしかに彼らはオクシュドラカイ人と結んでその上で一戦を交えんものと決意してはいた。けれどもアレクサンドロスの方はオクシュドラカイ人から彼らの許へ何らかの援軍が到着するより前に、あるいはマッロイ人の側がオクシュドラカイ人に救援の手をさしのべる以前に水のない荒地を踏破し、相手に先んじてこれに軍を進めたのであった。ダレイオスとの最終決戦についても同じことが言える。この合戦でダレイオスは遁走し、ベッソスとその一味の手で身柄を拘束されるにいたるまではその逃避行を続け、結局はアレクサンドロスがもはや間近に迫ったとなつてついに弑逆されたわけだが、この最後の決戦を通説は、それに先立つイッソスの合戦やグラニコス河畔での最初の騎兵戦とまったく同様5に扱って、アルベラの近くで起こったことだとしている。しかし騎兵の合戦はたしかにグラニコス河畔で起こり、ダレイオスとの戦が再度行われたのも事実イッソスでのことだったのに反して、アルベラはダレイオスとアレクサンドロスが雌雄を決したその実際の場所からは、これを最大に見積る著作家の伝によると六百スタディア（二一〇キロメートル強）、もっとも近く見積る著作家の場合でもおよそ五百スタディア（九二キロメートル）は離れているのだ。プトレマイオスとアリストプロスとはこれとは別に、合戦はガウガメラのブメロス河畔で起こったと伝えているので6ある。そのガウガメラはもともとが町ではなく大きな村にすぎなかった。場所は名が通っていないし村の名前そのものも響きがよくない。そこから思うにアルベラの方は町だったから、おそらくこの大きな合戦が行われたという名声を引っ攫ってしまったものだろう。それにしてもかの戦が実際にはアルベラからそれ程にも離れたところで起

こったのに、アルベラ付近で起こったのだと、考えねばならないのなら、サラミスの海戦はコリントスの地峡部で、あるいはまたエウボイア島アルテシオン沖での海戦はアイギナ島カスニオン付近で起こったのだと言っても差支えないことになるだろう。

7 今ひとつ、アレクサンドロスの危急に楯をかざして彼を護った人びとに関してだが、ペウケスタスがその中にいたということについては広く誰の意見も一致している。ところがレオンナトスそれに倍額取りのアブレアスとなると、もはやそうはいかないのだ。また一説によるとアレクサンドロスはその兜を棍棒で強打され目が眩くらんで倒れたが、ふたたび起き上がったところを胸に、胴鎧を貫通する矢傷を受けたのだという。これに反しラゴスの子プトレマイオスは、傷は胸部に受けた傷一か所だけだと言っている。しかし何といってもアレクサンドロスについての事蹟を書きとめた記録者たちの最大の誤りは、この私に言わせれば次の点にあるのだ。つまりある記録者はラゴスの子プトレマイオスが、ペウケスタスと一緒にアレクサンドロスの後を追って梯子伝いに登り、倒れた王を楯をかざして庇ったのであって、彼が「救ソツい手」の異名を奉られたのもその理由によるものだと書いている。それでも他ならぬプトレマイオス本人が書きとめているところでは、自分はその戦闘に参加さえてはいない、自分の部隊をひきいて別の現地民と別の戦闘を交えていたのだからというのである。話が横道にそれたが、このことは私としては是非書きとめておかねばならない。これ程にも重要な事績と遭難事件に関することで将来の人びとを誤らせてはならないからである。

一二 アレクサンドロスがそのまま現地にとどまって傷の手当を受けている間に、彼がマツロイ人にたいする出撃基地とした陣営の方には、負傷がもとで王が亡なくなったという第一報が届いた。次から次へと噂を伝え合うにつれて最初は深い痛哭の声が全軍を押し包んだ。しかし一時いつときの悲嘆が収まると彼らはすっかり気落ちして、これから2 いったい誰が軍の指揮をとることになるのか途方に暮れてしまった。(實際候補者としては多くの指揮官の名前が挙

がりはしたものの、その実力声望ということになると、アレクサンドロスが見ても広くマケドニア人たちの眼から見ても、いずれは似たり寄ったりだったからだ。そればかりか彼らは、自分たちが周りをぐるりと好戦的な種族に取り囲まれている現在、これから先どんな風にして安全無事に祖国まで帰り着けるものか、その点でもまた途方に暮れてしまった。現地の種族の中にはまだ我に靡いていない者たちもいて、考えてみれば彼らはいつ何時自由自立のために気負い立って戦闘を挑んでこないとも限らない、中にはまたアレクサンドロスにたいする畏怖から解き放たれた今、一気に反乱へと起ち上がる者たちさえあるかもしれないのだ。実際当時の彼らはまったく、川の中程で渡り切りもならず立往生してしまったかの思いに捉えられたのであり、アレクサンドロスが居なくなったとなると3彼らにはもう何もかもがどうしてよいのか分らず、お手上げの状態に見えてきたのだった。やがてついにアレクサンドロスは死んではないという知らせが入った時も、すぐさまそれを真に受ける者はほとんどなかった。たとえ命が助かる状態にあるとしても、そのことにとても確信は持てなかったのだ。そこへ王の許からもうじき基地に帰還するという書面が届いたその時になってもまだ、大方の者には不安のあまり、それが信ずるに足る情報だとはとも思えずあれこれ考え併せて、これも王側近の護衛官や指揮官たちが仕組んだ芝居ではないかと推測したのであった。

一三 アレクサンドロスの方はこうした様子をも考慮すると軍中に何か不穏な事態が発生するのをおそれて、担送されても大丈夫という目途が立つと早速にも、自分をヒュドラオテス川の岸边まで運ばせ、そこから船で川を下った。(基地は当時ヒュドラオテス川とアケシネス川との合流地点にあつて、ヘパイステイオンがそこで軍をあずかり、ネアルコスが彼の艦隊をひきいていたからだ)。王を乗せた船が基地に近づいたとなると、彼は自分の姿が皆によく見えるように、艦に張った日除けの蔽いを取り除けさせた。陸の将兵はそれでもまだ実際はアレクサンドロスの遺体が運ばれてきたのではないかと疑っていた。事実少なくとも船が岸边に着き彼が人だかりに向って手を振ってみ

せるまではそうだったのだ。彼らの中には両手を高くさし上げて歓呼する者たちもあれば、アレクサンドロスその人に向って両手を差し出す者たちもいた。そして大方はこの思いもかけなかった再会に、思わず知らず涙で頬を濡らしたのだった。アレクサンドロスが船から陸に移されると数人の近衛歩兵が、彼のために用意した担架を持ち出したが、彼の方は馬を曳くように命じた。こうして馬上の彼の姿がふたたび衆目の前に現れると、全軍を挙げての盛んな拍手はしばし鳴りもやまず、岸边や川沿いの木深い谷間にこだました。やがて幕舎に近づいた彼は、歩くところも見られるようにとわざわざ馬から下りてみせもしたのである。すると並いる者たちはこちら側からもあちら側からも彼に走り寄ると、彼の手に触れる者もあれば膝に触れる者もあり、彼の着ているものにさわる者もあれば近くまで寄ってきてしげしげと彼を見つめ祝いの言葉をかけてからそこを離れる者もあった。中には束ねてつくった花環を彼に投げ送ったり、あるいはその時節のインドに咲く花という花を彼に浴びせかける者たちもいた。

4 一方ネアルコスが語るところによると、王側近の友人たちの中でも王がみずから部隊の先頭に立って危険に身をさらしたことを咎めた者たちはいずれも皆、彼の不興を買ったという。側近の友人たちが口にしたのはつまり、あんなことは一軍をひきいる者のすることではない、兵士のやることだというのであった。アレクサンドロスが彼らの批判にたいして腹を立てたのは、思うにその言うところが一々尤もであって自分としては非難されても仕方がないということ、彼自身がよく弁えていたからこそなのだろう。にもかかわらずその時の彼には、戦闘の興奮と名誉にたいする執着に熱くなつたあまり、ちようど何か他の快樂への誘惑に負ける人間のように、危険から身を避けているだけの強い自制力がなかつたのである。またこれもネアルコスが語っているところでは、年とつたポイオティア人でその名前は伝えられていないある男が、アレクサンドロスが友人たちの苦情に腹を立てて膨れっ面をしていると聞くと、彼のところに出向いて行ってそのポイオティア訛でこう言つたという。「アレクサンドロスよ、大事をなすは男子たるものの本懐ではないか」。これに続けて短長格の詩句を言い添えたがその意味は、およそ大事をなす

者に苦難は付きものだったのであった。そこでこの男はその場で即座にアレクサンドロスの御意に叶ったばかりか、その後も王のとりわけ親しい仲間に加えられたという。

一四 その頃のことマッロイ人の生き残りを代表する使者が、種族の降伏を申し入れにアレクサンドロスの許へやってきた。オクシュドラカイ人からもまた町々の首長とそれにこの地方一帯の統治者までが、その他主立った有力者百五十人と一緒に協定取決めの全権を委ねられてやってきた。インド人たちの間では最高に珍重される種々の献上品を持参して、この彼らもまた種族挙げての投降を申し出てきたのであった。彼らの言い分によれば、自分たちがアレクサンドロスの許にもっと早く使者を送らなかつたという、その点で犯した過ちは、十分大目に見て頂ける筋合のものだ、自分たちは他所の土地の誰彼と同じように、というより何処の誰よりも自由かつ自治の身でありたいと強く希っているものだが、その自由は実にディオニュソスがインドにやってきたその時からアレクサンドロスの今日にいたるまで、我々の間で大事に守り伝えられてきているものだからだというのであった。しかしアレクサンドロスもまた神の裔だという話が広く流布しているからには、もしアレクサンドロスがお望みとあれば、我々としてその任命される太守を受け入れよう、またその定められる課税額を納めもしようし御要求になるだけの数、千人を差し出しもしようと言ってきたのである。アレクサンドロスはそこで種族民のなかからもっとも強壯な者一千人を差し出すよう求めその者たちを、その気になればいつでも人質として拘束することにし、その必要がなければ他のインド人諸族にたいする彼の戦が完了するまで、兵員として軍に同行させることにした。オクシュドラカイ人の方もこれに応じて、自分たちの間からもっとも強壯な堂々たる体格の一千人を選抜すると、これは要求にはなかつたものだが、戦車五百輛にその搭乗員をつけてこれらを送って寄越したのである。そこでアレクサンドロスは彼らと生きのびたマッロイ人を統治する太守としてピリッポスを任命した上で、人質は彼らに返してやり、ただし戦車だけは手許に留め置くことにした。

4 彼はこうしたことを片付けてしまうと、負傷が元で滞留を続けていた間に多くの船が追加建造されていたので、それらにヘタイロイ騎兵の千七百人とこれまで通りの数の軽装兵、それに歩兵約一万を乗船させてヒュドラオテス川をしばらく下ったが、このヒュドラオテス川はやがてアケシネス川と合流して、名前の上ではアケシネスの方がヒュドラオテスを凌ぐようになるため今度はそのアケシネス川を下って、この川とインドス川とが合流する地点に5まで到達した。これら四本の舟航可能な大河は四本ながら全部その川水をインドス川に注いで、いずれもその固有の名前を失ってしまうのである。すなわちヒュダスス川はアケシネス川に注いでその川水をすべて注ぎこむとアケシネス川と呼ばれるようになり、今度はそのアケシネス川がまたヒュドラオテス川と流れを一本に合せるが、アケシネス川はこれを受け入れながらもやはりアケシネス川である。この後アケシネス川はヒュパシス川をも取り込むがそれでもなおアケシネスという固有の名前はそのまま、やがてインドス川に流れ入るのである。インドス川はその合流点から三角州^{デルタ}に分岐するまで川幅実におよそ百スタディア^{二八・四キロメートル}、おそらくそれ以上に及ぶことは間違いない。そのあたりになるとこれはもう川というよりはむしろ湖水を成しているのである。

一五 アケシネス川とインドス川の合流点のほとりでアレクサンドロスは、ペルディッカスが途上自治独立のバスタノイ族を討ち従えた後、軍勢をひきいて彼の許に到着してくるまで待つことにした。その間アレクサンドロスの船団には、クサトロイ人たちのあいだで彼のために建造が進んでいた三十人橈船やずんぐり型の船々が新たに加わってきた。別の独立自治のインド人種族であるヘソグドイ人^{ヘソグドイ人}も彼に帰順してきた。これもまた独立自治のインド族だがオッサディオイ人のところから使者がやってきたのも、この頃のことだ。彼らもまたオッサディオイ人の降伏を申し出てきたのである。アレクサンドロスはそこでピリッポスが統治すべき太守領の境界をアケシネス川とインドス川の合流地点に画定し、トラキア人全部とそれに歩兵諸部隊のうちからこの地域を警備するのに十分と思われるだけの兵力を抽出して、これらを合せピリッポスの許に残すことにした。アレクサンドロスはまた二本の

川が合流しているちようどその地点に町を建設し、併せて船渠^{ドック}をつくるようピリッポスに指示したが、それはここに新しく建設される町が将来必ずや大きく発展し、世の中に有名になろうと期待してのことであった。この頃アレクサンドロスの妻ロクサネの父親にあたるバクトリア人のオクシユアルテスも、彼の許を訪ねてやってきた。そこでアレクサンドロスはテュリアスピスをその従来のパラパミサダイ太守の地位から外すと、オクシユアルテスが代って統治の任に当るよう、その地域を彼の太守領に付け加えてやった。テュリアスピスが解任されたのは彼がその統治権を濫用していることが報告されてきていたためであった。

4 ここでアレクサンドロスはクラテロスとその軍勢の大半、それに戦象の集団をインドス川の左岸に移すことにした。重装備の軍にとっては川沿いの道は、左岸の方が辿りやすそうに見えたし、それに付近に住む種族もその全部が全部友好的とは限らなかったからでもある。彼自身の方はそのまま川を下ってソグドイ人の王城の地にいたった。彼はそこにも別の町を囲壁で固め、また別の船渠を建設して損傷した船々をそこで修理させた。インドス川、アケシネス川の合流点から海に出るまでの地域を統治する太守としては、インドの地の海沿い全域をも含めて（オクシユアルテスと）ペイトンが任命された。

5 アレクサンドロスはクラテロスをその軍勢ともども（アラコタイ人やドランガイ人の地方経由で）ふたたび送り出すと、みずからはインド中でもっとも繁栄を伝えられたムシカノスの王国に向ってさらに川を下った。彼がそこに向けて軍を進めたその理由は、ムシカノスが彼に会いに来て、みずから降伏帰順するとも自分の領地を引渡すとも、いまだに申し出てはいないし、といって友好を求めて使者を送ってくるでもなく、また彼自身、大王としての進物たるに相応しいかなる贈物を送って寄越すでもなければ、アレクサンドロスの方に何かを要望してくるといふこともなかったからだ。川下りは船団の速度をぐんと上げて急速に進められたため、アレクサンドロスが自分に向って進撃を開始したという情報がムシカノスの耳に届くより先にいち早く、アレクサンドロスは相手の領国の

辺境地帯に到達することになった。ムシカノスの方はこれにひどく驚きあわて、大急ぎでアレクサンドロスに会見を求めると、インド人の間ではこよなく珍重される種々の進物をたずさえ手許にいる限りの戦象も全部引連れて、種族も自分も挙げて降伏帰順を申し入れ、その前非を悔いてきた。アレクサンドロス相手では誰でも先ずもって己の非を認める姿勢こそが、こちらの欲しいと思うものをうまく手に入れるのにはもっとも効果的な方法だったのだ。実際その結果としてムシカノスは、その既往をアレクサンドロスから咎められずに済んだのである。アレクサンドロスはその首都と国土の美をたたえた上、ムシカノスが引続きそこに統治するのを認めてやった。一方クラテロスは市内に砦を固めるよう指示を受け、その防壁の構築はまだアレクサンドロスが滞在している間に完成した。警備隊がそこに配置されることになったのは、この場所が周り四方の諸族に睨みを利かせる上で好都合と彼の眼に映ったからであった。

一六 そこからアレクサンドロスは弓兵隊とアグリアネス人部隊および、共に船で川を下った騎兵隊をひきいて、オクシカノスというこの地方一帯の統治者に向って兵を進めた。自分の降伏と自分の領地の引渡しを申し出て本人が出頭して来ることもなければ、その彼の許から使者がやって来ることもなかったからだ。オクシカノスの領国内にある町々のうちもっとも大きいふたつの町は強襲によって一撃のもとに占領された。オクシカノス自身もその二番目の町が攻略された時に捕虜となった。アレクサンドロスは獲得した戦利品を軍中に配分する一方、拿捕した戦象の群れは自分がそのまま引連れてゆくことにした。同じこの地方のその他の町々は反撃に討って出る者もなく簡単に降伏してきた。インド人というインド人はアレクサンドロスとその彼の強運を前にしては、このようにもまったく意気沮喪してしまっていたのである。

3 アレクサンドロスはまた、彼に任命されて山地インド人を統治する太守の地位にあったサンボスに向って軍を進めた。ムシカノスがアレクサンドロスから赦された上自分の領国を引続き統治していると聞いて、サンボスが逃亡

4 したという報告が彼の許に届いたからだ。当時サンボスはムシカノスと敵対していたのである。しかしアレクサンドロスがサンボスの所領の首邑でシンディマナという町に押し寄せてみると、町の門は接近してきた彼の前に開かれ、サンボスの縁者たちもその財貨を一々数え上げた上、戦象の群れを従えて彼に会いに出てきた。彼らの言うところによればサンボスが逃亡したのは、いずれにせよ決してアレクサンドロスに敵意をいだいてのことではなく、5 ムシカノスが赦されたのを危惧するあまりの行動だったのである。この機会にアレクサンドロスは反乱蜂起した別の町を攻略し、ブラフマン階級のうち反乱の主動者となった者たちは残らずこれを殺戮した。ブラフマン階級というのはインド人たちの間では賢者として通っている存在だが、彼らの知恵——といってもそれが実際知恵の一種であるとしてのことだが、その彼らの知恵については、私は改めて『インド誌』のなかで説明することにしよう。

一七 ムシカノス反乱のことが伝えられてきたのもこの頃のことだった。アレクサンドロスは討手として十分な兵力を持たせた上、アゲノルの子で太守のペイントをこれに差し向けた。一方彼自身はムシカノスの支配に服している町々に攻撃をかけ、いくつかの町はその住民を奴隷におとして町そのものを根こそぎ破壊し、別の町々へは警備の駐留部隊を入れて砦を固めさせた。こうしたことを完了したところで、彼は陣営と船団の所在位置へ帰還した2のである。ムシカノスが捕まってペイトンに引立てられてきたのも実に此処だったのであり、アレクサンドロスはこの男を本人の領内で縛り首にするよう命じ、ブラフマン階級のうちムシカノスの反乱を煽動した者たちも残らず同様に処刑した。彼の許にはまたパトラ地方の領主もやってきた。その地方はすでに述べたとおりインドス川によって形成された三角州^{デルタ}であって、その規模はエジプトの「ナイル」デルタよりも更に大きい。その彼もまた自分の領地を挙げてアレクサンドロスに引渡し、己^{おのれ}をもみずからの財産をも一切合財、アレクサンドロスの手に委ねたのだ。3 た。アレクサンドロスは彼をその領地に返してやる一方で、軍の受入れに必要な準備万端をととのえておくよう彼に申し渡した。アレクサンドロスはまたここでクラテロスにアッタロス、メレアグロス、アンティゲネス指揮下の

各〔歩兵〕部隊と弓兵隊の一部、それにヘタイロイ〔騎兵〕やその他のマケドニア人たちのうち、もはや戦闘に耐え得なくなったためマケドニアに帰国させようと前々から考えてきた者たち全員を引率させ、アラコタイ人、ザランガイ人の地方経由で、彼をカルマニアへ向け出発させることにし、その彼には一緒に引連れてゆくように戦象も託することとした。これ以外でしかも自分とともに引続き船で海まで川下りをしない軍勢を……ヘアレクサンドロスは二手に分けると、大部分を占めるその一方の指揮にはヘパイステイオンを宛て、他方ペイトンには騎馬弓兵隊とアグリアネス人部隊を持たせてインドス川を対岸へ渡らせることにした。つまりペイトンにはヘパイステイオンが一軍をひきいて進む予定のとは反対側の岸を行かせることにしたのであり、その彼には従来から防備が固められている町々に住民を集め住まわせるよう命じ、また現地のインド人たちの間から何らか反抗の動きでもあればその治安を確立した上でパタラの自分のところへ合流してくるようにと指示したのであった。

5 船団が航行を続けて三日目のこと、アレクサンドロスの許に情報が入って、パタラ地方の統治者が大方のパタラ人と一緒に、自分の領地も打ち棄てたまま逃亡してしまったことが伝えられた。これを聞くと彼は前よりも一層船脚を早めて川下りを急いだ。しかし彼がパタラに着いてみると町からはすでに住民の姿が消え、田園地方からも農民たちはいなくなっていた。彼は逃散した者たちへの追手としてもっとも軽装敏捷な一隊を差し向けたが、逃げた彼らの一部が捕まると、町はお前たちのもので今まで通りに住めるのだし田畑も耕していいのだから、安心して帰ってくるように伝えよと彼らに申し付けた上、彼らを仲間のところに放ち遣った。その結果彼らのうちの大部分はやがて元の古巣に戻ってくるようになったのである。

一八 彼はヘパイステイオンに命じてパタラの砦を固めさせる一方、周辺の水のない地方に人を遣って井戸を掘らせ、そのあたりを人間の住める土地にしようとした。ところが近くに住む若干の現地住民はこの作業隊を襲い、彼らの不意を突いて一部の者を斃したが、攻撃をかけてきた側もまたその多数を失って荒野へと遁走してしまった。

作業に派遣された者たちはそこで、現地民襲撃のことを聞いたアレクサンドロスから作業支援のため別の部隊を差し向けられたその新^{あらた}手の応援も得て、その仕事を完了することができたのであった。

2 パタラの周辺でインドス川の流れは二本の巨大な川に分岐し、そのいずれもがインドス川という名前のままで海にまで達している。アレクサンドロスはここに泊地と船渠を建設することにした。工事が順調にはかどったので3彼は右手を流れる川筋を、それが海に注ぎ入る河口まで船で下ってみようと思ひ立った。そこで彼はレオンナトスに騎兵一千と重装、軽装備の各歩兵およそ一千八百を持たせて、船団と平行しながら相對するパトラ島を南下させ、自分の方は船団のうちもっとも船脚が速い、有る限りの舟艇に三十人橈船全部と荷運び船若干をひきいて右手の川4筋を下ることにした。ところが近辺のインド人は逃げてしまっていたので水先案内人を見つけることができず、ためにこの川下りにはたいへんな困難が伴うことになった。船出した翌日には嵐が吹き起こり、しかもその嵐は川の流れとは逆方向に吹き募って川水を大きくうねり盛り上げ、小舟は木の葉のように翻弄された。大方の船はこうして手ひどく痛めつけられ、三十人橈船のうちの何隻かにいたってはほとんど全壊の状態になったものの、それでも5川水にまったく呑みこまれてしまう前に辛うじて岸辺に乗り上げて助かるという有様だった。そのためまた新たに別の船々が建造された。アレクサンドロスはそこで軽装兵部隊のうちからもっとも身軽な者たちを選ぶと、彼らを岸辺からもっと奥の方へ遣ってインド人たちを何人か捕えさせ、捕えられたその連中がそこから先の水路を案内することになった。川筋がひらけてその川幅のもっとも広いところではおよそ二百スタディア（三六・八キロメートル）にも達するあたりまで来ると、風は外洋^{そとうみ}の方から烈しく吹きつけてきて、橈を漕ぐ腕も打ち寄せる波に持ち上げかねる程であり、彼らも案内人たちが誘導する水路へとふたたび船を返して難を避けたのであった。

一九 船団がそこに碇を下ろしている間に大洋に起こる引き潮の現象が現れてきた。そのため彼らの船々は乾上がった地面の上に取り残されてしまったのだ。アレクサンドロスの將兵はそれまでまだこうしたことに経験がな

かったので、この現象はそれ自体としてもひどく彼らを驚かせたのだが、それにもましてもっとはるかに彼らを驚かせたのは、しばしの時が経つうちふたたび潮がさしてきて小船がまたしてもふわりと水に浮いた時だった。船々のうちでも泥土のなかに安定よく坐っていた船はいずれも上げ潮に乗ると、それ自体には故障もなくゆらりと持ち上げられ、何の苦もなくまた元のように水に浮いたのである。これに反してもっと固く乾いた地面にそれも不安定な状態のまま残り残された船はどれも、上げ潮が一時に押し寄せてくると、あるいは互いに衝突しあるいは地面に叩きつけられてはらに壊れてしまった。アレクサンドロスはいくつした船々に有りあわせの資材で応急修理をすると二隻の荷運び船を仕立て、島の様子を調べさせに川下を送ることにした。島には彼が海まで川を下るのに利用できる良い泊地があると現地民が言っていたのである。島の名前はキツルウタといった。「この調査隊から」島にはたしかに泊地があつて、島は大きく飲み水もあるという報告が入ると、船団の他の船々も島に移つてその泊地に碇を下したが、アレクサンドロス自身は船のうちでも性能のもっとも優れた船数隻とともに、川が海へ注ぐその河口を見きわめ、またそこまでの航路が無事にたどれそうかどうかを探るために、もっと先の方まで行つてみることにした。島を出ておよそ二百スタディア（三六・八キロメートル）ばかり進んだところで、船の乗組員たちはまた別の島影を遠くに認めた。そしてその島はもはや大海の真只中であつたのである。その時はそれだけに彼らは川中の島までいったん引揚げ、島の突端近くに船泊りしたが、アレクサンドロスはそこで彼がかねがねアモン神から供犠を行うよう命ぜられていたと自称する神々をのこらず祀つて、これに犠牲を捧げたのであつた。翌日彼はあらためて川を下つて海中に浮ぶ別の島まで行き着くとそこに碇を下ろし、そこでもまた（昨日のとは）別の神々のためにそれぞれ異なる供犠をそれぞれに別様の儀式で執り行なつた。へ彼が語つたところではこれらの供犠も、これまたアモン神がその託宣によつて彼にそうするよう指図したのに従つて執り行なつたのである。アレクサンドロスがインドス川の河口を出て大洋にまで船で乗り出したのは、彼の言うところによれば、この大海原のどこか近いところに別の陸

地が盛り上がってはいはしないかどうかを見きわめるためだったという。しかしこの私が思うに彼としては、自分がインドから先の大洋にまでも航海したのだと人にも語れるように、というのがおそらくその主たる理由だったのであろう。其^そ処で彼は牡牛を屠^{ころ}ってポセイダンのために犠牲を捧げるとそれらを海中に投じ、供犠に続いては灌奠の儀式を執り行なって、黄金づくりの鉢とこれも黄金づくりの盃とを感謝の捧げ物として大洋に投げ入れると、自分がネアルコスを付けてペルシア湾さらにはエウプラテス、ティグリス両河の河口まで差し向けようと企てている艦隊を、自分のためにも安全無事に護り送ってくれるように祈願を籠めたのであった。

二〇 アレクサンドロスがパトラへ立ち戻ってみるとそこではもう砦は圜壁で固められており、ペイトンもその派遣の目的をすっかり達して麾下の軍勢を引連れ到着したところだった。ヘパイスティオンには新たに泊地の防備を固め船渠の建設を進めるのに必要な一切の資材を調達するという任務があたえられた。それというのもアレクサンドロスとしては其^そ処つまりパトラ市の近く、インドス川が分岐しているあたりに少なからぬ船^{ふね}数の艦隊を残留させようと計画したからであつた。

- 2 彼自身はいま一度、今度はインドス川の別の河口を大洋まで下ってみた。インドス川が海に注ぐ水路はどちらの方が行きやすいかをその目で確かめるためだった。インドス川の「二つの」河口は互いにおよそ一千八百スタディア（三三〇キロメートル強）も離れているのである。河口を下っていると大きな渦^{かた}に行き着いた。「インドス」川はいったんその渦に流れこんでいるのだが、おそらくは周辺いくつもの河川もそこに注いでいて大きな、まるで海の入江そっくりのこの渦を形づくっているのであらう。実際その渦にはもう海の魚が見られるのであって、それらは我らの海（地中海）にいるものよりは大幅りである。そこで彼はこの渦の中で水先案内人が指示する地点に船の碇を下ろさせると、レオンナトスを付けて将兵の大部分をそこに残留させ、また荷運び船もその全部をそこに残すことにした。
- 4 一方彼自身は三十人橈船と舟艇を伴うとインドス川の河口を抜けそこを過ぎて海に出て、インドス川の河口はこち

らの〔左手水路の〕方が航行しやすいことを確かめた。彼はそこで岸边に碇を下ろさせるとみずから騎兵若干を引連れ海沿いに三日行程ほどの距離をたどってみて、その沿岸を艦隊が行くことになる当の土地の実態はといったいどんな風かをじかに観察し、船で行く者が飲み水を確保できるようにと各所に井戸を掘ることを命じた。その彼自身は船に引揚げると川筋を溯ってパタラに帰ったが彼はそこであらためて軍の一部を海沿いに差し向け、さきと同じ〔井戸掘りの〕作業をあちこちで行わせることにした。その彼らも〔作業が完了したら〕またパタラに引返してくるよう指示したのである。その上で彼は今一度川を下って例の潟まで赴くと、ここにも別の泊地と船渠とを新たに建設させ、また警備隊もこの地に残すことにして、四か月間軍を養うに足るだけの糧秣を集積させたほか、沿岸の航行に必要なその他の資材万端もここに準備させたのであった。

二一 しかしちようどその頃は時節が船の航行に不向きだった。季節風が吹きやまなかったからだ。その時節に2は風は我々のところとちがって北からではなく大洋の方から、つまりおおそ南の方角から吹くのである。けれども冬の始まり、プレイアデス〔昴〕が沈むその頃から冬の太陽が方向を転ずる冬至の頃までは、この土地では船の航行が可能と伝えられていた。その時節には雨が多く降って大地がしっとり潤おうため、かえって陸側からやわらかい微風〔そよかぜ〕が吹くからで、沿岸を航行するには橈で漕ぎ進むにせよ帆を張って走るにせよ、いずれにしても幸いするからだ。

3 艦隊の指揮官に任命されたネアルコスが沿岸航行に好都合の時節到来を待っている間に、アレクサンドロスはその全軍をひきいてパタラから出発しアラビオス川の線まで進出した。そこから彼は先さらに近衛歩兵部隊と弓兵隊のそれぞれ半数にいわゆる「アステイロイ」部隊およびヘタイロイ騎兵の親衛隊、また各騎兵部隊から抽出編成した一箇部隊および騎馬弓兵隊の全部を手勢に引連れると、左へ折れて海の方角に向った。沿岸を艦隊が航行するにあたって船で通過する軍勢が飲料水に不自由しないよう真水の井戸を掘るためであり、同時にオレイタイ人や昔

から独立自治でいる付近のインド人たちの不意を突いて彼らに攻撃をかけるためでもあった。彼らがアレクサンドロスとその軍勢にたいしていささかも友好的な行動に出なかったからだ。残留部隊の指揮を託されたのはヘパイス・ティオンであった。アラビタイ人というのはアラビオス川のあたりに住んでいる、これまた独立自治の一種族だが、彼らはアレクサンドロスと戦ってもとうてい勝ち目はないと思いつつもなお屈服しようとはせず、アレクサンドロスが接近してきたことを知ると砂漠へ遁走してしまった。彼はそのまま細く水量も少ないアラビオス川を押し渡ると夜中をかけて砂漠の大部分を抜け、夜明け方集落があるあたりに近づいた。彼はそこで歩兵部隊には戦列を組んで追尾してくるよう命じておいて自分は騎兵隊を手勢にひきいると、部隊が平地一杯に展開できるようこれを幾組かの小集団に分けてオレイタイ人の地に攻め入った。オレイタイ人のうち抵抗に立向った者たちはその騎兵隊の手にかかって薙ぎ倒されたが、生きて捕えられた者も多数にのぼった。アレクサンドロスはさしあたって小さな流れの近くにいったんは止営したが、そこへヘパイス・ティオンの部隊もいち早く合流してくると、さらに先を急ぐことにした。ランバキアというオレイタイ人の最大の村に到着した彼はその土地柄が気に入る、ここに人を集め住まわせて町を造ったらきつと大きな賑やかな町に発展するだろうと考えた。彼がこの地にヘパイス・ティオンを停めることにしたのはその「町づくりの」仕事に当らせるためであった。

二二 一方アレクサンドロスはふたたび手勢として近衛歩兵部隊とアグリアネス人部隊の各半数、騎兵の親衛隊および騎馬弓兵隊をひきいると、ガドロソイ人とオレイタイ人の境界地域へ向け進出した。そこは彼に伝えられたところによると通り抜けが狭間はざまになっていて、オレイタイ人もガドロソイ人と一緒に陣立てをかまえ、彼の通過を阻止せんものと狭間の前面に露營しているということだった。彼らは事実その場所に陣を組んではいたものの、アレクサンドロス軍が早くもこちらに向ってきつつあるという情報が入ると、その大部分は守りを棄てて狭間から遁走してしまった。そのオレイタイ人の首長たちはしかしアレクサンドロスの許にやってくると、自分たちの身柄を

も種族全体をも彼にゆだねて降伏を申し入れたのである。彼はそこでその者たちに命じて、逃げ散った多数のオレイタイ人仲間を呼び集めた上、何ら危害を蒙ることはないと納得させて彼らをそれぞれ元の住み家へ立ち戻らせるよう指示した。彼らを統治する太守としてはアポッロパネスが任命され、このアポッロパネスとともに護衛官のレオンナトスもまた、アグリアネス人部隊の全員に弓兵隊と騎兵隊の各一部およびその他ギリシア人傭兵隊の歩、騎兵をひきいてオラに残留せしめられることになった。彼は〔ネアルコス〕艦隊がこの地方の沿岸を通過するまでここに滞在待機するとともに町に住民を集め住まわせ、またオレイタイ人が今後太守の命ずるところに一層よく服するよう、彼らの暮し向きをととのえてやることになった。一方アレクサンドロス自身はヘパイスティオンが残留部隊を伴って彼に追いついてきたとなるとその軍勢の大部分とともに、あらかたは砂漠であるガドロソイ人の地に向けてさらに前進を続けたのである。

4 アリストブロスが伝えるところによるとこの砂漠には没薬もつやくを採取する樹が多生していて、それらはふつうのものよりも丈が高い。ポイニキア人の従軍商人たちはそうした没薬樹の樹脂を採集すると（没薬は太い樹の幹という幹から浸み出ている、今まで一度も採取されたことがなかったからいくらかでもあったのだ）、それらを役畜に運ばせて5は先を進んでいった。この砂漠にはまた大量のかぐわしい甘松根かんしょうこんも採れて、ポイニキア人たちはこれらをも採集して回ったという。しかしその多くは行軍してゆく將兵に踏みしだかれ、踏み折られたその根から発散する甘い香りはそのを過ぎてかなり経つてもなおつきまとして消えなかった。このあたり甘松根はそれ程たくさんあったのである。アリストブロスによればこの砂漠には他にもいろいろな樹がある。たとえば葉が月桂樹の葉に似ていて海の波打際に生えている樹があるが、これなどは潮が引くと乾いた砂地に取り残されながら、潮がさしてきた時にはまるで海中に生えているように見えるものだ。中にたまたま水が溜ったまま引くことのない窪地に生えて、その根がい7つも海水にひたりっ切りの株でも、海水のために枯死するようなことはない。このあたり、この種類の樹には高さ

が三十ペキユス（一四メートル弱）に達するものもある。ちょうどその頃は花をつけていたが、花はおおよそ葦すみれがかった白で甘い香りが際立っていたという。またこの他地面には茎の長いあぎみの種類も生えているが、そのあぎみは大地にしっかりと根付いているので誰か馬でその傍を通りすぎる人の着ているものにいったんそれが絡みつくと、8それを振り切るどころかかえって馬上の当人が馬から引きずり落されかねない程だ。こんなことも言われている。野兎がその傍を走り抜けようとしてそのあぎみによく毛を絡みつかれ、まるで鳥が鳥もちに、あるいは魚が釣針に引っかかるように身動きできなくされてしまうというのである。けれども刃物を使えば断ち切るのに骨は折れず、伐られたそのあぎみの茎は春先の無花果いちじくの樹よりももっと多量の、もっと舌にぴりっとする液を出すという話だ。

二三　そこから先アレクサンドロスはガドロソイ人の土地を悪路伝いに糧秣みちのりにもこと欠きながら進んで行った。わけでも軍勢は飲料水に欠乏することが少なくなかったが、それでも夜の間に長い道程を、それも海からはかなり隔ったところを踏破しなくてはならなかった。しかもアレクサンドロスとしては何とか海沿いの土地を進んであちこちに港があるのを確認し、道々（ネアルコス）艦隊のために井戸を掘ったり、どこか適当なところに市場とか船泊り2を設営するなどして、できる限りの準備をしておいてやろうと一生懸命になったのである。けれどもガドロソイ人の土地の沿岸一帯はまったくの砂漠だった。彼はそこでマンドロドロスの子のトアスに少数の騎兵をつけて、一体全体船泊りするに足るような場所がそのあたりにあるのかどうか、あるいは飲料水その他食糧のたぐいが海から3う遠くないところで見つかるものかどうかを探りに、彼を偵察に出してみた。そのトアスが立ち戻ってきて報告したところによると、彼は海辺の見るかげもない掘立て小屋に住む何人かの漁民に出くわしたが、その彼らの小屋とこののは貝殻を塗り固めてこしらえ、屋根も魚の背骨を利用して葺いたものだった。そしてこうした漁民のところにも砂地を掘ってやっと掻き出した僅かな水が飲み水としてあるばかりで、それとて全部が全部真水というわけにはいかない有様だということだった。

4 そのうち比較的穀物にも恵まれた、ガドロシアのとある所までたどりつくと、アレクサンドロスはその所で徴発した物資を役畜の背に分載し、それを彼の印章で封印した上、海まで運搬するように命じた。ところが海へ最短距離の宿営地点にまでも行き着かないうちに將兵は、荷駄の警護を仰せつかった当の警備兵たち自身をも含めて、王の印章などにはほとんど目も呉れず穀物を自分たちの用に供し、飢えにひどく苦しんでいる者たちもその余得に与ら^{あづか}5 せるといふ始末だった。彼らは極端な飢えの苦しみに耐えかねたあげく目前には思い浮べにくい、いずれにせよもつと先のことに属する王からの「処罰の」危険よりは、もはやはっきりと今の今直面している死の危険の方を、自分たちとしてはまず第一に考えるべきだと判断したのであった。アレクサンドロスの方もまた切羽詰った苦境に免じて、そのような行動に出た者たちを大目に見てやったのである。彼としてはそこで艦隊に乗り組んで沿岸を航行中の部隊に何とか食糧を供給してやろうと、地域から略奪でかき集めることができたものを残らず運ばせることにし、6 のためにカッラティスの子クレテウスを派遣することにした。土地の住民たちもまた差し出せる限りの穀物を碾割^{ひき}りにした上、それに棗^{なつめ}椰子の実や羊などを添えて内陸の各地から軍用の交換市^{いち}へ持ち寄るよう命ぜられた。アレクサンドロスはこの他海沿いの別の土地にも、多くはないが碾割りにした穀物を持たせてヘタイロイのテレポスを差し向けたのであった。

二四 彼自身はガドロソイ人の首邑を目ざしてさらに前進を続けた。そこはプラという町だったが、彼はオラを出発してから合せて六十日かかってやっとそこにたどりついたのである。アレクサンドロスの事蹟を記録したほとんどの歴史家が伝えるところでは、彼のひきいる軍勢がアジアの地で耐えしのんだ苦難という苦難も、それらを全部足してさえこの地で彼らが嘗めた艱難辛苦と比較するには到底及ばないということだ。しかし彼らによればアレクサンドロスとしては、これから進む道の困難さを知らずにこの地に踏みこんだというわけでは決してない。知らないままに進んだのだと語っているのはネアルコスだけなのである。そうではなく、昔セミラミスがインド人の地

から逃げ帰った時のことを除けば、これまで誰一人軍をひきいてこの道をうまく通り抜けた者はないと彼が聞いたためだというのだ。そのセミラミスにしても土地の住民が語り伝えるところでは、全軍勢のうち僅か二十人だけを引連れて命からがら脱け出てきたそうだし、カンビュセスの子キュロスの場合も総勢たった七人きりだったという。

3 伝えによるとキュロスもまた実際インド人の地に侵入しようとしてこの地方に踏みこんだものの、目ざす土地には行き着かないうちにこの道がよぎる砂漠とこのルートの補給難のために軍勢のほとんど全部を滅ぼしてしまったのである。アレクサンドロスの耳に入ったこのような話が、キュロスやセミラミスと張合う気持を彼の心に吹きこんだというわけなのだ。ネアルコスが語るところによると、アレクサンドロスがこの道をとって進んだのはまさにこの経緯のゆえであり、同時にまた沿岸を行く艦隊のために近くから必要不可欠の物資を供給しようとしてのことだったのである。いずれにせよ灼けつくような暑さと飲料水の補給難が（彼の場合も）軍勢の大部分、またとくに役畜のほとんど全部をも破滅に追いやったのだった。これらは砂の深さと砂が太陽に灼かれて生じたその熱のためにも斃れたが、大方はしかし渴きが元で斃れたのである。実際深い砂が造り成した小高い丘に行き当りでもすると、そうした砂丘は足下にしっかりと踏み固められずかえって泥土の中に、というよりもむしろ柔らかな雪の中に踏みこんだように、身体が砂の中へめりこむのだった。しかも同時に馬や騾馬どもは砂丘を上ったり下ったりする間、足許の凹凸や不安定からしても一段と苦しめられたし、宿営地点と宿営地点の距離の長さもまた軍の将兵を殊のほか困憊させたという、飲料水も不規則な間隔でしか見つからず、水が手に入らないとなると彼らとしては、むしろ必要に迫られて行軍距離を延長せざるを得なかったからだ。実際夜の間にどうしても進んでおかなくてはならない道程を何とか踏破して、夜明け方水場までたどりついたような時は、彼らもまだとことんまでは疲労困憊せずすんだ。しかし行程が長びいて時間が経ち、まだ行軍している最中を（太陽の灼熱に）捉えられたが最後、そうなるも彼らは熱気とそれに伴う抑えがたい渴きとに責め苛まれることになったのである。

二五 役畜の損耗も多数に上ったがそれも軍中の將兵によって意図的にひき起こされた損失だった。將兵は自分たちの食糧がなくなるとぐるになって、馬や騾馬どもをあらかた屠殺しその肉を食用に供しては、それらが渴きのために死んだとか疲労のあまり斃れたのだとか言い触らしたからだ。事の真相を説明しようとする者が誰もいなかったのは、ひとつには現実の追いつめられた状況の故であり、また誰も彼も全員が同じ違反行為にかかわっていたためでもあった。アレクサンドロスとてこうした事態を知らずにいたわけではなかったが、彼としては現状の是正策は事実を認めた上で許してやるより、むしろかえって見て見ぬ振りをするのだと判断したのである。將兵のうち病に倒れた者とか体力尽き果てて道端に落伍してゆく者を相伴って進むことは今となつてはもうむづかしかつた。彼らを載せて運ぶ役畜にこと欠いた上、將兵も自分たちの手で車輛を打ち壊していたからだ。深い砂地では車を進ませるのは至難のわざだったし、そうした理由から彼らは行軍の早い段階ですでに最短距離の道を行くことができず、車輛隊のためにわざわざできるだけよい道を選ばなくてはならなかったからである。ともあれこのようにしてある者は病のため路傍に置き去りにされ、またある者は疲労の果て、あるいは暑さに負けあるいは渴きに耐えかねて落伍していった。彼らを扶けて一緒に伴い行こうとする者もなければ後に残って介抱しようとする者もいなかった。軍は先を急ぎに急いでいたし、それに全体の安危を氣遣うあまり、ひとりひとりの問題はこの場合やむを得ずなおざりにされたのである。路上で睡魔にとりつかれた者たちもあった。大方は夜のうちに行程を稼がなくてはならなかったからだ。「道端に眠りこんだ」彼らは目が覚めると、それまでまだ体力が残っていた者は軍勢の後を追尾していったが、無事に追いついた者は大勢のうち数える程しかなかった。大多数の者はあたかも船から海中に転落した人間のように砂のなかで果てていったのである。

4 軍勢の上にはまた、人びとをも馬や役畜をも殊のほか苦しめることになった別の災難もふりかかった。ガドロシア地方に雨を降らせるのはインドの場合と同じく季節風だが、ただしその雨の範囲はガドロシアの平野部ではなく

てもっぱら山地帯である。雲は風の力で山地帯に吹き送られると、山々の頂^{いただき}を越えてゆかずにその手前側で雨を降5
らせるのだ。一夜軍勢が、今は枯れて僅かな水しか流れていないが冬雨時^{ふゆとき}になるとしばしば鉄砲水^{てつぽうみづ}が奔^はり下る川床
に露營^{ろうやう}したことがあった。そこが露營地に選ばれたのも他ならぬその水のためだったのだ。ところが夜中の第二刻
ごろ、雨が降ったことさえ軍中ではそれに気付く者もなかったのに、その川が雨のため突然増水してふくれ上がり
大洪水となって押し寄せた結果、軍に同行していた女子供大多數の命をうばい、王専用の行季全部に加えてせつ
く生き残った役畜までも押し流されてしまったのである。兵士たち自身にしてもやつとのことで武器武器だけを身
6 につけ辛うじて命拾いしたような有様で、その彼らさえも皆が皆助かったというわけではなかったのだ。ところで
幸いなことに偶ま一行が豊富な水にありつけたような場合でも、その水を飲むにさえ暑さと渴きのあまり、急に底
なしのがぶ飲みをしたあげく頓死^{とんし}してしまう者が続出した。アレクサンドロスが多くの場合幕営地を水場の近くに
ではなく、二十スタディア（三・七キロメートル弱）ばかりも離れたところに設営させたのも実はそのためだった。つ
まり人間も役畜も水場に一度に殺到して死者が出たりすることのないように、またなかでも自制心に欠ける者たち
が泉や流れのなかに跳びこんで、他の戦友たちのためにせつかくの水を台なしにしてしまうようなことが起らない
ようにと考えた末の措置だったのである。

二六 ところで次のようなアレクサンドロスの別けても立派な態度振舞いこそは、それが実際にこの地で起こつ
たことなのか、それとも他の誰かが書いているようにもつと以前パラパミサダイ人の土地で起こったことなのかは
ともかく、ここで軽々に見過^みごされてしまつてよい問題だとはこの私には思われない。軍勢はその時、もはや身を
灼くように照りつける暑さのなか一面の砂地に行軍を続けていたという。そこは水場に行き着くのに何としても通
り抜けなくてはならないところだった。水場はそのたどる道筋のもつとずっと先にあったのだ。アレクサンドロス
自身も咽喉^{いんこう}の渴^{かわ}きに苛^{さい}まれてはいたものの、それでも苦心^{くしん}慘澹^{さんたん}して徒歩で軍勢を指揮していた。こんな場合にはよ

く起こりがちなことだが、彼としては艱難辛苦を全員がひとしく頒ちあうことで一般將兵の苦労が少しでもやわらぐようと気を配ったのである。この折に幾人かの輕装兵が水を探しに隊列を離れ、さして深くもないとある岩の凹みにほんの僅かばかりの水が溜っているのを見つけた。彼らはそれを苦心して掻いこむと何かたいへんな貴重品を携えるようにしてアレクサンドロスの手へ大急ぎで引返してきた。彼らは側近くまでやってくると水を兜に注いで王に奉った。アレクサンドロスはそれを受け取って水をもたらしした者たちに厚く礼を返すと、皆が見守る中でそれをそのまま地面へぶちまけてしまった。アレクサンドロスのこの振舞いは軍の全体をいちじるしく元気づけた。王が棄てたその水はひとりひとり全員がそれを飲み干したのだと、誰しもがそう自分の思いになぞらえて想像した程にも、彼のその行為は軍全体を元気づけたというのだ。私はアレクサンドロスのこの振舞いを彼の克己心また統率力の何よりの証しとして格別立派だと思ふのである。

4 この土地では軍はまた次のような状況に立ちいたったこともある。道案内に立った幾人かがとうとう道を見失つたと言ひ出したのだ。道筋の目印が風に吹き飛ばされて見えなくなり、それに——實際厚くどこも彼処もいたるところ一様に堆積した砂の中では、それを頼りに道をたどるよすがとて何ひとつ見当らず、ふつう道端に立っているような樹木もなければ位置を変えない丘さえも小高く顕われてはいない。彼らはまた船乗りたちが熊の星座を目安に、ポイニキアの場合だと小熊座の星、他の種族ならば大熊座の星をそれぞれ目安にして船を進めるような具合に夜は星、日中だと太陽を目安に旅路を行くといったことにも不馴れだったのだ。——ともあれこの肝腎な時にあってアレクサンドロスは、それまでの進路を左寄りにそれて進ませるべきではないかと判断すると、小人数の騎兵をひきいてみずから前方偵察に出かけた。その彼らが乗った馬もやがて暑さのために疲労し始めると、アレクサンドロスは一行のほとんどを後に残し、そこから先は全部合せてもたったの五騎だけでさらに馬を走らせた。そうやってとうとう海を発見した彼はその砂利石の浜を掻き掘ってうまく澄んだ真水に行き当たった。全軍はこのよう

にしてこの場所まで誘導されたのである。軍勢はこの後さらに七日間、岸边から水を得ながら海沿いに行軍を続けた。そこから先になると案内人たちもう道筋を知っていたのでアレクサンドロスも「安心して海岸を離れ」内陸へと道をとって進んだのであった。

二七 ガドロシアの首邑「ブラ」にたどりつくアレクサンドロスはここで軍に休養をとらせることにした。一方彼はアポッロパネスがさきに指示してあったことを何ら履行していないということが判明したので、その太守の職を罷免し、代ってトアスを太守に任命してその地方を統治させることにした。しかしトアスも病を得て死んだので、シビュルティオスが太守の地位を引き継ぐことになった。このシビュルティオスは最近アレクサンドロスからカルマニアの太守に任命されたばかりだったが、今またアラコタイ人とガドロソイ人にたいする統治権をも与えられたのである。しかしカルマニアの方は別にピュトパネスの子トレポレモスが引き受けることになった。アレクサンドロスがもうカルマニアに向けて進んでいたところ彼の許に知らせが届いた。インド地方の太守ピリッポスが傭兵隊に陰謀を仕組まれて暗殺された、下手人の一部はピリッポス付きのマケドニア人護衛官がその場で殺し、残りの者は後に捕えてこれまた処刑したというのであった。このことを知るとアレクサンドロスはインドに在るエウダモスとタクシレスとに書状を遣わし、その中で従来ピリッポスの統治下にあった地域は自分が改めてそこに太守を派遣するまで、両人が管理の任に当るよう言い送ったのであった。

3 アレクサンドロスがすでにしてカルマニアへ到達したその頃、クラテロスの方もまたいま一方の軍勢と戦象の集団を伴い、それにオルダネスを連行して到着してきた。オルダネスは離反して蜂起を企てながらクラテロスの手で逮捕されたのだった。そこにはアレイオイ人とザランガイ人を統治している太守スタサノルも、プラタペルネスの息子でパルティアおよびヒュルカニア太守の任にあるパリスマネスと打連れてやってきた。更に一方では在メデイア駐留軍部隊の指揮官としてパルメニオンとともに後方に残されていた者たち、クレアンドロスにシタルケスにへ

4 ラコンといった面々もまた軍の大部分をひきいて到着した。ところがこのクレアンドロス、シタルケスおよびその一党にたいしては現地住民の間からばかりか（メディアに駐留していた）他ならぬ軍の内部からさえも、彼らが神殿を荒したとか古い廟墓の墓あばきをやったとか、その他にも彼らが不正違法の行為を傲慢無軌道な態度で従属民の上に加えたなど、多くの告発が相次ぐことになった。こうしたことが通報されるとアレクサンドロスは彼ら（二人）を死刑に処したが、それは今後太守とか知事あるいは郡長として残ることになる他の者たちにたいしても、もし同様な非違を犯した時は彼らと同じ運命を覚悟しなくてはならないのだという畏怖の念を植えつけるための見せしめなのであった（アレクサンドロスの支配下に入った種族の中には武力で征服された者たちもあればみずから進んで臣従を求めてきた者たちもあり、その数も膨大ならその住むところもまた互いに大きく隔たってはいるのだが、そういった諸族をアレクサンドロスが秩序よく統合できたのは、他のどんな施策にもましてまさしくこのやり方のおかげだった。アレクサンドロス王権の下にあっては支配される側が支配する側から不正不当な扱いを受けるといったことは許されなかったからである。）ヘラコンの方も当時さしあたっては無罪放免とされたものの、その直後スサ住民の告発により彼がスサの神殿荒しをしたという旧悪が露見して彼もまた処罰された。スタサノルとプラタペルネスとは役畜の大群に多数の駱駝を引連れてアレクサンドロスの許へやってきた。アレクサンドロスが軍をひきいてガドロシアの地を進んでいるという情報を得た彼らとしては王の軍勢が、実際にも味わうことになったかの苦難辛酸そのものを、あるいは道中嘗めることになりはしないかと思ひ量^{はか}つてのことであつた。その彼らのやってきたのがまったく時宜に叶つたことなら、彼らが一緒に引連れてきた多くの駱駝や役畜も、これまたちようど折よく役立つことになった。アレクサンドロスはそれらを指揮官クラスには各人ひとりひとり宛^{あて}、次いで騎兵の諸隊、百騎隊ごとまた歩兵の諸隊ごとに、役畜や駱駝の数が許すかぎりその全部を分配してやったのである。

二八 ある記録者たちは次のような話を書きとめている。私としてはその話に信を措^おくものではないがそれによ

ると、アレクサンドロスは箱馬車を二台連結させて側近のヘタイロイとともにそこに横になりながら、笛の音に合わせてカルマニアの地を軍をひきいて進んだという。一方軍の将兵もまた花冠で身を飾り、浮かれ戯れながら彼の車の後に続いたのであって、食料品をはじめ歓樂を盛り上げるに足るものは何によらず土地のカルマニア人たちの手で沿道に持ち寄られ、通過してゆく將兵の用に供せられたというのである。これはアレクサンドロスがディオニュ2ソス神のバッコスの祝祭を真似てそれに似せたものであった。というのもかのディオニュソスについてはひとつの言い伝えがあつて、この神はインド人を従えた後こんな風にしてアジアの大方の土地を経めぐり、ディオニュソス神自身「トウリアンボス」という異名を奉られたといわれているからだ。戦に勝ったあとの祝勝行進が「トウリアンボス」と呼ばれるのもまさにこれに由来するのである。但しここに記したことはラゴスの子プロトレマイオスもアリストブロスの子アリストブロスもその他およそこの種の問題について人が拠るべき典拠とするに足るどの記録者3も書きとめてはいない。私としてもこの話は信ずるに足りずと記しておけばそれで十分であろう。さしあたってはアリストブロスに従つて次のことを記録しておくことにしよう。彼によればアレクサンドロスはインド人にたいして勝利を収めたことと軍がガドロシアを無事に通過できたことについて神々に感謝の供犠を捧げ、併せて音楽と体育の競技を催したという。アレクサンドロスはまたペウケスタスを側近の護衛官に選任することにした。王は早くから彼をペルシスの太守に据える心積りでいたが、彼がマッロイ人の間で見せた目覚ましい働きに報いるため、太守の職につける前にこの〔側近護衛官という〕名誉あり信頼の証しでもある地位を一度経験させてやりたいと考えたと4いうのである。その当時までアレクサンドロス側近の護衛官は七人だった。アンテアスの子のレオンナトス、アミュントルの子ヘパステイオン、アガトクレスの子リュシマコス、ペイサイオスの子アリストヌウス、これらはすべてペッラの出身者、それにオレスティスの出身でオロンテスの子のペルディッカスとエオルダイア出身のラゴスの子プロトレマイオスおよびクラテウアスの子のペイトン、以上の七人である。第八番目としてこれらの面々に加わつ

たのが、アレクサンドロスを楯で庇ったかのペウケスタスなのであった。

5 その間にネアルコスの方もまた、オウ人やガドロソイ人や魚食民の土地をめぐって航海を続けた末カルマニアの沿岸、人家があるあたりに碇を下ろすことになった。彼はそこから小人数で内地に在ったアレクサンドロスの許にいたると、自分が外洋を岸沿いにたどった航海について王にその経過を報告した。王はそこで引続きシアナ地方さらにティグリス川の河口にいたるまで沿岸伝いで航海を続行するよう、彼をふたたび海へ帰らせたのである。ネアルコスがインドス川からペルシア海へさらにティグリス川の河口へと一体どんな風にして航海したのか、その事情はネアルコス自身（の記録）に拠って別個に書くことにしよう。アレクサンドロス（の遠征）に関しては彼が書き遺したギリシア語の記録も今なお存在しているからだ。とまれその物語は後日、私がその気になり神明またそれに加護を垂れ給うならば、多分執筆されることになるであろう。

7 アレクサンドロスはまたヘパイステイオンに軍勢の大部分と役畜の群れそれに戦象を引連れて、海沿いにカルマニアからペルシスへと進むよう指示した。彼のこの行軍は季節的には冬に当たったので、ペルシスの沿岸地方は氣候も温暖だったしそこでは糧秣も潤沢に手に入ったからである。

二九 アレクサンドロス自身とはいえ、彼の方は歩兵のうちでももっとも軽装敏捷な部隊とヘタイロイ騎兵隊それに弓兵隊の一部を伴ってペルシスのパサルガイ目ざして進んだ。スタサノルはその統治する地域（アレイア）に帰任せしめられたのである。アレクサンドロスがペルシスの境界まで来てみると、プラサオルテスはもうそのこの属州統治の任にはいないことが分った（アレクサンドロスがまだインドに在った頃、彼はたまたま病を得て死んだのであった）目下ペルシスを預っているのはオルクシネスだった。彼としてはアレクサンドロスからその地位に据えられたわけではなかったものの、他に治める者がいない以上、ペルシスの地をアレクサンドロスのためにきちんと保全してゆくには自分が適任だと、みずからそう見做したのであった。パサルガイにはメデア太守のアトロ

パテスもまた、さきに彼の手で逮捕されていたメデイア人のバリユアクセスを連行してやってきた。バリユアクセス逮捕の理由は彼がペルシア風の直立した王冠をいただき、みずからペルシア人とメデイア人の王を公言したからであった。彼が企んだ革命と反乱に参加した者たちも同時に連行されてきたが、アレクサンドロスはそれらの全員を死刑に処したのであった。

4 しかし彼が心を痛めたのは、カンビュセスの子キュロスの墓に加えられていた無法な行為であった。アリストブロスが伝えるようにキュロスの墓が穿ち破られ、荒らされていることが判明したからだ。かの有名なキュロスの墓はパサルガダイの王室庭園のなかにあつて、墓のまわりはさまざまな種類の樹木が生い茂る神聖視された木立て囲まれ、水も豊かに灌漑されて美しい草地には芝草が深々と密生していた。墓そのものは下方が四角い切石で方形に築かれ、その上に屋根をかぶせた石造の墓室が乗っていた。墓室には人ひとりそれも小柄な人間が散々苦勞してやつとすり抜けられる程度の狭い入口があつて、それが内部に通じていた。墓室の中にはキュロスの遺体を納めた黄金の棺が安置されていて、棺の傍には寝椅子が一脚置かれていた。寝椅子の脚には打出しの金細工が施してあつた。

6 また〔寝具としては〕上を覆うバビュロニア出来の掛布団と真紅の毛皮の敷物とがあつた。寝椅子の上には袖長の上衣とバビュロニア製のさまざまな衣裳が置かれていた。アリストブロスが伝えるところによれば、そこにはまたメデイア風のズボンと紫紺に染められたガウンも何着かあつた。そのうちには紫色のもあれば少しずつ違った色合のものもあつたが、それらの他には頸飾りや短剣、それに黄金や宝石が象眼されたイヤリングもあり、机もひとつ置かれていたという。キュロスの遺体を納めた棺は机と寝椅子の中間に置かれていたのである。墓域の囲いの内、墓に通ずる坂のかたえにはマゴス僧たちのために小さな住居が建てられていた。彼らはすでにキュロスの子カンビュセスの頃からキュロスの墓を守ってきた者たちであり、その墓守の地位は父子相伝で彼らの間に代々伝えられてきたものだった。彼らには〔給与として〕日に羊一頭と小麦粉とぶどう酒が王から支給され、月に一度はキュロスに捧げる

8 犠牲として馬一頭が給付された。墓にはペルシア文字で墓碑銘が刻んであり、それはペルシア語で次のような意味のものだった。「人よ。私はキュロス、カンビュセスの子。ペルシア人たちのために支配を打ち樹てアジアの地に君臨せし者。されば我がためにこの墓を吝まざれ」。

9 アレクサンドロスは（ペルシア人の地「ペルシス」へ入った時はいつもキュロスの墓に詣でるように心掛けていたので）、（ふたたび此処を訪れてみて）棺と寝椅子以外は何かもが持ち出されていることを知った。盗人どもは棺の蓋を開けて亡骸を抛り出すなどキュロスの遺体にまで凌虐を加えていた。彼らは棺そのものもこの部分は打ち壊しあの箇所は叩き潰すなど、何とか手頃な大きさにしてそこから運び出しやすくしようと企てたが、結局彼らのその仕事10はうまく行かなかったので、棺はそこに打ち棄てたまま姿を消してしまったのだった。アリストブロスが語るところによれば、墓をキュロスのため元通りにきちんと復するようアレクサンドロスから命ぜられたのは彼自身だったという。すなわちまだ残っていた遺体の部分を残らず棺に納め、それに蓋を被せて棺の破損した箇所を修復すること、寝椅子には副木をあててこれを伸べその他本来装飾用に置かれていた品物一切についても、ひとつひとつ元の品に似せたものを拵えること、また墓の入口は一部は石材でこれを塞ぎ一部は粘土で塗り固めて外からは見えなく11し、粘土の箇所には王の印章を捺（してこれを勅封の墓とな）すことが任務として彼に与えられたのである。アレクサンドロスは墓守のマゴス僧たちを引つ捕えると下手人どもの名を白状させようとして彼らを拷問にかけた。しかし彼らは拷問にかけられてもなお、自分たちがやったとも他の誰それがやったとも犯人の名を明らかにせず、その上他のどんな点からしても彼らがこの犯行に一枚噛んでいたという証拠は挙がらなかったで、そのためアレクサンドロスとしても結局は彼らを釈放したのであった。

三〇 アレクサンドロスはそこから更に進んで、過ぐる日みずから火を放ったペルシア人の王宮にいたった。「王宮焼払いのことは」、私もその行為は是認できずとしながらすでに述べたごとくだが、実は他ならぬアレクサンドロス

本人もこの地に帰って来てみて、やはり我ながらまずかったことなのであった。ところでプラサオルテスが死んでこの方、ペルシア人を統治していたオルクシネスにたいしても、ペルシア人たちの間から彼を指弾する多くの申立てが寄せられてきた。その結果としてオルクシネスが神殿や王墓をいくつも荒らしまた多くのペルシア人を不法に殺した事実が明るみに出たため、彼はアレクサンドロスの命令を受けた者たちの手で絞首の刑に処せられたのである。ペルシア人を統治する太守には護衛官のペウケスタスが任命された。彼がアレクサンドロスに格別忠誠の士と思われた理由は他にもいろいろあるが、とりわけかのマッロイ人たちの間で見せた手柄のためであった。あの時彼は一身を危険にさらしてアレクサンドロスの生命を救ったのである。ペウケスタスはその他の点でも異邦3人の生活様式にうまく順応する人物だった。ペルシア人たちの太守に任命されるとすぐから、彼はマケドニア人中でもただひとりその服装をメディア風のものに公然と改めたし、ペルシア語も学べばその他万事何ごとにつけてもペルシア人のやり方に調子を合わせたのである。このため少なくともアレクサンドロスは彼のことを高く買っていたのであり、ペルシア人たちの方もまた彼が先祖代々の慣習にもまして自分たちのやり方仕来りを採用したことを歓迎したのであった。

第七卷

第七卷目次（前三二四年春——三三三年夏）

アレクサンドロス今後の計画構想とそれについての著者の感想。現世の価値を軽んずる哲学教説への関心。タクシラでの「裸の哲学者」たちとの邂逅と彼らの言説（一・1—二・4）

インドから軍に同行してきた「裸の哲学者」カラノスの自焚死の逸話（三・1—三・6）

不正非行の属州統治者たちにたいするきびしい処罰肅清が相次ぐ。スサにおける集團結婚式の挙行（四・1—四・8）

兵士たちの借財の肩代り弁済措置を軍中に公告。かえって将兵の疑惑警戒心をそそる。側近者への論功行賞（五・

1—五・6）

現地編成の土着民部隊が訓練を終えてスサに到着する。王の「夷狄^{びい}鼻^{びき}肩^{かた}」の諸施策にマケドニア人将兵の不信不満が高まる（六・1—六・5）

アレクサンドロス、スサから川を下ってペルシア湾奥一帯を探索。ティグリス、エウプラテス川と「河間の地」の地勢について。ペルシア時代の堰堤を除去しながらティグリス川を溯ってオピスにいたる（七・1—七・7）

オピスの騒擾事件（一）アレクサンドロス、兵員会を召集してマケドニア軍中の老兵傷病兵に復員帰国を命ずる。これに反発抗議する兵士たちは全員の除隊を要求して荒れる。王の果敢な対抗措置（八・1—八・3）

オピスの騒擾事件（二）兵士集団に向かつてのアレクサンドロスの演説（九・1—一〇・7）

オピスの騒擾事件（三）アレクサンドロスの怒りと強硬姿勢。兵士側の抵抗挫折する。歎願と赦し。和解と東西融和の大饗宴が催される（一一・1—一一・9）

復員兵士たちの身の上に関するアレクサンドロスの配慮。涙の別離。本国代理統治者アンティパトロスの解任とその背景（一二・1—一二・7）

メデイア太守アトロパテスが「アマゾネス族の女戦士たち」を王の見参に入れる。このアマゾネス族についての著者の真偽の考証（一三・1—一三・6）

エクバタナで戦勝祝賀の神事と祭典諸競技を挙行。その祝祭の間に親友ヘパイスティオンが急死する。諸書が伝えるアレクサンドロスの常軌を逸した悲嘆ぶり。異例の厚葬（一四・1—一四・10）

アレクサンドロス平常心をとり戻し、軍をひきいてコッサイオイ人を討つ。バビュロンへの帰還途上、諸方からの慶祝使節団の来訪を受ける。ローマ人の使節についての伝承とこれについての著者の意見（一五・1—一五・6）

ヒュルカニア（カスピ）海探査のための調査船団建造に着手する。カルデア人たちが神の託宣を楯に王のバビュロン入市を阻む。神官たちへの王の疑念と入市強行。ト占にアレクサンドロスの命終の近いことが現われる。カラノスに遺した予言（一六・1—一八・6）

ギリシア諸国から使節団が来訪。往年ペルシア人に持ち帰られていた文化財が諸国に返還される。大艦隊の建設とバビュロン港の拡張、艦隊乗員の確保——アラビア半島周航遠征の準備が始まる。遠征の動機について。アラビヤ人の信仰とアラビアの地勢（一九・1—二〇・2）

アラビア半島周航に向けて幾組もの調査隊が派遣される。沿岸の島々や本土の形状についての報告。ネアルコスの航海とアラビア半島（二〇・3—二〇・10）

アレクサンドロス、ポッラコパス運河を視察する。エウプラテス川の流量の年変化と水利調節の必要。運河開鑿と植民市の建設を指示。船上視察の間に王の身边に起こった不吉な出来事（二一・1—二二・5）

各地から諸部隊がバビュロンに集結。ギリシアからの使節団が王に黄金冠を捧呈する。ペルシア人をマケドニア軍

に正式編入——「帝国軍」の編成へ。ヘパイステイオンの英雄神化と靈廟造営のこと。王のクレオメネス宛書状についての著者の批判（二三・1—二三・8）

玉座に起こった不吉な異変。アレクサンドロスの発病から死まで。『王宮日録』が誌す王の病状の推移。兵士たちの憂いと側近者の空しい神頼み（二四・1—二六・3）

アレクサンドロスの死をめぐって伝えられる毒害陰謀説などの流説について（二七・1—二七・3）

アレクサンドロスの人となり。彼の欠点過失にたいする著者の弁護論。著者のアレクサンドロス賛美（二八・1—

三〇・3）

一 パサルガダイそしてペルセポリスまで到達したアレクサンドロスは、エウプラテス川とティグリス川をペルシア湾まで下ってかのインドス川の場合と同じく、このふたつの川が太洋に注ぐその河口部とそのあたりの海の様子を見届けたいという強い願望にとりつかれた。ある著作家たちはまたこんな風にも書いている。アレクサンドロスが計画していたのはアラビアの大部分からエティオピア人の地までリビュア、さらにアトラス山を越えてガディラ（カディス）にいたる遊牧民の地をぐるりと経めぐって我らの海（地中海）に入りリビュア、カルタゴを従えてから、かくて始めて掛け値なしに全アジアの王と呼ばれたいということだったのだと。彼の見るところではペルシア人やメディア人の王にしたところで実際はアジアのごく一部を支配してきたに過ぎず、とてもみずから大王などと称するに足る資格はなかったからだ。一説によれば彼はそこから黒海に艦隊を乗り入れてスキュタイ人の地さらにはマイオティス湖（アゾフ海）に進入することを考えていたといい、またこれも一説によるとシケリアやイアピュギア岬（イタリア半島の「踵」^{かかと}）の先端サンタマリア・ディ・レウカ岬）に向おうとしていたのだとも伝える。ローマ人の名声がその頃ようやく前面に立ち現れつつあったことが、彼自身にも当時すでに気がかりだったというのである。

4 私自身としてはアレクサンドロスが一体どんな構想をいだいていたのか確実なところは推し量れないし、といって私なりに想像をたくましくしてみる気持もない。ただ私は次のことだけははっきり断言してよいと思う。それはアレクサンドロスの目ざしたところが決して並みの卑小なものではなかったということ、たとえヨーロッパをアジアに併せようとブリタニアの島々をヨーロッパに加えようと、彼は自分がそれまでに征服獲得したものだけで能事終れりとばかりそこに腰を落ち着けてしまうことはせず、つねに未知の土地をさらに遠くへと求めてやまなかった5ということだ。たとえ他に競い合う相手がなくとも、彼はそれでも己自身を相手として勝負したのである。ただしこの点に関しては私はインド人の哲学者たちの考えを立派だと思うものだ。伝えられるところによるとアレクサンドロスは、哲学者たちがいつも講筵こうえんを設ける青天井の草っ原で彼らの一団に行き逢ったことがあったが、その彼らがアレクサンドロスとその軍勢を見て仕草に表したことといえ、自分たちが今立っている地面を足でとんとんと踏んでみせたことだけだった。アレクサンドロスが通訳を介して彼らのその仕草は一体どういう意味かと尋ねると、6相手はこう答えたという。「アレクサンドロス王よ、人間誰しもわれわれが今立っているこれっぽちの土地を持てるだけのことです。貴方が格別じつとしてはいられない、しかし自負心の強い御性分で、我も心身を勞すれば他人にも苦勞を強いながらわざわざ御自分の国からこんなにも遠い土地にまで攻め進んでこられたというその一事を別にすれば、貴方とて他の人と同じただの人間に過ぎません。事実貴方も遠からず死ねば、肉体が葬られるに足るだけの僅かな土地しかお持ちにはなれないでしょうに」。

二 この場面でアレクサンドロスは、相手が言ったことにもそれを口にした者たちに対しても賛意を表してこれに賞め言葉を返したのだが、しかし彼が実際の行動に示したところは彼が賛意を表したことは違った、それとは逆行するものであった。彼がシノペ出身のディオゲネスにひどく感銘を受けた話も伝えられている。イストモスでたまたま日向ひなたぼっこをしているディオゲネスに出会った時のこと、アレクサンドロスは扈從こじゅうする近衛歩兵や歩兵へ

タイロイと一緒に立ちどまると何か欲しいものはないかと彼に訊ねた。するとディオゲネスの方は、他には何も要らないからだそこを退いて陽差しの妨げにならないでほしいと、彼や供の者たちに求めたというのである。このようにアレクサンドロスとてたしかにより正しい道を志すの念、必ずしも無くはなかったのだが、それでも彼はどうしようもない程名誉欲の虜になってしまったのである。今ひとつこれはアレクサンドロスがタクシラに着いた時のことだが、彼はインド人の哲学者たちの中でも常時裸のままにいる一団を目撃すると、その人びとのうちから誰かひとりを自分に同行させたいという強い願望が彼の心中に萌した。彼らの堅忍不拔の自制心に強い感銘を受けたからだ。哲学者たちのうちの最長老はその名をダンダミスといって他は彼の弟子たちだったが、そのダンダミスが言うには自分はアレクサンドロスの許に赴く気などないし、他の者たちにもそれを許すつもりはないということだった。伝えられるところでは彼は、アレクサンドロスが仮にもゼウスの子だというのなら自分もまたゼウスの子だと言い、アレクサンドロスからの賜り物などは要らない。自分としては今手許にあるものだけで十分間に合っているからと返事してきたという。彼はこの他にも、アレクサンドロスの軍勢はただいたずらに数多の土地や海をうろつくばかりで何の得るところもなく、彼らの長年の放浪はついにその底止するところを知らないだろうと見た上さらに、アレクサンドロスにしてみれば呉れるも呉れないも己の一存といったそんな贈物など、自分は何によらず欲しがりはない、また何でもアレクサンドロスの所有に帰したのから自分が一切閉め出しを食うことにたとえ4 なくても、自分としては怖じも恐れもしない、生きているうちはこのインドの土地が季節ごとの実りをたっぷりと自分に恵んでくれるし、死ねば死んだで肉体というこの好ましからぬ伴侶から解放されようというものだ、とも言い寄越してきた。そこでアレクサンドロスとしてもその男が自由人であることを認めて、それ以上無理強いしようとはしなかったが、現地の哲学者のなかにカラノスという者がいて、この男が説得の結果同行することになった。メガステネスの記すところではこのカラノスは別けても自制心薄弱とされており、仲間の哲学者たちも彼が自分ら

と共にいることの幸福を見捨て、神ならぬ別の主人に仕えることにしたとして、カラノスを誹^{そし}ったという。

- 三 以上のことを私がここに書きとめたのは、アレクサンドロスの事蹟を記録する上でカラノスのことについても語ることがどうしても必要だったからだ。ところでそのカラノスはそれまでは一度も病氣などしたことがなかったのに、ペルシスの地に入ると身体がしだいに衰弱していった。それでも彼には病人としての養生をする気などさうになく、かえってこの状態では自分としては、従来続けてきた生活の仕方をどうしても変えなくてはならないやうな何らかの病苦に見舞われないうちにこの生を終えるのが望ましいことなのだと、アレクサンドロスに語ったという。アレクサンドロスは長時間かけて彼の考えに反論したが相手が聴き入れそうもなく、反対にこの点で相手の言ったことを認めてやらなければ何かまた別の手段で生を絶つかもしないと見てとったので、カラノス自身が指示するままに彼のための火葬堆^{くわい}を積み上げてやるよう〔部下に〕命じた。その任務を託されたのはラゴスの子で側近護衛官のプトレマイオスだった。一説に伝えるところではアレクサンドロスは騎兵と歩兵に、あるいは武装をさせるあるいは火葬堆のためのさまざまな薫香を携えさせて、その〔火葬の〕現場に盛大な分列行進の式を挙行了たという。
- 3 またこれも一説によると参列者は金製や銀製の杯また王侯が着用する装束を捧げて行進したともいう。カラノス自身は病氣のために歩行ができなかったので彼のために乗馬が用意されたが、彼はその馬にさえ乗れる状態になかったため吊り台に移され、インド人の風習にしたがって花冠で飾られてインド語で歌を口ずさみながら運ばれた。インド人たちによればその歌は神々にささげる賛歌や祝歌^{ほろけ}だったということだ。カラノスが乗って行くことになっていた馬はネサイオイ人の王家の所有だったといわれるが、彼は火葬堆へ上^{のぼ}るに先立ちその馬をリュシマコスに贈った。リュシマコスは叡知の教えを求めて彼に随侍してきたうちのひとりだったのである。杯や敷物類のうちアレクサンドロスが彼を莊嚴^{しょうげん}するために火葬堆に加えるよう命じておいた品々も、カラノスは他の弟子たちにそれぞれ〔形見として〕頒ちあたえたのであった。かくてカラノスは火葬堆に上ると全軍注目の中で作法通りに身を横たえた。ア

レクサンドロスとしては自分の友人が見せ物として衆目に曝^{さら}されるのは何とも不都合なことではあったが、他の者たちはカラノスが炎の中にその身を置きながら微動だにしないのを目のあたりにして驚異の念に打たれたのだった。あらかじめ命ぜられていた者たちの手で火葬堆に火が掛けられると、これはネアルコスが伝えるところだが、前以てアレクサンドロスが指示しておいた通りにラッパが吹き鳴らされ並^{なら}ぶ軍勢は合戦にのぞんで挙げるあの闘いの声にも似た雄^{おたけび}哮^{おたけび}を一齐に挙げた。戦象の群れもまたカラノスをたたえて鋭い戦闘の叫びを高らかにひびかせたのだった。インド人カラノスについてはこうしたことまたこれに類したことが、信頼すべき人びとによっていろいろと書きとめられているが、それらの話は広く人間に、別けてもおよそ何事かを成さんものと志す人の決意というものがいかに強固でいかに抜きがたいかを知りたいと願う人にとっては、必ずしも無用ではないのである。

四 アレクサンドロスがアトロパテスをその所管とする太守領（メディア）へ帰任させたのは、彼がスサへ到着したその頃のことであった。スサではまたアブリテスとその息子オクサトレスが逮捕処刑された。この兩人のスサ住民にたいする行政が良くなかったためである。実際アレクサンドロスが征服した各地域を預かる者たちの手で神殿や墳墓にたいし、また地域住民そのものにたいしても数多くの非違非行がなされていた。王のインド遠征はもうすでに長い歳月にわたっており、インドス川を渡りヒュダスぺス川、アケシネス川を抜きさらにヒュパシス川を越えてなおも前進を続ける彼が、「伝え聞く」数^{あまた}多^たの種族、数多の戦象（との戦）を切り抜けていつの日か帰還して来ようなどとはとても信じがたいことに思われたからだ。のみならず彼がガドロソイ人の地で嘗^なめた災難の数々もまた、その地の太守たちが彼の無事帰着（の可能性）について大胆にも鼻であしらうような傾向を一段と助長することになったのである。しかしそればかりではなくアレクサンドロス自身の方もこの当時、彼の許に告発されてくる事柄についてはそれがたとえどんな場合であっても、まるで動かぬ証拠でもあるかのように厳しきに過ぎる態度でこれに臨み、よしそれが微罪に問われた者たちでも容赦なく苛酷な処罰を加えたと伝えられている。彼の考えではそんな連

中にしても、また同じ心ばえで大罪を犯しかねないというのであった。

- 4 アレクサンドロスはまたこのスサで自分自身と側近ヘタイロイたちのために結婚の式を挙げた。まず彼みずからはダレイオス(三世)の長女バルシネと結婚することにしたが、アリストブロスの伝えによればバルシネの他に今ひとりのオコス(アルタセルセス三世)の末娘のパリュサティスをも娶(めと)ることにした。もっとも彼にはすでにバクトリア人オクシュアルテスの娘ロクサネが連れ添っていたのである。アレクサンドロスはヘパイスティオンにはドリユペティスをあたえることにした。彼女もまたダレイオスの娘で、したがって彼自身が妻とした女とは姉妹にあたる。彼としてはヘパイスティオンの子供たちが自分の子供たちといとこ同士の間柄になることを望んだのだった。またクラテロスにはダレイオスの兄弟であるオクシュアトレスの娘アマストリネが、ペルディッカスにはメディア太守6アトロパテスの娘があたえられた。側近護衛官のプトレマイオスと王の秘書官のエウメネスにはアルタバゾスのふたりの娘、アルタカマとアルトニスがそれぞれあたえられ、そしてネアルコスにはバルシネとメントルの(間に生まれた)娘、またセレウコスにはバクトリア人スピタメネスの娘があたえられることになった。同じようにしてその他のヘタイロイたちにもペルシア人やメディア人の家系で最高の貴顕に属する家の娘たちおよそ八十人があたえられたのである。これらの人びとの結婚式はペルシアの伝統的な仕来りにしたがって挙行された。花婿たちのためには7たのである。これらの人びとの結婚式はペルシアの伝統的な仕来りにしたがって挙行された。花婿たちのためには座席が幾列にもわたってしつらえられ、まず祝杯が挙げられた後花嫁たちが入場して各自自分の花婿のかたわらに着席した。そこで花婿たちはわが花嫁を抱き寄せると愛のくちづけを贈ったのである。最初にその範を示したのは王であった。全員の結婚式は同時に進められたからである。このやり方によってアレクサンドロスの態度振舞いは8別けても庶民的で友情に厚いという好評を得たのである。花婿たちは相手を拝領するとそれぞれに花嫁を伴って退出したが、アレクサンドロスは彼ら全員のために婚資をも併せ贈り物としてやったのである。その他のマケドニア人にしてアジア人女性と結婚した者たちも残らずその名前を届け出るよう指示されたが、その数は合わせて一万人

以上にも上った。アレクサンドロスはその彼らのためにも結婚の贈り物をしてやったのである。

五 彼はまた軍の内部で借を作っている者たち全員のためにその借金を皆済してやるのにも、今がそのよい潮ときだと考え、各人それだけの金額を実際に受領するものとして、一体どのくらい借りがあるのかをそれぞれ申告するよう指示した。ところが〔将兵の間では〕これはひよっとすると、給与の限度内で生活を立てていないのはどの兵士か、暮しぶりが派手なのはどの兵士かをアレクサンドロスが調査しようとしているのではないかという疑心暗鬼が2ら、最初のうちは自分の名前を届け出てくる者もごく僅かしかなかった。アレクサンドロスの方はほとんどの者がこうしてその名前を申告しては来ず、借金の証文がある者たちもそのことを秘密にしているという報告を受けると、兵士たちが自分を信用しないのを詰った。いやしくも王たる者は臣民にたいして真実を語るより以外のことがあつてはならぬ、統治される側もまた何びとたりと王が真実以外のことを口にするなど、つゆ思つてはならぬというのであつた。そこで彼は陣営内に台を据えてそれらの上に金を積み上げると、下賜金交付事務の担当者たちには借金の証文を提示した全員ひとりひとりのために、その上なお氏名を書きとめることなくその借金を皆済してやるよう指示した。ここまでしてやっと兵士たちもアレクサンドロスが本当のことを言っているのだと信用する気になつたのであり、彼らとしては借金から解放されたことよりも〔自分の名前を〕知られずに済んだことの方をずっと欣んだのであつた。軍にたいする下賜金そのものは総額およそ二万タランタに達した。

4 アレクサンドロスはまた他の者たちについても各人その処遇されている位階席次に応じ、あるいは場合によっては危難に際して發揮された卓抜な武勲に應じて、各様の贈り物をした。また武勇に拔きん出た者たちにたいしては黄金の花冠を贈つてその功を嘉したのである。その筆頭王を楯で庇い護つたペウケスタス、これに次いでレオ5ンナトスだつた。このレオンナトスはこれまた王を楯で庇い護つた手柄に加えてインドで幾多危険を冒し、オラでも勝利を得たための行賞であつた。彼は手許に残された部隊をひきいて反乱を起こしたオレイタイ人やその隣接住

民と戦を交え、戦鬪に勝利を収めただけでなく他にも現地オラの状勢全般を安定させたことが認められたのである。

6 このふたりに続いてはネアルコスが、大海を凌いでインド人の地から沿岸伝いに航行してきたその功によって冠を受けた。彼もまたすでにスサに到達していたのである。これらに次いでは王の御座船の舵取りを勤めたオネシクリトスが冠を受けた。以上に加えてヘパイステイオンその他の側近護衛官もまたそれぞれ論功行賞にあづかったのである。

六 アレクサンドロスの許には、彼が新たに建設した町々や彼が武力で征服した各地方からも「そこを所管とする」太守たちが、同じ年頃ですでに成年に達した少年たち、総勢およそ三万人をひきいてやって来た。アレクサンドロスは「後継ぎ^{エピゴノイ}」と呼ぶことにしたその少年たちは皆、マケドニア風の戎衣^{じゅうい}に身を固めており軍事教練もマケドニア2式のやり方で施されていたのである。伝えられるところによると彼らがやって来たことは、マケドニア人たちの心をひどく傷つけた。マケドニア人たちはアレクサンドロスがこんな風に万事策を弄して、もうこの先自分ら無しでやって行こうとしているのではないかと思ったというのだ。実際マケドニア人にとっては当時、アレクサンドロスがメデシア風の衣裳を身に着けているのを見るさえ少なからぬ憤懣の種だったという。ペルシア風の伝統的な仕来りにしたがって行われたあの結婚式にしても、それはマケドニア人大方の心に副うものではなかったばかりか当の花婿の中にさえ、王と一様対等の仕方できたそのこと自体はたいへんな名誉としながらも、それを好感しなかった者たちがいたのである。ペルシア人を統治する「ペルシス」太守のペウケスタスが日常ペルシア服を着、ペルシア語を使っていることもマケドニア人たちを憤激させた。しかしアレクサンドロスがその彼の夷狄かぶれに御満悦だった。その他バクトリア人、ソグディアナ人、ザランガイ人、アレイオイ人、パルティア人の各騎兵、それに「エウアカイ」と呼称されるペルシア人騎兵のうち位階席次や容姿端麗その他の美質において衆に抜きん出ると目された者たちが、のこらず選抜されてヘタイロイ騎兵隊に編入されたこと。これに加えて第五番目の騎兵隊が編成され

たこと。この新設の騎兵隊はその全員が異邦民から編成されたわけではなかったが、「既存の」騎兵隊がいずれも増員された際に異邦民からとくにその目的で編成されたものだった。またアルタバズの子コペン、マザイオスのふたりの子ヒュダルネスとアルティボレス、パルティア・ヒュルカニア両地方の太守プラタペルネスのふたりの子シシネスとプラダスメネス、オクシュアルテスの子アレクサンドロスの妻ロクサネとは兄弟になるイタネス、それにアイゴバレスとその兄弟のミトロバイオスといった面々が騎兵親衛隊に追加編入されたこと。その彼らにはバクトリア人のヒュスタスパスが指揮官の地位に立てられたこと。また彼らには「すべり止めの」革紐が付いたペルシア風の投槍の代りにマケドニア型の槍が持たされたこと——およそこういったことが悉くマケドニア人たちを憤激させたのは、アレクサンドロスのものの考え方がもうすっかり夷狄かぶれして、マケドニアの慣習をもマケドニア人そのものをさえないがしろにするものと彼らが考えたからなのであった。

七　ところでアレクサンドロスはヘパイステイオンに歩兵部隊の大半をひきいてペルシア海まで出るよう指示すると彼自身も、当時彼の艦隊はスサの地方まで川を溯ってきていたので、近衛歩兵部隊、騎兵親衛隊とともにその艦隊に乗りヘタイロイ騎兵の一部もこれに搭乗させてエウライオス川を海まで下った。海への出口近くまでやって来ると彼は、破損したものを含め大部分の船をそこに残しておいて、自分自身は最優速の船数隻をひきエウライオス川からティグリス川の河口まで海を沿岸伝いに行った。一方後に残された他の船々はエウライオス經由で、ティグリス川からエウライオス川まで開鑿された運河へと誘導され、そこでティグリス川に移されたのである。

3　さてエウプラテス川とティグリス川とはその間にアッシリアの地を挟みこんでいて、そこから「この地方は」現地住民に「河間の地」という名前で呼ばれているのだが、そのふたつの川のうちティグリス川の方はエウプラテス川よりもかなり低いところを流れていて、エウプラテス川からたくさんの運河を引き入れ、他にも多くの河川を取り込みつつ、それらのおかげで水量をふやし、やがてペルシア海へと注いでいる。川は大きく河口にいたるまでどこに

4 も徒渉できる地点はない。川水が土地の灌漑に利用されることがないからだ。つまりこの川筋では土地は水面よりも高く、したがってこの川は運河によりあるいは支流によって川水を分けるということがない、それどころか逆にそうした水路をこちらに取り込んでいたのであって、この川筋ではどこも川から水を引いて土地を灌漑することができないのである。これに反してエウプラテス川の方はもっと高い川床を流れていて、その川縁は川筋のどのあたりをとってみても周辺の土地と同じ高さであり、たくさん運河がこの川筋から造成されている。それらの運河の中にはいつも水が通っていて兩岸の住民たちが常にそこから取水しているものもあれば、また中には周辺住民に水不足が生じた時にだけ、頃合を見て土地の灌漑用に水を通すものもある。この地方は全般的に雨が少ないからである。このようにしてエウプラテス川は流れるにしたがってしだいに水量が乏しくなり、かくてついにはかの沼沢地で流れを止めてしまうのである。

6 アレクサンドロスはエウライオス川とティグリス川の間、ペルシア湾の岸辺が続く限りその沿岸を海路船で行きティグリス川を溯って、ヘパイスティオンがもう全軍とともに止営中の宿营地にいたった。次いで彼はそこからまた船を走らせてティグリス河畔の町オピスに到着した。溯江の途中彼は川中に設けられてある堰堤をのこらず取り壊して川の流れがどこも一樣円滑にゆくようにした。もともとこれらの堰堤は、何者かが海から川を溯って自分たちの国土にまで浸入し来たり、艦隊の力にものを言わせて川筋一帯を制圧してしまうといったことがないようにと、ペルシア人が構築したものだ。彼らがこんなものを考え出したのは、実のところペルシア人が海軍力において弱体だったからなのだ。このようにも間隔をつめて造成された堰堤群は、たしかにティグリス川を溯上できなくさせるものであった。アレクサンドロスが語ったところによると、およそこの種の仕掛は軍事力の点で弱体なものであることであって、こんな備えなどは自分にとっては何の役にも立たないというのであった。そこで彼はペルシア人たちが多大の労力を費やして築いたこれらの代物をあっけなく取り壊して、それらが全くの無用の長物であるこ

とを自らの手で衆目の前に示したのであった。

八 オピスに到着するとアレクサンドロスはマケドニア人を招集して、老年とか身体の故障とかで戦闘に向かない者はこれを除隊させ、それぞれの郷里に復員させる、一方引き続き残留する者たちにたいしては、家郷にある者を羨ましがる程の手当、他のマケドニア人たちを勇躍発奮させてそれなら自分たちも同じ艱難辛苦に馳せ参じようという気にならせる程の手当を支給することにすると公表した。アレクサンドロスとしてはむろん、マケドニア人たちを悦ばせようとしてこう言ったのだった。ところがマケドニア人たちの方には自分たちが、もう前々からアレクサンドロスに軽く見られ、総じて軍務には役立たずな連中だと思われているという思い込みがあつて、無理ならぬことだがこの時もまた、アレクサンドロスが口にした言葉にひどく憤慨したのである。この遠征の全期間を通じて彼らは多くのさまざまな問題に不満をいだいてきたのだ。ペルシア風の服装も帰するところは同じことであつて、彼らにはもう早くからしばしば憤懣の種だつたし、夷狄の「後継ぎ」^{エピゴノイ}どもがマケドニア風の戎衣を着用したことにしても、異邦人騎兵がヘタイロイ部隊に編入されたことにしてもそうだったのである。マケドニア人たちはもうそれ以上沈黙を我慢してはいられず、それなら自分たち全員を軍隊からお払い箱にしてほしい、そして御自身はお父上と一緒に戦^{いくさ}をお続けになればよいと述べ立てた。この「お父上という言いまわしで彼らはアモン神のことを當てこすつたのである。これを聞くなりアレクサンドロスは（その当時はたしかに怒りっぽくなつてもいたし、異邦人たちからちやほやと傳^{かたず}かれた結果マケドニア人にたいしても、昔のように寛大ではなくなつていたこともあつて）、側近くにいた將校たちとともに演壇から跳びおり、兵士大衆を煽動していた中でもとくに目立った者たちを逮捕せよと命じた。彼はどの男とどの男を逮捕すべきか、相手を直接自分で指さしながら近衛歩兵たちにそう命じたのだ。こうして逮捕された兵士はおよそ十三人に上つたが彼はその連中をただちに処刑しに連行してゆくよう命じたのである。そして残つた他の者たちがこれに胆をつぶして口も利けない有様でいると、彼はふたたび演壇に上つ

てこう語った。

九 「マケドニア人諸君。私がこれから話すのはなにも君たちの帰国の旅立ちを阻止せんがためではない。君たちは私のことなど構わずここを去ってどこへなりと好きなところへ行つてよいからだ。私がこれから話そうと思うのはそのためではなく、我々が君たちのためには一体どんな存在であつたのか、その我々にたいして今君たち自身はどんな〔忘恩の〕輩^{やから}となり果ててここから立ち去ろうとしているのか、そのことを君たちにはつきりと認識させるためなのだ。まずは話の順序として父ピリッポスのことから始めることにしよう。ピリッポスの眼に映つた当時の君たちの姿は、定まつた家もなければその日の暮しにも事欠くといった惨めな有様だつた。大方の者はその頃までまだ羊の毛皮を身にまとい僅かばかりの羊の群れを山の上で放牧しながらそれらを後生大事に守つて、イリュリア人だのトリバッロイ人だのすぐ隣りのトラキア人だのと勝ち目の少ない苦しい戦^{いくさ}を続けていたのだ。父はそんな君たちを見て羊の毛皮の代りに身につけるようにと外套を支給してやり、君たちを山から平地へと連れ出し、これからはもう山中の地の利に頼るのではなく、むしろ持ち前の勇氣をこそ頼みとして近くの蛮族とも十分に渡り合えるだけの勇者ぞろいに君たちを鍛え上げた。また君たちを町の住民とした上、立派な法や慣習を整備して町をととのえてもやつたのだ。父はまたそれまで優勢を恃^{たの}んで君たちの身柄を凌^きつたり君たちの持ち物を掠め取つたりしていた周辺のかの蛮族を討ち平げて、君たちを奴隷だの隷属民だのといった屈辱から解放し、それどころか逆に君たちを彼らの支配者たるの地位に立たせてやつた。父はさらにトラキアの大部分をマケドニアの領土に加え、海沿いの地方のうちでもこの上なく恵まれた土地を獲得してわが国土のために通商の拠点を開き、また君たちが安んじて鉱山の採掘に従事できるようにもしてやつたのだ。父はまた昔なら君たちが脅^{おび}え死ぬ程にも恐れたあのテッサリア人を、逆に君たちの統率の下においた上ポキス人を無力化して、君たちのためにギリシアへの道をもはや狭い困難な道ではなく、広い坦々たる大道にしてもやつた。アテナイ人やテバイ人たちはしよつ中わがマケドニアをつけ狙つ

ていたが、その彼らを父は徹底的に屈服させた。ちなみにもうこの段階では我々とて、父のこうした功業達成に一役買っているのだが、ともかくその結果は我々がアテナイ人に貢租を支払ったりテバイ人の命令に服従したりするのでなく、立場変ってその彼らの方が自分たちの身の安全のために、何とかして我々の側から保証を取り付けようとする風になったのだ。父はペロポネソスに入るとそこでも情勢をととのえた上、ペルシア遠征に向けてのギリシアの残り全域の全権指導者に指名されたが、その名誉は父自身にというよりもむしろ、マケドニア国民に一層の花を添えるものだったのだ。

6 父が諸君のためにしてやったこうしたことは、それだけを取り出して考えてみればなるほど大したものだ。しかしそれとてわれわれ自身が得たところと見比べるならばいかにも小さい。私が父から受け継いだものは僅かばかりの金銀の盃と金庫にあった六十タランタ足らず、しかもピリッポスがこしらえたおよそ五百タランタもの借金を背負いこんだ上、私自身も別途八百タランタの借りをつくるといふそんな状態で、諸君が自活してゆくさえどう見ても覚束ない土地から軍を起こした私は、ペルシア人がまだ海を抑えていたあの当時、ヘッレスポントスの渡を手際よく一気に諸君の前に開放してやったのだ。次いでダレイオスの太守たちを騎兵戦で圧倒した私は、イオニア全部にアイオリスの全部と両つの地域のプリュギア人、それにリュディア人たちの地を諸君の領土に加え、ミレトスもこれを囲んで攻略した。進んで降伏を申し出てきたその他の地方も私は、それらを手に入れると全部諸君のものにして諸君の用に供してやった。戦わずして手に入れたエジプトやキュレネから上がる資財も諸君のものとなったし、コイレ・シリアやパレスティナや両河の間の地（メソポタミア）も諸君の財産なら、バビュロンもバクトラもスサもこれまた諸君のものだ。リュディア人の富、ペルシア人の財宝それにインド人の資財、さらにはその外海もまた諸君のものだ。（これらの土地に）太守となるのも君たちなら、將軍となるのも部隊指揮官となるのも皆君たちなのだ。なぜといってこれらの艱難辛苦を経てきた今でさえ、王としてのこの衣裳と髪飾り以外にこの私の手許に一体何が

残っているというのか。私が自分用に得たものなど何ひとつとしてありはしない。何処の誰にしたところで現に諸君の持物であるこれらのもの以外、あるいは諸君のためとりあえず保管されているもの以外に、私の財産なるものを、これがそうだと指摘できる者などいるわけがないのだ。そういったものを蓄えたところで、私一個のためには何の得にもならないからだ。私は君たちと同じものを食べ夜も君たちと同じようにして眠っている。それどころか自分では、君たちのうちでも口の奢った者が食べる程のものも口にしてはいないと思うくらいだし、夜は夜で君たちが安眠できるようにと君たちのためを思つては目覚めがちなことも、余人は知らず少なくともこの私には分っているのだ。

一〇 しかし私がそうした一切のものを獲得したについては、それは諸君ばかりが一方的に艱難辛苦、辛酸を嘗めたその結果であつて、この私自身は指揮をとる立場として別にこれといった艱難辛苦も辛酸もなしに済んだのだと、あるいはそう思うものがあるかもしれない。それならば我こそは王が自分のために力戦奮闘してくれたそれ以上、王のため粉骨碎身したとあえて自認できる者が、諸君の中に果して何人いるか。諸君のうち誰でもよい、実際にここに出てきて裸になつて自分が受けた傷痕を見せてみよ。そうすれば私は自分で自分の身体を見せようから。2 私について言えば身体中いたる所、少なくともこの前半身に無傷のままの個所などどこにも残つてはいない。白兵によるものであれ飛道具によるものであれ、その傷痕を我が身に残していないような武器はひとつとしてない程だ。白兵戦では刀傷を受け矢玉にも射当てられ、射出機が射ち出す弾にも撃たれ、石弾や棍棒で負傷したことも数えるに暇ない。それもこれもすべて諸君のため、諸君の名を挙げ諸君を豊かに富ませようとして身を挺した結果であり、私はこの間ずっと君たちを勝ち進む征服者としてあらゆる地方、海という海、あらゆる山河あらゆる曠野を踏破しながらひきいてきたのだ。私は諸君と同じ結婚式を挙げた。やがて生まれる君らのたくさんの子供たちは皆、私の子供たちと同胞になるのだ。それだけではない。あれ程の給与を受けながら、また囲んだ町が掠奪にゆだねられた

となるといつもあれ程掠奪勝手を許されながら、それでもなお借金をこしらえた者たちにたいして、私はなぜ借りができたのか一々穿鑿^{せんさく}もしないで、それらを全部氣前よく皆済してもやった。また君たち〔指揮官クラス〕の大方は黄金の花冠を受けている。それこそは君たちの武勇の形見、私から受けた名誉の不滅の記念なのだ。また戦^{いくさ}に斃れた者といえどもその死は本人に誉れあるものとなった。葬儀は盛大に営まれ、戦死した大方の者たちのためにはその青銅像が故郷^{ふるさと}に建立されている。それに戦死者の親たちは一切の軍役奉仕義務や財産税を免除されて、世に顕彰されている。わが麾下に属する諸君のうち敵に後^{うしろ}を見せて命を落したような者は、無論一人としていないからだ。

5 ところで今度のことだが、私としては諸君のうちでこの上軍務に耐え得ない者たちを今後は郷党に羨まれる存在として復員させようと、そう考えたのだ。しかし諸君の全員がここを去りたいというのなら、皆一人残らず立ち去るがよい。そして郷里に帰ってこんな風にも報告したらどうだ。われ等の王アレクサンドロスはペルシア人に勝ちメデイア人、バクトリア人、サカイ人を征服し、ウクシオイ人やアラコタイ人やドラングイ人を靡^{なび}かせ、パルティア人やホラスミア人それにカスピ海にいたるヒュルカニア人を制圧し、カスピ門を越えてカウカソス山を踏破し、オクソス川もタナイス川も押し渡り、その上デイオニュソス〔神〕以外にいまだ何びとも越えたことのないインドス川を渡って更にはヒュダスペース、アケシネス、ヒュドラオテスといった大河をも抜き、もし自分たち〔将兵〕が尻込みしなかったらヒュパシス川までも渡り越していたところだった。のみならず〔われ等の王は〕インドス川の両^{ふた}つの河口を通過して大洋にまで乗り出し、それまで誰もまだ軍をひきいては通ったことがなかったガドロシアの砂漠を踏み越え、その道すがらにはカルマニアとオレイタイ人の土地をも併合した。しかもその間には王の艦隊もはやインドからペルシアにかけての海に沿岸航海を無事達成していた。ところでこの我々はそんな風にしてスサまで帰り着いたとなるとそこで、王は現地に放ったらかし、征服された夷狄どもの世話に任せたりにして〔王の許から〕立ち去ってきたのだと。こんな風にも報告すれば諸君はきっと世間様には名誉なことだろうし、神々の御心^{みこころ}にもさぞかし

十分に叶おうというものだ。さあ行つてしまえ」。

- 一一 これだけ言つとアレクサンドロスはやにわに演壇から跳び降り、そのまま王の宿舎へ帰り着くなり寢食のこともなおざりにして顧みなければ、側近の誰にも姿さえ見せず、翌日になつてもなお姿を現わさなかった。三日目になると彼はペルシア人のうちから人を選んで内に呼び入れ、(歩兵)諸隊の指揮官を彼らに振りわけ、また彼が
- 2 「同胞」^{シユンゲネイス}と呼んだ者にだけ自分にキスできる特権をあたえた。さてマケドニア人の方は彼の演説を聴いただけで立ちどころにすっかり度胆を抜かれ、そのまま演壇の近くにたむろしたまま静まりかえつていた。側近のヘタイロイと護衛官たちを除いては、立ち去る王の後を追う者といふなかつたのだ。大方の者はその場にとどまりながら何をするでもなく、何を発言するでもなかつたが、さりとて思いきりよくそこを立ち去る気にもなれなかつたのである。
- 3 する。そのうちペルシア人やメディア人に対する(王の)措置が彼らのところにも伝わつて、諸隊の指揮権がペルシア人に委ねられ東方人の軍勢が部隊単位に編成された上、マケドニア人部隊(に固有)の名称までも、一部のペルシア人部隊が「親衛隊」^{アゲイマ}の名をもつて呼ばれることになつた他、ペルシア人の歩兵ヘタイロイ部隊とかペルシア人の「アステテロイ」部隊とかペルシア人の「銀楯」隊とか、さらには王の新たな親衛隊をふくむ(ペルシア人の)ヘタイロイ騎兵隊といった風に(東方人部隊に)すっかり転用されてしまつたと分かれると、彼らはもうそれ以上我慢できず、
- 4 一団となつて王の宿舎へと駆けつけた。彼らは王に対するひたすらな歎願者のしるしとして、自分たちが手にした武器を入口の前に投げ出した上、どうか中へ入れて頂きたい、あの時騒ぎをひき起こした発頭人も野次の音頭取りをした連中も皆引き渡すつもりだからと訴えて入口の前に立ちつくし、口々に呼ばわりつづけた。彼らとしては王が自分たちに少しでも憐れみの情を示してくれない限りは、昼といわず夜といわずどんなことがあつてもこの入口から離れないというのであつた。
- 5 この有様がアレクサンドロスに伝えられると彼は取るものも取りあえず表に出てきたが、マケドニア人たちが打

ち挫かれた様子で地べたにうずくまっているのを見、大方の者がしゃくり上げながらおも呼ばわっているのを耳にすると、その彼の目にも涙があふれた。彼は何か物言いたげに歩み出たが、相手は思いつめた様子でその場を動こうとはしなかった。その時彼らのなかから年長という点でも、またヘタイロイ騎兵隊所属の隊長というその地位からしても衆に抜きん出たカッリネスという人物が、およそ次のように語りかけた。「王よ、マケドニア人たちが身も世もなく歎いているのは、貴方がペルシア人の誰彼をもう今では御自分の同胞扱いになさってペルシア人たちがアレクサンドロスの同胞と呼ばれ、しかも貴方に親愛のキスをするさえ許されているというそのことなのです。それなのに私たちマケドニア人はまだ誰も、そんな名誉に一度もあずかつてはおりません」。するとアレクサンドロスはその後を引き取ってこう続けた。「だが私の方は君たち全員をのこらず自分の同胞だと思っているのだ。少なくともこれからはそう呼ぶことにしよう」。彼がこう言い終るとカッリネスは前に進み出て王にキスをささげ、他の希望者たちもこれに倣った。このようにして彼らはふたたび武器を執り上げると歓呼の声を挙げながら、また軍歌を歌いながら意気揚々と陣営に引揚げていったのだった。このことがあって後アレクサンドロスは、日頃供儀を慣わしとしている神々に犠牲をささげ、次いで公式の祝宴を催した。彼自身がまず真中に座を占めると、彼をぐるりと取り巻いてマケドニア人全員が着席し、その彼らに次いでペルシア人が、またペルシア人たちに次いではその他の種族民のうち、身分地位あるいは何か別の点で上席を占める者たちが座についた。アレクサンドロスと彼を取り巻くこれらの人びとは、こうして同じひとつの混酒器から酒を酌み、同じ灌奠の儀式を執り行なったのである。儀式の先導役をつとめたのはギリシア人の占師たちと「ペルシア人の」マゴス僧たちであった。アレクサンドロスはこの時さまざまな倖せを神々に祈ったなかで、別けてもマケドニア人とペルシア人とが心をひとつにして支配に力を合わせるよう祈念したのであった。一説に伝えられるところではこの祝宴に参加した人びとの数は九千人に上ったといい、また参加者はその全員が同じ灌奠の儀式を行なってから祝い歌を皆で唱和したという。

一二 さてこうしてマケドニア人のうち年齢をとったりその他何らかの事情で軍務に耐え得なくなった者たちは、自発的に王と別れを告げることになった。アレクサンドロスは彼らに過ぎ去った歲月の分ばかりか、これから帰国するのに要する日数までも計算に入れてその給与を支払ってやった。しかも彼は給料分に加算してひとりひとりに、更に一タラントンずつを上乗せしてやったのである。東方人の妻との間にすでに子供がある者の場合、子供は自分の許に残してゆくようにとアレクサンドロスが指示したのは、東方人の妻から生まれた異人の子を連れ帰ることで、郷里に残してある子供やその母親との諍の種をマケドニアにまで持ちこませないための措置だったが、その代り〔現地に残される〕子供たちの方は彼自身が万事にわたり、とりわけ軍事面でマケドニア風にきちんと育て上げられるよう、責任をもつこととし、また将来成人のあかつきには彼が直接マケドニアに連れ帰って彼らをそれぞれ3の父親に引き渡そうということになった。アレクサンドロスが去り行く者たちに約束したこれらのことはいかにも漠然として、確実な保証もないことだったが、彼はまた自分が彼らに対してどんなに深い愛情と好意をいだいているか、その何より確かな証拠を見せてやりたいと考えて、自分にはもつとも誠実な部下であり己が命も同然とまで見なしているクラテロスを、帰還部隊の護衛役とも引率指揮官ともして、彼らに付けてやることにした。このようにしてアレクサンドロスは、みずから涙ながら全員に袂別の挨拶をしたあとで、これまた涙にかきくれる彼らを自4分の許から去らせたのであった。ところでアレクサンドロスはクラテロスに対しては帰還将兵の引率を命ずる一方で、無事帰国を果たした上はマケドニア、トラキア、テッサリアを統べギリシア人の自由を統轄する任務に就くことをも命じたのであって、これに対しアンティパトロスには復員将兵の後を埋める若盛りのマケドニア人たちをひきいてこちらに赴くよう指示したのである。アレクサンドロスはまたポリュペルコンをもクラテロスとともに彼の次席指揮官として出発させたが、それはクラテロスが病弱の身で派遣されることになったので、帰国の途上万一の事があった場合にも、一行が指揮官不在といった状態にならないようにと考えての措置なのであった。

5 しかし王が何事かを決めて実行するにしても、それが内密にされればされる程ことさら熱心に穿^{うが}つて解釈を加え、たとえ誠心誠意に出たことでも素直にそれを事実として受けとるよりはむしろ、何か悪意下心あつてのことだと曲解してしまう、そんな人びとの間では——彼らをそうした邪推に導くのは所詮は根拠のない臆測と当人の陋劣^{ろうれつ}な心根なのだが——ひそかに次のようなある噂話が広く流れた。アレクサンドロスはアンティパトロスに対する母親（オリュンピアス）の誹謗中傷にとつと根負けして、アンティパトロスをマケドニアから遠ざけることにしたのだというのである。おそらくアンティパトロスの召喚もその実（アレクサンドロスとして）は別段彼の左遷を意図したことではなく、二人の仲違いからお互いの間に何らか好ましからぬ問題が生じて自分の手に負えなくなるといった事態に発展しないように、といった考慮の結果だったのであろう。それというのも（本国に在った）二人はしょつ中アレクサンドロス宛に手紙を書き送っていたのであつて、アンティパトロスの方はオリュンピアスの鼻っ柱の強さ、そのはげしい気性、余計な口出し好きを難じて、こんなお振舞いはアレクサンドロスの母君としてまことに遺憾な不似合なことだと書き寄越し、そんなところからアレクサンドロスについての次のようなひとつ話も広まったのだ。彼は自分の母親のことで寄せられた報告のことに触れて、実際母上ときては十か月分の宿貸し代としてずいぶんと高くお取立てになるものだと言ふ漏らしたというのである。一方オリュンピアスの方もまたアンティパトロスがその權威を笠に着て、それに周囲からもちやほやされた結果すっかり高慢ちきになり、もう今となつては誰のおかげで現在の地位に就いているのかも知らぬ顔に、自分こそが他のマケドニア人やギリシア人の中でも第一人者だと思つていふなどと相手のことを言い寄越しきていたのである。いずれにせよアンティパトロス誹謗に帰着するこつとした訴えは、アレクサンドロスの側にもようやくその效き目を現わすように見えた。これぞまさしく王権に脅威を加えるものだったからだ。とはいえアレクサンドロスにとってアンティパトロスはこんな風に好ましからざる人物だったのだと、誰かがそう推論するに足るだけののはつきりした行動なり言葉なりがアレクサンドロスに関して伝えられている

というわけではないのである。……（底本では約三行分欠落）……ヘパイスティオン……。

一三 ヘパイスティオンはこうした言葉に説き伏せられて不承不承、相手は（和解に）乗気のエウメネスと仲直りしたのだという。一説によればアレクサンドロスが王家所有の牝馬の放牧用に充てられた草原を親しく視察したのも、この行軍の道すがらのことであつた。ヘロドトスによるとこの草原はネサイアの原といい、馬どもはネサイア馬の名で呼ばれているという。かつてはここにおよそ十五万頭もの馬がいたが、その時アレクサンドロスが見たのはたかだか五万頭程度にすぎなかったという話だ。盗人どものために大方の馬が連れ去られてしまっていたのである。

2 伝えられるところではメディア太守のアトロパテスが、アマゾネス族の者だという触れこみで百人の女たちをアレクサンドロスに贈つたのもそこでのことだったという。彼女らは男の騎兵と同じ装に身を固めていたが、ただ槍の代りに手斧を携え、大楯ではなく円い小楯を手に使っていた点だけが違っていた。右の乳房は左のより小さくしか3も戦闘に当つてはそれを露わにしたとも伝えられている。アレクサンドロスはしかしその女たちがマケドニア人や東方人（の荒くれ男ども）から何か乱暴な振舞いを受けることがないようにと、彼女らを軍の一行から立ち去らせることにし、アマゾネス族の女王に対しては、アレクサンドロス自身がみずから彼女の許に出向いて彼女と子供を儲けたいと思つている旨を申し伝えよと命じたという。ただしこの話はアリストプロスもプトレマイオスも、その他お4よその種のことについては信頼すべき典拠となる誰彼も、これを書きとめてはいない。この私にしたところではアマゾネスの種族がその当時、どこかアレクサンドロスの頃より以前に溯つてみてさえ、まだ生き残っていたなどとはとても思えない。そうでなければ、クセノポンもパシアノイ人だとかコルキス人だとかその他およそギリシア人たちがトラペズスを発つてから、あるいはトラペズスへたどり着くまでの間に会つた限りの未開の種族のことには言及しているのだから、もしも当時まだ本当にアマゾネス族がいたのなら、彼らとどこかできつと彼女らに

5 出くわしたに違いないのだ。しかしだからといってこうした女人族がおよそ全く存在もしなかったのかと言えば、そうはこの私にも信じがたい。「彼女らのことは」これまでも多くの著名人に歌われ讃えられてきているからだ。たとえばヘラクレスがアマゾネス族の許に遣わされ、彼女らの女王ヒッポリュテの帯をギリシアに持ち帰ったという話、またこの女人族がヨーロッパに攻め寄せてきたとき、はじめて合戦でこれを打ち破って撃退したのはテセウスと彼にひきいられたアテナイ人だったという話などは広く世に行われている。それにアテナイ人とアマゾネス族との戦^{いくさ}6の有様はミコンが、アテナイ人とペルシア人との合戦図にも見劣りしない規模で描いてもいる。この女人族についてはヘロドトスにもしばしば触れられているし、古来追悼演説で戦死者をたたえたアテナイ人というアテナイ人は誰もが、このアマゾネス族に対するアテナイ人の功業には格別の扱いで言及してきたものだ。それはともかくとしてアトロパテスが騎馬に手馴れたさる女どもをアレクサンドロスの見参に入れたとすれば、私が思うに彼女らはおそらく乗馬の訓練を積んだ別の、とある未開人の女たちであって、アトロパテスはその彼女らにいわゆるアマゾネス風の出立^{いでたち}をさせてこれを上覧に供したものであろう。

一四 ところでアレクサンドロスは、事が順調に行った後では神々に捧げるのを慣わしにしている供儀の式をエクバタナで執り行ない体育、音楽の競技を催すとともに、彼自身も側近のヘタイロイ仲間と寄合いの酒宴を開いた。ヘパイステイオンが病にたおれたのはその頃のことだった。彼が病みついてからもう七日目のこと、その日競技場はいっぱいの人出だったという。当日少年組の体育競技があったからだ。「観戦中の」アレクサンドロスの許にヘパイステイオン危篤の知らせが届けられると彼は急いで病床に駆けつけたが、その時はもうヘパイステイオンはこの世の人ではなかった。

2 この時のアレクサンドロスの悲嘆ぶりについてはさまざまな人が各人各様に記録している。彼の悲嘆がともかく尋常一様のものではなかったということは誰もが書いているわけだが、そのために具体的にはどんなことが起こった

- かという点になると、当の記録者がヘパイステイオンに好意を寄せていたか悪意をいだいていたか、さてはアレクサンドロスその人に対してもどんな感情をもっていたかに従って、各人各様なのである。アレクサンドロスの〔悲嘆の〕^{みだ}濫りがわしさを仔細に書きとめた人びとの中には思うに、誰よりも深く愛した友の死を歎くあまりの濫りがわしい言動なのだから、それらはいずれにせよアレクサンドロスの美徳の発露なのだと考えた者もいれば逆に、そうした言動は王たるの地位にも相応^{ふさわ}わずアレクサンドロスその人にも似つかわしからぬことだとして、それを目してむしろ彼の瑕^{きず}とした者もあったのだ。一説によると彼はその日一日の大方を親友の遺体に蔽^{おほ}いかぶさるようにして悲嘆に暮れ、側近の者が手をかけて無理矢理引き離すまでは何としても遺体から離れようとはしなかったという。別の伝えには彼が遺体の傍^{かたわら}で悲嘆に暮れること、まるまる一日と一晩に及んだとも見える。またこれも一説によれば彼は医師のグラウキアスを、それも彼が投薬を誤ったとして縛り首にしたというが〔その理由については〕病人が無茶酒をするのを医師自身が目撃しながらそれを止めもせずに見過ごしたため、という説もある。アレクサンドロスが死者を悼^{いた}んで髪の毛を剪^きったという話は他の理由からもそうだが、とりわけ彼が幼少の頃から張合^{あは}ってきたアキッス^{レウス}（の仕草）に倣^{なら}いたいという強い願望に照して考えれば、不自然とは思えない。またアレクサンドロスは遺体が運ばれた車を、そこしばらくの間は自分の手で操縦^{せうしゆ}していたという人もいるが、この話は私としてはまったく信じがたい。これまた別の説をなす人によると彼は、エクバタナにある〔医神〕アスクレピオスの神殿を根こそぎ取り毀^{こわ}つよう命じたともいわれている。しかしこれは何とも乱暴きわまる話で、どう考えてもアレクサンドロスらしくらぬ振舞いであり、むしろかえってかのクセルクセスの神を蔑^{あなづ}する不遜な態度にこそぴたりするといふものだ。伝えによればクセルクセスは浅はかにもヘッレスポントスを懲らしめようとして彼^か処^{しよ}の海に足枷^{あしかせ}を沈めさせたといふのである。その一方では次のような話も記録されていて、この方はあながちありそうもない話ではないように思われる。アレクサンドロスがバビュロンに向った折のこと、ギリシアから幾組もの使節団が道々彼と行き合ったが、

それらのうちにはエピダウロスからやって来た使節たちもまじっていた。彼らはその願いの筋をアレクサンドロスに聴き届けられると、今度は彼の方からアスクレピオスのために持ち帰るようにと奉納の品を贈られたが、その時彼はこう言葉を添えたというのである。「それにしてもアスクレピオスは私にはつれなかった。わが命とも思う親友7を私のために助けても下さらなかったのだから」と。アレクサンドロスがヘパイステイオンのために、今後はずっと英雄神としての供犠を捧げるよう指示を出したとは、大方の記録者によってそう書きとめられている。一説に伝えられるところでは彼はアモン神の許にまで人を遣わして、ヘパイステイオンを神として祀り神に相応しい供犠を捧げることを「アモン神が」許されるかどうか、神意を伺わせたが、神はそれを許されなかったという。

8 しかし次に述べるような諸点はどの記録者も皆、異句同音にこれを伝えている。すなわちヘパイステイオンが死んで三日目になるまでアレクサンドロスは、食事もとらなければあれこれの身だしなみにさえ何の関心もはらわず、ただ慟哭するか言葉もなく悲嘆にうち沈むかして横になったままだったとか、死んだ友のためバビュロンに一万タランタの費用をかけて火葬堆を築くよう準備を命じたとか、ただしこの点についてはもっと多額の出費を記録している向きもあるが、その他東方全域にわたってあまねく服喪令が発せられたこと、アレクサンドロス側近のヘタイロイの大方が彼にかしずいて、死んだヘパイステイオンのために己が身も武器武具も献げて、故人に奉仕の誠をいたしたこと、さし当って「弔意を表するに」相応しいこの思いつきを誰よりも先に実行に移したのがエウメネスだったこと、エウメネスが日頃ヘパイステイオンと不仲だったことについてはすこし前に触れたが、その彼が率先してそう振舞ったのは、ヘパイステイオンが死んだことを自分が内心欣んでいるのではないかとアレクサンドロスに思われまいがためであつたということ、これらについてはどの記録者でも一致して伝えているところなのである。アレクサンドロスがヘパイステイオンの代りとして、ヘタイロイ騎兵隊の指揮官の地位には誰をも任命しなかったのは、彼の名が部隊から消えずにいつまでも「ヘパイステイオン騎兵隊」の名称が残り、彼の発案でできた隊の旗印がい

つも部隊の先頭にひるがえっているようにと願った。アレクサンドロスはまた体育と音楽の競技を、その出場者数においても開催に要する費用の点でも、これまでの先例をはるかに上まわる規模で開催したいと考え、彼がそろえた出場者の数は総勢三千人にもものぼった。伝えによればこの人びとはやがて遠からず、アレクサンドロス自身の葬送にあたってその技を競うことになったということだ。

- 一五 長いあいだ悲嘆に明け暮れたあげく、アレクサンドロス自身もようやく悲しみを去って本来の彼をとり戻しはじめると、側近のヘタイロイもそうした回復気分をいっそう引立てるようにして彼を元通りの元気に立ち返らせた。彼がコッサイオイ人の攻撃に乗り出したのもちようどその頃のことだった。コッサイオイ人というのはウク2シオイ人と隣り合って住んでいる戦^{いくさ}馴れた種族なのである。彼らは山地の住民でおのずから要害の地を成した村々に住んでいるが、軍勢が攻め寄せてくるときまって集団でか、あるいは個々ばらばらにでも各自できる限りの手段を使って、山の高みへと立ち退き、そんな風にして武力で攻撃をかけてきた敵を窮地に追いこんで、その間に逃げおおせる。そして敵が立ち去ったとなると彼らはまた元の山賊の仕事にもどるのだ。コッサイオイ人は日頃3山賊稼業で暮しを立てているのである。アレクサンドロスはまた冬の季節の作戦行動ではあったが彼らを征服してしまった。彼にとつては冬も悪地も障害とはならなかったのだ。そしてそのことはひとりアレクサンドロスだけのことでなく、軍の一部をひきいて攻撃に向ったラゴスの子プロトレマイオスにしても同じであった。このようにおよそアレクサンドロスが乗り出した戦^{いくさ}という戦は、かつてどれひとつとして不成功に終ることがなかったのである。
- 4 さてアレクサンドロスがバビュロンへと下るその道すがら、リビュア人の使節団一行が彼と行き合って彼がアジアの王権を得たことに祝意を述べ、併せて冠を捧呈するということがあったが、同じ目的ではまたイタリアからも、ブレッティオイ(ブルッティイ)人にレウカノイ(ルカニイ)人、それにテュツレノイ(エトルスキ)人が使節団を送ってきた。一説によれば当時カルタゴ人も使節を送って寄越しエティオピア人、ヨーロッパ・スキュタイ人、ケルト人

それにイベリア人の許からも友好を求めて使節団がやってきたという。こうした種族の名前や彼らの衣裳がギリシア人やマケドニア人の眼に触れたのは、この時が初めてだったのである。彼らの中にはお互いの間の係争問題について、その調停をさえアレクサンドロスの許に持ちこんできた者たちもあったという。アレクサンドロスその人が当の本人にも取巻きの側近たちの眼にもまさに偏くすべての大地すべての海に君臨する主としてうつったのは、何といつてもこの当時のことだったのである。アレクサンドロスのことを記録した数ある人びとのうちでもアリストンとアスクレピアデスの二人は、さらにローマ人までもが使節を派遣して寄越したと伝え、またその使節たちと会見たアレクサンドロスが、一行の堂々たる立居振舞いや潑刺たる活気、自由闊達な氣風に接し、また彼らの政治6制度についても質し^{ただ}などして、ローマ人が将来かならずや大を成すであろうと予言したとも述べている。ところで私がこうしたことを書きとめたのは、別にそれらが真実間違いないところだからというわけではないし、だからといって全く信ずるに足りない話として触れたわけでもない。しかしいずれにせよアレクサンドロスの許に派遣されたこの使節団のことで、ローマ人にして何らか言及しているものはひとりとしてないし、アレクサンドロスに関する記録者たちのうち私がとりわけ拠るところの多いラゴスの子プロマイオスにしてもアリストブロスにしても、このことには全く触れていない。しかもちようどその頃こよなく自由を謳歌していたローマ人の国が異国の、それも自分らのところからははるかに隔った遠方の王の許に、別段相手怖^{こわ}さからやむを得ずというのでもなければ、何かそこに利益を期待してというのでもなしに使節を遣わすということは、ひるがえってその彼ら（ローマ人）が何処のどの種族にもまして独裁者なる手合、独裁者という名前そのものへの憎悪に凝り固まっていた点からしても、およそ彼らには相応しからぬことだったのである。

一六 その後アレクサンドロスはアルガイオスの子ヘラクレイデスに命じてヒュルカニアの山中から船材を伐り出してギリシア式に、甲板のないものや甲板をそなえたものなど軍船を建造するよう指示し、船大工たちを同行さ

2 せて彼をヒュルカキアの地に差し向けた。カスピ海とかヒュルカニア海とか呼ばれているその海が別のどんな海とつながっているのか、黒海となのかそれとも大洋がインドの東方から回流してきて、ちょうどペルシア海いわゆる紅海が大洋の湾入部なのだと分ったように、ヒュルカニア湾へと注ぎ入っているかを明らかにしたいという抑えが3 たい願望^{ガスト}が彼の心をとらえたからであつた。カスピ海の元がどうなっているのかは、少なからぬ種族がその周辺に住みついており、また多くの河川がそこに流れこんでいるのに、いまだ一向明らかにされてはいなかったからだ。

ちなみにこのカスピ海へはオクソス川——インドの諸河川を除けばアジアの河川のなかでは最大のかのオクソス川もバクトリアから流れこんでいるし、ヤクサルテス川もスキタイ人の住地を経て同じくこの海に注いでいる。大4 方の意見によればアラクセス川もアルメニアの地から流れ流れてこの海に注ぎ入っているということだ。ここに挙げたのはどれも最大級の河川だが、その他にも多くの河川がそれら（の大河）に合流したり、あるいはまたそれら自体として独自にこの海に流れこんでいるのである。そのあるものはアレクサンドロスと彼の軍勢がその地方に攻めこんださいに知られるところとなつたが、他にも別の河川がおそらくは湾入部の向う側、遊牧スキタイ人の地方で、この海に注いでいることであろう。ともあれその地方のことはまるで知られてはいないのである。

5 ところでアレクサンドロスはバビュロンへ向う途上、軍勢とともにティグリス川を渡つたが、その時そこへカルデア人の占師たちが彼と行き合つと、彼らは王を側近たちの許から傍へ招いて、バビュロンへの行軍を停止するよう懇願した。アレクサンドロスがこの時期バビュロンの町に入るのは彼のためにならないという託宣が、ペロス神6 から彼らに下されたというのだったが、アレクサンドロスの方は彼らに応答^{いんさ}するのに詩人エウリピデスの詩句をもつてしたという。そのエウリピデスの詩句には次のように歌われている。

もつともすぐれた占師とは（事態を）よく推し測る者のことだ。

これに答えてカルデア人はこう言った。「王よ、ともかくも貴方御自身が陽の沈む方^{かた}を望むかたちにはおなりにな

りませんように。その方角に向って軍勢をひきい町にお入りになってはなりません。むしろ回り道をなさって東の方角を望んでお入りになることです。」しかしそうするのは実際問題としては悪路のために、彼としてそうたやすいことにはならなかった。けだし神明はこの時、彼にしてひとたびそこへ足をふみ入れれば遠からず死の運命が彼を待ち受けているまさにその場所へと、アレクサンドロスを誘^{いざな}つておられたのだからだ。実のところ何らかの人事には付き物の災難不幸が彼の身に振りかかってくるより先に栄光の頂点で、また人びともこよなく惜しまれて世を去るこそ、彼としてはきつとより望ましいことだったろう。そうだからこそ多分ソロンもクロイソスに、長い人生も8その終着点を見ることだ、そこまで行き着かぬ前に人間の幸不幸を論ずべきではないと勧めたのであった。実際アレクサンドロス自身にとってヘパイステイオンの死は少なからぬ痛手となったのであって、アレクサンドロス本人にしてみれば生き永らえてこの不幸を経験するよりはむしろ、彼に先立って世を去りたかったことだろうと私には思えるのだ。その嘆きはアキッレウスが、死んだパトロクロスのために仇^{あだ}を討つ巡^{めぐ}り合わせとなる位なら、いっそ彼より先に死ぬ方を選んだらうと思われる、それにも劣らず深かったのである。

一七　ところでアレクサンドロスにはカルデア人たちにたいしていくばくか疑惑の気持もあった。この時期アレクサンドロスがバビュロンの町に入るのを制止するのは神の託宣の指示するところというよりもかえって、彼らにとって自分たちの身のためになるからではないのか、という疑念であった。ペロスの神殿はバビュロンの町の中心2部にあり、規模の壮大という点では並ぶものなく、アスファルトで接着した焼成煉瓦で築かれていた。この神殿はバビュロンのほかの諸神殿と同じく、もとクセルクセスがギリシアから引揚げてきたさいに根こそぎ破壊されたものだったが、アレクサンドロスは「かつてバビュロン滞在中」、一説によれば昔の礎石の上に再建することを思い立って、そのためバビュロニア人に堆積した土砂の取り除けを命じたといい、また一説にはかつてあったものより一層大規模な神殿の造営を企てたのだとも伝えられている。しかしその彼が出立すると造営の仕事をあずかった者たちはい

い加減な態度で工事を進めていたため、彼としては今度は全軍の将兵を動員して工事の完成を目指すことにしたの4であった。由来ベロス神はアッシリア人の諸王によって、広い土地と莫大な金の寄進を受けていた。昔はこの財産をもとに神殿の修復が行なわれ、神への供儀も捧げられていたのが、この当時はその収益が何かのために用いられるという目当もないまま、カルデア人たちが勝手に自分たちで分配していたのだという。このようなわけで連中としては、神殿が短期間で竣工することでそうした金の儲けがふいになってしまわないように、自分のバビュロンへの入市を望ましからずとしているのではないか、という疑念がアレクサンドロスに萌したのだった。しかしアリストブロスが伝えるところによると、少なくとも町に入る道筋の進路変更の件ではアレクサンドロスも、彼らの言に進んで従う気持があったということだ。そこで彼としてはさしあたり初日はエウプラテス河畔に止営した上、次の日、川筋を右手に望みながら川沿いに軍を進め、市街地の西向きの区域を通りすぎ、そこを出はずれたところで東6に折れて麾下部隊を引率しようと思ったというのである。けれども軍勢をひきいてこんな風に道筋をたどるといのは、道の悪さからしてもとてもできることではなかった。町の西側から市中に入ろうとする者にとっては、もしもその地点で東に向きを転ずるとすれば、「前途には」沼沢や溜り水の泥濘が広がっていたからだ。こうしてアレクサンドロスが神意に逆らう結果になったのは、みずからそう意図してのことではあったが、同時に不本意ながらやむを得ず、でもあったというのである。

一八 それにまたアリストブロスは次のような話も書きとめている。アンピポリスの人でアレクサンドロス側近のひとりだったアポロドロスは、アレクサンドロスがバビュロン太守マザイオスの許に残留させた部隊の指揮官だったがその彼は、インドから帰還してきた王と合流したのち、各地に任命されていた属州太守が次々ときびしく処罰されるのを見るにつけ、わが身の安全を占ってくれるよう兄弟のペイタゴラスに手紙を書き送った。ペイタゴラスは犠牲の内臓による卜占の術に長じた占師だったからだ。ペイタゴラスはそこで一体誰をいちばん怖れて卜占

の力に頼りたいと思うのか、問合わせの返事を彼に宛てて送った。アポッロドロスの方はこれにたいして折返し、王その人とヘパイステイオンのふたりである旨を書き送った。ペイタゴラスはそこでまずヘパイステイオンを占って犠牲をささげてみた。するとその犠牲の肝臓には肝の葉が見えなかったので、彼はそのことをしたためるとヘパイステイオンについてはまったく怖がる必要はない、そのうちじき気がかりな存在ではなくなるからとはつきり書いて、その手紙を封印の上バビュロンからエクバタナなるアポッロドロスの許に送った。件のその手紙をアポッロドロスが受けとったのは、アリストブロスが伝えるところによると、ヘパイステイオンが死ぬ前日のことだったという。次にペイタゴラスが今度はアレクサンドロスのために犠牲をささげたところ、このときもまた犠牲の肝臓には肝の葉が欠けていた。そこでペイタゴラスはアレクサンドロスに関しても同じことをアポッロドロスに書き送ってやった。アポッロドロスの方はしかしその書き寄越されてきたことを胸うちに疊んではおかず、むしろ当座さしあたって何かの危険が王の身に降りかかることのないよう注意を促すとすれば、それだけ一層忠勤の実意を示すことになろうかと考えて、アレクサンドロスにそのことを打明けたのだった。アリストブロスによればアレクサンドロスはアポッロドロスに感謝し、バビュロンに到着するとペイタゴラスにたいしても、一体どんな徴候が自分のために現われたというのであのようなことを兄弟に書き送ったのか訊ねたという。ペイタゴラスの方はそこで犠牲の肝臓に肝の葉がなかったことを答えたが、重ねてその徴候が何を意味するのかを問われると、彼はこれに答えてただならぬ深刻な事態ですと言った。アレクサンドロスはしかしこの返事にたいしてもペイタゴラスに怒りを発するどころか、かえって真実ありのままをごまかさず語ってくれたとして、その後は一層彼に目をかけてやっただけである。アリストブロスが語っているところでは、この話は彼自身がペイタゴラスからじかに聴き出したものだという。またこのペイタゴラスは後になってペルディッカスとアンティゴノスの運命についても予言するところがあったということだ。ふたりについてはともに同じ徴候が現われたのであって、実際その後ペルディッカスは

プトレマイオスに軍を進めたさいに命を落し、アンティゴノスの場合もイプソスで起こったセレウコスとリュシマ6 コスを相手の戦闘に討死をとげたのであった。加うるにインドの哲学者カラノスに関してもまた、それに類した次のような話が記録されている。カラノスが命を終えようとして火葬堆に上るさい、彼は王側近のヘタイロイの誰彼には別れの挨拶をしたものの、アレクサンドロスに対してばかりは、あえて歩み寄って別れを告げようとはせず、その理由^{わけ}はバビュロンでお目にかかって挨拶することになろうから、と言ったというのだ。この言葉は当時としては気にもとめられずに過ぎたものの、後になってアレクサンドロスがバビュロンで亡くなったとなると、あらためてそれを聞いた人々の記憶によりがえり、さてこそ彼はあの時神異に感じてアレクサンドロスの死を予言したのだと思^ない做された、というのである。

一九　ところでアレクサンドロスがバビュロンに到着すると、ギリシア人の許から使節団が彼の許を訪れてきた。それぞれの使節団が何の目的でやってきたのかは伝えがないが、少なくとも私が思うところでは、アレクサンドロスに冠を捧げて数々の勝利、わけでもインドでの勝利に賀詞をたてまつり、インド人の地から無事帰還されたことへの慶びを言上することが大方の使節団の目的だったのであろう。彼は各使節団を快く迎え、しかるべき礼遇を以て応待して帰国させたという。彼はまたかつてクセルクセスがギリシアから運び帰ってバビュロン、パサルガダイ、スサをはじめアジアの隨所に移した像や礼拝像、その他何によらず奉納された数々の品をも、すべて持ち帰るよう使節たちにあたえたといわれる。ハルモディオスとアリストゲイトンの青銅像もケルケアスのアルテミスの座像も、このようにしてアテナイに持ち帰られたものと伝えられている。

3　アリストプロスが伝えるところによると、アレクサンドロスはバビュロンではまた艦隊にも出会ったという。その一部はペルシア海からエウプラテスの川筋を（バビュロンまで）溯^{さかのぼ}ってきたものの、これぞネアルコス^{ネアルコス}のひきいる艦隊であったが、それ以外はポイニキアから運ばれてきたもので、ポイニキアの五段橈船二隻、四段橈船三隻、三段橈

船十二隻それに三十人橈船およそ三十隻、これらは船体を分解されてポイニキアからタプサコス市へとエウプラテス川まで運ばれ、そこであらためて組立てられた上バビュロンまで川を下ってきたのであった。軍船はアリストブロスによれば、これらの他にもバビュロニアの糸杉を伐採して建造されたという。アッシリアの土地にはこの木だけはふんだんにあるが、その他造船に必要な資材はこの地方では何ひとつ調達できないのである。一方軍船の乗組員やその他の艦隊要員としては、大勢の紫貝採りをはじめ海で暮しを立てている者たちが、ポイニキアとかその他の沿海地方から集められた。アレクサンドロスはまたバビュロンに、一千隻の軍船が碇泊できるだけの港と港に附属した船渠とを開鑿かいさくさせることにしたとも伝えられる。彼はクラゾメナイ人のミツカロスに五百タランタの金かねを持たせてポイニキアとシリアに派遣したが、これは賃金で誘ったり人買いをしたりして、海に生きる人びとを獲得させるためだった。それというのもアレクサンドロスは当時、ペルシア湾の沿岸地域やそのあたりの島々に植民する構想をいっていたからだ。彼の見るところその地方は、ポイニキアにも劣らず恵まれた土地になろうと思えたからであつた。彼の艦隊の準備はその鋒先を大方のアラビア人に向けたものだった。かの地方の夷狄えてきのものうちでは、彼らアラビア人だけが彼の許に使節を送つても寄越さなければ、その他しるべき何らの措置なり表敬の措置なりも講じてはこなかったから、というのが「遠征の」口実ではあつたが、本当のところはアレクサンドロスが自分の手に入れたものでかつて満足したためしかなかったのだと、少なくとも私にはそう思われるのである。

二〇 広く行なわれている話だが彼はアラビア人が二柱ふたの神、つまりウラノス（天の神）とディオニュソスだけを崇あがめていることを聞きこんだという。ウラノスはそれ自体が肉眼にもそれと見えるし、星々や別けてもかの、至大至明の恵みをあまねく万人万物の上に注ぐ太陽をその内にかかこんでいるからだし、ディオニュソスの方はそのインド遠征の名声のゆえであつた。そこでアレクサンドロスも、自分がディオニュソスに劣らぬ功業を成しとげた上さらにアラビア人までも征服して、インド人に認めてやったようにアラビア人たちにも、その慣習によって統治

が行なわれるのを認めてやるとすれば、自分とてアラビア人たちからその第三の神と仰がれるに万更価せぬもので2もないと考えたというのである。その土地の恵まれた豊かさも内々彼の心を駆り立てるものがあつた。彼が聞き込んだところによれば、そこでは沼沢地からは桂皮が手に入るし、その樹木には没薬とか乳香がとれるものもあり、またやぶの繁みからは肉桂が刈り取れ山野には甘松が自生しているということだったからだ。それにまた土地の広さということもあつた。アラビアの海岸線はインドのそれにも劣らず長大だという報告が、彼の許には寄せられていたし、また陸地近くにはたくさんの島々があり、本土側にもいたるところに入江があるということで、それらは艦隊に泊地を提供するに足るばかりか、将来発展しそうな町々を建設するにも格別と見えただためである。

3 彼が報告を受けたところでは、エウプラテス川の河口近く、海中にふたつの島があるということだった。うち一方はエウプラテス川が海に注ぐあたりからさして遠くない、海岸と河口からはおよそ百二十スタディア(二二キロメートル)強隔たった位置にあつて、二つのうちでは小さい方であり、さまざまな種類の樹木が鬱蒼と茂っていた。この4島にはアルテミスの神殿があつて島の住民はその社のまわりに生活をしているという。島には野山羊や鹿どもが放牧されているが、それらはいずれもアルテミスのために自由に放し飼いされているのであつて、女神に犠牲として捧げるのが目的でなければそれらを狩することは禁じられている。そのためならば、その限りでは狩も禁止されて5はいないということだ。アリストプロスが伝えるところではアレクサンドロスは、この島をエーゲ海のイカロス島にちなんでイカロスと呼ぶことにしたという。ダイダロスの子のイカロスは広く行なわれている伝えによると、翼を接着していた蠟がとけたためにこの島に墜落したといわれている。父親の言いつけ通り地上に近く低いところを飛んではいけないで、おろかにも高く舞い上がったため蠟が太陽(の熱)でやわらかにされ溶かされてしまったからだ。こうしてイカロスは(彼が墜落した)島にも海にもその名をとどめることになり、島はイカロス、海はイカリア海6と呼ばれることになったというのである。もう一方の島はエウプラテス川の河口から、追風に乗った船にしておよ

そ一昼夜ほどの距離があるという。テュロスというのがその島の名前で島は大きく、大方は荒地でもなければ樹木に蔽われてもいず、栽培された果物のたぐいやその他季節のありとあらゆる実りを産するという。

7 こうした情報の若干は、アルキアスからアレクサンドロスに報告されたものだ。アルキアスは三十人橈船でアラビアまでの沿岸航海の下調査に派遣され、テュロス島までは到達したものの、それから先へはどうしても行けなかったのである。アンドロステネスもまた別の三十人橈船で遣わされ、この方はアラビア半島をいくらか回りこむところまで行った。しかし派遣された「調査隊の」うちでもっとも遠方まで進出したのは、みずから操舵手でもあったソロイ人ヒエロンで、彼の場合もアレクサンドロスから三十人橈船一隻を託されたのであった。このヒエロンが命ぜられたのはアラビア半島をひと巡りして、エジプト側ではヒエラポリスに面したあたりのアラビア湾（紅海）までぐらりと周航することだったが、その彼もアラビアの周縁部あらかたは経めぐったものの、その先まではとうとう到達できず、引返してアレクサンドロスに半島の大きさが驚くべきものであって、インドにもさまで引けをとらない程であること、岬がいちじるしく大洋に突き出していることを報告したのであった。ところでネアルコス（艦隊）の乗組員たちもインドからの航海途上で、ペルシア湾へ向け進路を変えるに先立って、その岬が程遠からぬあたりにせり出しているのを認め、すんでのところでは対岸の方へ船を渡すところだった。艦隊の操舵手だったオネシクリトスもそうするのがよいと考えたがネアルコスは、ペルシア湾の周航を達成してアレクサンドロスから託された10任務をはやく王に報告できるようにと、彼がみずからその寄港を禁じたのだと述べている。ネアルコスによれば彼は大洋を航海するのが目的で派遣されたわけではなく、あくまで海沿いの地域や沿岸の住民の事情、その地方で碇泊できる港とか飲料水の有無、それに住民の風俗習慣とか沿岸のどの地域が物産に富みどの地域が乏しいかを探索するためにこそ派遣されたのだからだ。アレクサンドロスの艦隊が無事に難局を切り抜けられたのもまさしくそのためだったのであって、もし遠くアラビアの荒地にまで航海を続けていたら、彼らの無事はとても計れなかった

ろうからだ。伝えられるところによるとヒエロンも同じ理由から引返したのであった。

二 三段橈船が次々と建造されてゆきバビュロンに港が掘り上げられているその間に、アレクサンドロスはバビュロンからエウプラテス川をいわゆるポッラコパス川まで船で下った。これはバビュロンから〔南へ〕およそ八百スタディア〔二四七キロメートル強〕ほど離れたところにある、エウプラテスから引かれた運河であり、〔自前の〕水源から発する川ではない。エウプラテス川の方はその流れをアルメニア山中に発していて、冬の間は水量もさして多くないため、両河岸の間におさまって流れているが春の兆〔きざし〕が現われてから、とりわけ太陽が夏至点を回〔めぐ〕るころになる3と滔々たる流れとなり、川水は河岸を越えてアッシリアの土地に溢れ出すようになる。アルメニア山中の雪が融けだして川水をいちじるしく増水させるのが、まさにこの時期だからだ。流量を増した川の水面が高まるので、もし誰かがポッラコパス伝いに〔人工的に〕水の捌け口を作り沼沢地や湖水に水を分けてやらなければ、溢れた水はまわりの地域に洪水をひき起こすことになるだろう。こうした沼沢地や湖水はこの運河から始まってアラビアと境を接するあたりまで連なっており、そこから先はあらかた潟〔かた〕をなして、やがて多くの見分けがたい河口を通じて海4に注ぎこんでいるのだ。おおよそプレイアデス〔昴〕が沈むころになって雪が融け去ってしまうと、エウプラテスはその水量が減少するが、それでも川水の大方はなおもポッラコパスを通じて湖水に流れこんでいる。そこでもし誰かが土手の内側へとその流路を転じて川水がまた元の川筋を流れ下るように、ポッラコパス〔の運河〕をふたたび閉鎖してやらなければ、エウプラテス川はために乾上がり結果的にアッシリアの土地も本流によっては灌漑されなく5なってしまうということにもなりかねないだろう。そこでバビュロニアの太守もエウプラテスの川水がポッラコパスに流れこむ入口を堰〔せき〕き止めるのにはいつもたいへんな努力を払ったのだった。けれども水路を開く方法は造作なかった。その地方がやわらかい粘土質で、その大方は泥土だったからだ。そのためいったん川水を迎え入れたとなると、水の流れを元〔の川筋〕にもどすのは容易なわざではなかった。一万人を越えるアッシリア人がその重労働に

取り組んで釘付けされること、何時も足かけ三か月に及んだのである。

6 このことが伝えられるとアレクサンドロスは、アッシリアの地域のためになることをしてやろうという気になった。そこで彼はエウプラテス川の流れがポッラコパス〔運河〕へと分けられているその箇所で頑丈に川水の出口を塞ごうと決心したが、その先さらに三十スタディア〔約五・五キロメートル〕ばかり行ってみると、そのあたり一帯は地盤も岩勝ちのように見えた。そこを開鑿した上でもしポッラコパス伝いの昔からある運河にこれをつなぐとなれば、地盤が固いために水が抜けるということは起こらないだろうし、その一方では四季定まった時期にその流れを変えられることも難かしくはなかうと思われたのだ。そのことのために彼はポッラコパスを船で行き、そこを下ってアラビア方面にある湖水へ船を入れた。そこに適地を見つけると、彼は町をひとつ建設してこれを固め、ギリシア人傭兵のうちから本人が希望する者また年齢を取ったり負傷で不自由になったりして軍務に耐え得なくなった者たちをそこに植民させることにした。

二二 アレクサンドロスはカルデア人が予言したようには、バビュロンで何らの不快な出来事にも遭わず何か、言うところの災難が降りかかる以前にまた、バビュロンから出発できたというので、彼らの託宣もはずれたとみて自信たっぷり、ふたたびバビュロンを左手に望みながら沼沢地を通して船を進めた。ところがそこでは彼の船団の一部が、その水先案内不在のために狭い水路で迷いこんでしまったため、アレクサンドロスみずから案内人を送ってやって、ようやくはぐれた彼らを川の本流まで誘導するという事故があった。次のような話が伝えられている。

2 アッシリア王の墓はその大方が湖や沼沢地に営まれている。伝えによるとアレクサンドロスがみずから舵取りとなつて三段橈船を沼沢地に進めていたところ、にわかには烈風が吹き起こって縁広の彼の帽子とそれに留めてあった髪飾りを攫った。帽子は重かったのでそのまま水中に落ちたが、髪飾りの方は風に運ばれて芦に引っかけた。その芦はとある昔の王の墓に生い茂っていたものだという。このことは実にそれ自体として、この先起こることを予

兆するものだったが、同じことは次の出来事についても言えた。水夫のひとりが王の髪飾りを取りに泳いでゆきそれを芦から外すと、泳ぐうちに濡れてしまいかもしれないとそれを手に捧げ持つことはせず、自分の頭に留めて、4 そのようにしてまた王の許まで泳ぎ帰ってきたというのだ。アレクサンドロスの事蹟を記録した大方の筆者はアレクサンドロスが、その水夫の忠勤を賞でて一タラン톤を褒美にあたえておいて他方、かりそめにも一度王の髪飾りを戴いたその頭はそのままで何事もなく見過ごしにすべきではないと占師たちが占いを立てたのに従って、その首を刎^はねさせたと伝えている。しかしアリストブロスが語るところではその水夫は、一タラン톤の褒美にはあずかったものの、王の髪飾りを不用意に頭に留めたというので、併せて鞭打ちの罰を受けたということになっている。

5 アリストブロスの場合は髪飾りを王の許に届けたのが、ポイニキア人水夫のひとりであったとも語っているが、それはセレウコスだったと伝える記録者たちもいる。「そうだとすれば」この事件はアレクサンドロスには死の前兆となり、セレウコスにとっては大王国を手に入れる前兆だったわけだ。思うにセレウコスがアレクサンドロス亡きあと、その王権を受け継いだ中でも最大の人物であり、その思量するところにおいても王者らしく、また少なくともアレクサンドロスその人に次いでは最大の領域に君臨した人物だったということについては、疑いを容れる余地はないのである。

二三 アレクサンドロスがバビュロンに帰りつくと、ペウケスタスがペルシア人およそ二万人をひきいてペルシアの地から到着していた。彼がその他にも少なからぬ数のコッサイオイ人やタプリア人を引連れてきたのは、これらの種族がペルシス近辺の住民のなかではとりわけ勇敢な者たちと喧伝されていたからだ。アレクサンドロスの許にはまた、ピロクセノスが部隊を引率してカリアからやってきたし、リュディアからもメナンドロスが別の部隊を2 ひきいてやってきた。メニダスもその麾下に編成された騎兵隊を従えてやってきた。この間にギリシアからも使節団が訪れてきたがこの使節たちは、みずからも冠着用で威儀を正した上アレクサンドロスの前に進み出ると、神を

讃えて遣わされた祝祭の使節さながら彼に黄金の冠をたてまつったのだった。とはいえその時もう彼の死はすぐそこまで迫っていたのである。

3 それはともかくこの時アレクサンドロスは、ペルシア人たちがペウケスタスの命に万事よく服従しているというので彼らの精進ぶりを賞し、またペウケスタス自身をもペルシア人にたいする指揮統率が整然と旨くいっている点を搞ねぎらうとともに、彼らをマケドニア軍の〔歩兵〕部隊に編入した。十人隊長として小隊を指揮するのはマケドニア人であって、これに次いではいずれもマケドニア人「倍額取り」と「十スタテル取り」とが配属された。こう呼ばれたのは給与の点からで、その「十スタテル取り」の名を取ったのは、給料が「倍額取り」には及ばないながら列伍の一般兵士よりは多い者であった。それらの者たちの次に十二人のペルシア人〔兵士〕が来て十人隊の最後をマケドニア人のこれも「十スタテル取り」であるマケドニア人が固めるといふ編成だった。結局十人隊にはマケドニア人が四人、その内三人は給与の点で上位にあり、一人は十人隊の指揮に任じたわけだが、それと十二人のペルシア人とから成ったのであって、マケドニア人の方は伝統的な武器に身を固める一方ペルシア人たちの一部は弓兵、一部は革紐付きの投槍を装備したのである。

5 この頃アレクサンドロスは艦隊の演習を何度もくり返し試みていた。三段橈船諸艦とすでに竣工して川面かわもに浮かんでいる四段橈船全部とのあいだには模擬戦もしばしば実施され、漕手や操舵手たちがその伎倆を競う演練も幾度となく行なわれて、勝ったチームには優勝の冠が贈られたのであった。

6 またアモン〔の神祠〕からも神託を伝える使者たちが帰ってきた。彼らはアレクサンドロスがヘパイステイオンをいかに祀るべきか、神意を伺わせに遣わしていた者たちであった。彼らが報告してきたところによればアモンは、彼を英雄神として祀りこれに犠牲を捧げるのを至当と言われたということだった。アレクサンドロスもこの託宣よろこに悦んで、今後は彼を英雄神として祀ることにしたのであった。彼はまたクレオメネス、エジプトにあって悪事不正

のかずかずを犯したかの悪者にも手紙を遣わしている。その手紙の内容を私自身として難じたいのは、もはや亡き7数に入ったヘパステイオンにまだに寄せる彼の愛執の故ではない。理由はその他にいろいろとある。けだし手紙にはまたヘパステイオンのため英雄神の靈廟をエジプトのアレクサンドレイアに、それもひとつは市内ひとつは今日島の灯台があるパロスの島に造営すること、それも堂宇の壮大において他に比類なく、その豪華において他に懸絶する規模でこれを営むべきこと、さらにその廟はヘパステイオンにちなんで命名され、商人たちが互いに合意して取り交わす証書契約書のたぐいにはすべて、ヘパステイオンの名が書きこまれるよう、クレオメネスと8して指導を励行すべきことが言われていたからだ。こうしたことはアレクサンドロスが、それ程大した問題でもないことにひどく熱を上げているという点を除けば、私としてもさして咎め立てするには当たらないが、次の点ばかりはきびしく批判するものだ。書状にはこう書かれていた「こうしたエジプトの諸神殿およびヘパステイオンのための英雄廟が立派に造営されたと、そう私が見てとった場合は、たとえこれまでに何らかの非違があったとしてもそのことで君を咎めることはすまい。また今後たとえいかなる過失を犯すとも、君が私から不興を蒙ることはないだろう」と。こうした書面が事もあろうに大王から、広大な土地人民を統治する人間それも悪者に宛てて発せられたということは、これはとても認めるわけにはいかないのである。

二四 しかしアレクサンドロス自身の死期も実のところもう間近かに迫っていたのだ。それに次のような事件もまた、今後まさに起ころうとしていることを予示するものだったとアリストブ罗斯は言っている。アレクサンドロスはペウケスタスがペルシアから引率してきた部隊やピロクセノス、メナンドロス兩人がひきいて海からやってきた部隊をマケドニア軍諸部隊に振り分けていて咽喉^{のど}がかわいたので、会議を中座し玉座を留守にした。玉座の両側には銀の脚がついた寝椅子があつて、側近のヘタイロイはそこに座を占めるのが慣わしだった。そこにとある身分の低い人間、それは拘束されてはいないながら監視の下におかれていた男だったとも伝えられているが、その男が

玉座にも寝倚子の席にも誰もいないのを見ると、玉座のまわりには宦官たちが侍立してはいたが、側近のヘタイロイの方は王が中座するのと同時に一斉に座を立てていたので、宦官たちの間を押し通って玉座に上がりそこに腰を下ろしてしまった。居並ぶ宦官たちはペルシアのさる掟にしばらくその男を玉座から立たせるすべもなく、大きな禍に直面した時のようにただおろおろしてわれと我が衣裳をかきむしり己おのれの胸や顔をうち叩くばかりだった。このことがアレクサンドロスに伝えられると彼は、反逆陰謀の手順としてこうしたことを仕出かしたのではないかどうかを知らうと、玉座に坐ったその男を拷問にかけさせた。しかし男はただそうしたい気になっただけだと言うのみだった。占師たちの方はその事情からしてなおのこと、アレクサンドロスの身に目出度からぬ事が起こることを占ったのであった。

4 このことがあってから幾日もたたぬころ、アレクサンドロスは幸運を願って神々のためにいつも慣わしとしていゝる犠牲をささげ、また卜占の結果から勧められた供犠をもささげた上、友人仲間とともに宴会を開き夜もおそくまで飲んだ。伝えられるところによると彼は麾下の軍にもまた〔歩騎兵の〕諸隊ごとと百人隊ごとに、犠牲にささげるための動物とぶどう酒とを分配してやったという。記録にはアレクサンドロスが酒宴を切り上げて寝に戻ろうとしていゝると、メデイオスというそのころ殊に王の信任を得ていたヘタイロイのひとりがゆくりなくも彼と出会って、自分のところの無礼講に加わるようつよく勧めた。きっと愉しい会になろうと言うのであった。

二五 王宮日録は次のように誌している。彼〔アレクサンドロス〕はメデイオスの許で飲みかつ歡を尽くす。次いで座を起ってから入浴、のち寝に就く。その後ふたびメデイオスの許で食事、また飲んで深更にいたる。酒宴を切り上げてから入浴。入浴ののち軽く食事をとり、すでに発熱気味のためその場に就寝。それでも神々に供犠を行なうため自分を担架で運ばせ、毎日の仕来りに従って犠牲を捧げ供犠をすませると、日暮れ時まで貴紳室で横になる。その間、行軍と航海の件について指揮官たちに指示を与え、一部の指揮官たちには陸行の部隊が四日後には進發で

3 きるよう、また艦隊で彼と同行する予定の別の指揮官たちには、五日後に出港できるよう準備を命ずる。そこから担架で河岸へ運ばれ、船で川の対岸にある御苑に渡り、そこで再び入浴ののち安静にする。翌日再び入浴。慣例の供犠を行なう。その後寝室に入って横になりメデイオスと対話を交わし、また指揮官たちには明朝早くに伺候する4 ように命ずる。これらを済ませたのち、軽く食事を摂る。そして再び寝室に移されたが、このときすでに発熱があり、ひと晩中ずっと熱が続く。翌日また入浴。入浴ののち犠牲を捧げる。次いでネアルコスおよびその他の指揮官たちに艦隊関係のことで三日後の出航をどうするか指示する。その翌日再び入浴。また定めの供犠を捧げる。供犠を行なったのちも熱はもはや下がらない。しかしそうした状態にありながらもなお、指揮官たちを招致して、出港5 につきその準備を完了するよう指示する。夕方入浴。入浴後、病状重篤。翌日、浴室近くの建物に移送され、定めの供犠を捧げる。容態は思わしくないが、それでも指揮官級のうちの重立った者たちを招致して、再び航海についての指示を与える。翌日、供犠を行なうために担送されるのがやっとの状態だったが、犠牲を捧げ終わるとそれで6 もなお航海のことに關して指揮官たちに指示を与える。その翌日、病状はすでに重篤だが、それを押して定めの供犠を行なう。しかしこの日將軍たちには控えの間で、千人隊長や五百人隊長たちには戸口で、それぞれ待機するよう指示が出される。病状がずっと悪化したため御苑から王宮へ移される。指揮官たちが病室に入ると、彼らを見分けはするがもはやものも言えず声も出ない状態だった。夜から翌日にかけて高熱が続き、さらに翌日、昼夜同じ状態が続く。

二六 王宮日録にはこのように記載されている。さらに記録が伝えるところでは、一般の兵士たちもまた彼を見たいと願った。彼らのうちのある者は王がまだ生きているさまを見たいと願い、別のある者たちは王がすでに亡くなったと伝え聞いたため、これは私の想像だが、彼らの王の死が側近の護衛官たちによって内密にされているのではないかと憶測し、そのほか大方の者は悲しみと王に寄せる憧れとから、アレクサンドロスの様子をひと目でも見

ようと詰めかけた。彼らが口々に語るところでは、兵士たちが列をなして傍を通り過ぎるとき、彼はもう口もきけない状態だったが、それでもひとりひとりに心もち頭を擡もたげるようにして会釈を返し、両の眼で領うなずき返すのだった。

2 これも王宮日録が伝えるところによるとペイトン、アッタロス、デモポン、ペウケスタスそれにクレオメネス、メニダスおよびセレウコスの面々がサラピス神殿に参籠して、今は王を神の坐います聖所に移しまいらせ、神の力にお槌うりしてそのお手当をいただくのが、アレクサンドロスのためには望ましくまた良い方法なのかどうか伺いを立てた

3 が、神の託宣は聖所に移すべきではない、今の場所にとどまるのがよろしかろうということだった。側近のヘタイロイたちがこのことを伝えてから程なく、アレクサンドロスは死んだという。実際今となつてはそれこそが良いやり方だったのである。アリストブロスもプトレマイオスもこれ以上のことは書きとめていない。ある記録者たちはこんなことも記している。側近のヘタイロイたちが王権を誰に遺すおつもりかと問うたところアレクサンドロスは、一番強い者に、と答えたというのだ。また別の記録者たちは彼が言葉を継いで、自分のために大がかりな墓前競技がくりひろげられる夢を見たと言ったとも伝えてい

二七 アレクサンドロスの死についてはこの他にも、まだたくさん書かれたものがあることを私もよく承知している。たとえばある薬物がアンティパトロスからアレクサンドロスに送られ、その薬が元で王は死んだのだともいう。その薬というのはアリストテレスがカッリステネスの一件以来アレクサンドロスを恐れて、アンティパトロスのために調製してやったもので、アンティパトロスの子のカサンドロスがそれを携えて行ったとされている。記録にあるところでは、彼はそれを驟馬の蹄の容れ物に入れて運んだという。これを王に勧めたのはカサンドロスの弟のイオッラスだった。このイオッラスは王の猷酌待従をつとめていて、たまたま王が死ぬ少し前ごろ王の不興を買っていたからだ。一説によればメデイオスはイオッラスの愛人だったし、しかもアレクサンドロスに勧めた無礼講の発起人でもあったというわけで、このメデイオスもまたこの陰謀に一役買っていたのだといわれている。(その宴席

でアレクサンドロスは盃を干したあときつい痛みを覚え、その痛みで彼は酒の席から引きあげたというのである。3しかしある記録者にいたっては臆面もなくこんなことまで書きとめている。それによればアレクサンドロスはもうとても助からないと自覚すると、エウプラテス川に身を投げようとして出て行った。人びとの前から姿を消すことによって、自分の出生が神に由来するものであり、この世を去ったのもまた神の許に帰ったのだという意見を、後の世の人に一層信すべきものと思わせんがためだった。ところが妃のロクサネが彼の出てゆくを見逃さずこれを制止したので、彼はそのことで妃に向って恨み言を連ね、貴方は本当のところは神と生まれた私が永遠不滅の名声を得るのを嫉^{あた}んでいるのだと歎いたというのだ。こうした諸説を私がここに書きとめたのは、話の内容が語るに足る信憑性あるものだからというよりはむしろ、語り伝えられていることを私が知らずにいるのだと思われなためなのである。

二八 アレクサンドロスは第百十四回オリュンピア競技の年、アテナイではヘゲシ阿斯がアルコン在任の年(前三三年六月)に死んだ。アリストプロスによれば彼の享年は三十二年と八か月で、王位にあること十二年と八か月だった、身体つきは殊のほか美しいばかりか、労苦を厭^{いと}わず判断に聡^{さとし}く、勇敢にして名誉にあこがれ、進んで危険に身をさらし、神事またおろそかにはしないといった諸点で、彼は衆に抜きんできていた。肉体的な快樂追求という点では己^{おのれ}を持することきわめてつよく、精神的な面でのそれについて言えば、彼が求めて飽くことを知らなかったのは唯ひとつ、名誉名声だけであつた。まだ先行き見通しがはっきりしない場合に必要^{ひつ}すべきことを洞察する能力は、まことに恐るべきものがあり、所与の状況から起り得べき事態を読みとる点でも、正鵠を得て過たなかった。軍勢を戦列に配置し武装をととのえ、また整然と秩序あらしめることでも、彼はこよなく巧みな腕前をみせた。兵士の士気を鼓舞して幸先よい期待感を吹きこみ、己^{おのれ}自身の大胆不敵を以て危険にたいする恐怖感を吹きとばす、および3そすべてこうしたことにも彼の手並みは卓抜していた。実際必要^{ひつ}すべきことがはっきりしている時には、彼はこ

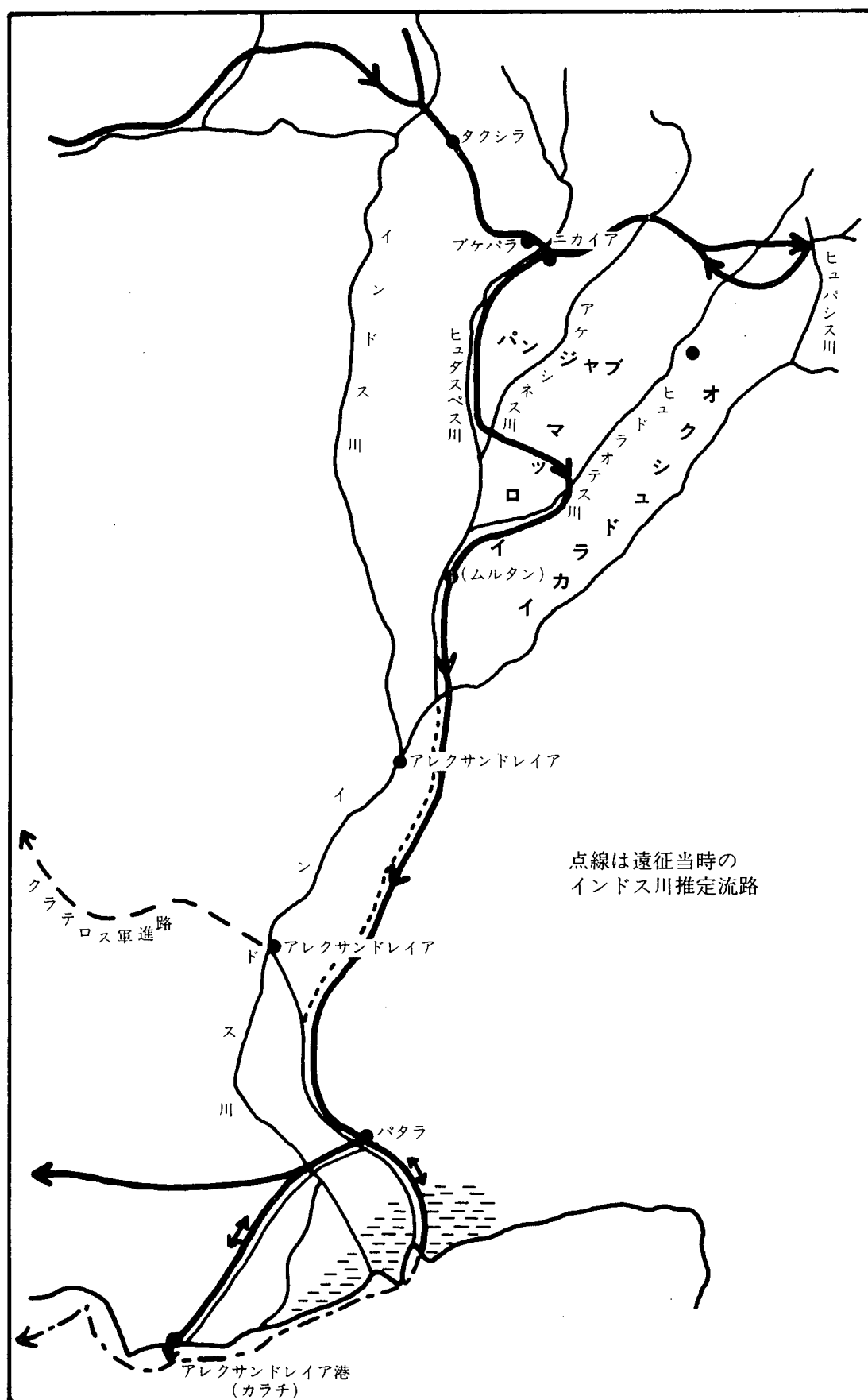
の上ない勇猛果敢ぶりを發揮してことに當ったし、敵の先手をとって相手に気付かれずに有利な地位を確保するこ
とが必要となれば、彼はいつも相手側が先行きを恐れたためらっているすきに、素早く先制の一撃を食らわすとい
う、その果斷ぶりでもまた恐るべきものがあつた。それに協定されたこととか合意が成つたことはこれを固く遵守す
点において彼の右に出る者はなく、敵のだまし討ちにむざとは引つかからないという点でも彼には誰より安んじて
頼ることができたのだ。金銭のことについて言えば、彼は自分の快樂のためにはきわめて儉約家だったが、友人た
ちのためとなるとまったく物惜しみするといふことがなかった。

二九 一方もしたとえアレクサンドロスがその直情径行の性格や怒りの激発にまかせて何かの過ちを犯したり、
また夷狄の風に同化して尊大倨傲きよごうに過ぎる振舞いに傾いたりしたとしても、他方そこに彼の若きだとか彼の破竹の
勢いに乗った幸運続きだとか、常々君側にあつて王侯の快樂に奉仕し、彼らのお為最善を計ることなくかえつて悪
事を勧めるていの取巻き佞臣どもが（彼の場合にも）いたことなどを公正妥当に斟酌すれば、私としては右に挙げたよ
うなことについて、その非を格別言い立てようとは思わない。その上古来君主多しといえども自分が犯した過ちを
2 後悔したのは、私の知る限りではその持ち前の高潔な心情からして、ひとりアレクサンドロスだけなのだ。大方の
人ならば何か過ちを犯したと気が付いても、自分としては正しいことをしたかのように強弁して、それでその罪咎とが
も隠しおおせるものだとか浅墓にも考えるものだ。しかし私が思うに罪にとつての本当の救いは、犯した罪を告白し
犯した罪を悔いてゐることを己おのが態度で示すことだけなのだ。けだし加害者の側が自分は悪いことをしたとその非
を認めるならば、被害を蒙つた方としてもその受けた不快な思いは概してきつい痛みとして感じられはしないだろ
うし、加害者本人としても前非を悔いて思い悩むさまが人目に立てば、もう二度と再び同じような過ちは繰り返さ
3 ないという、そうした善良な予想がきつと後々まで自分の心に残つて離れないことだろう。アレクサンドロスが自
分の出生を神に歸したことも、それがおそらくは臣民に威信をもつて臨むための単なる方便でしかなかったとすれ

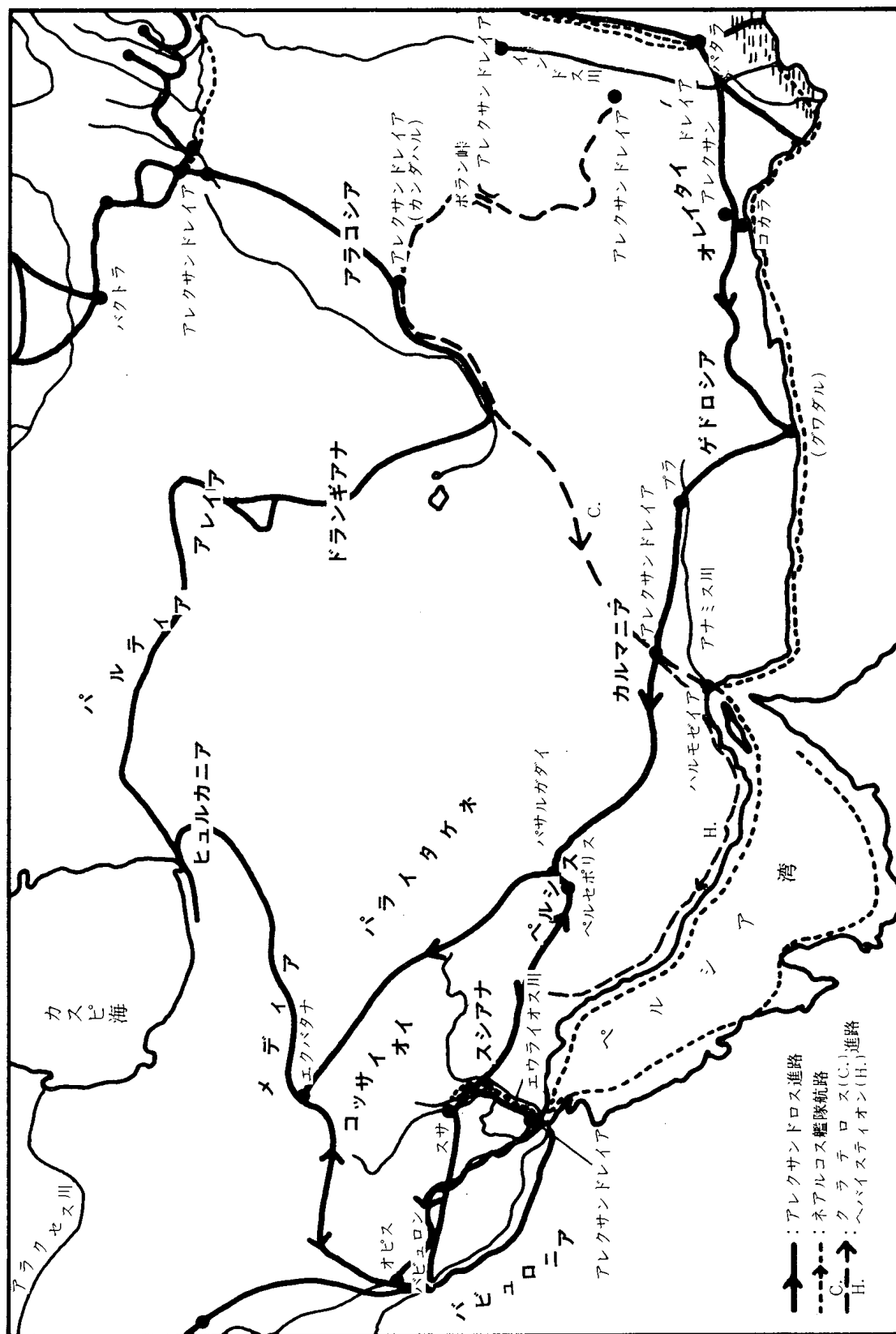
ば、さして大きな過失だったとは私は思わない。実際彼は王としての名声において、ミノスとかアイアコスあるいはラダマンテウスにも劣らぬものがあったと私には思えるのだが、その彼らの出生がまさしくゼウスに帰せられたということは、古の人々からかの英雄たちのいかなる思い上がりの証拠とも受けとられることはなかった。その4とはポセイドンの子テセウスやアポロンの子イオンの場合についても同じことなのだ。私見によればペルシア風の衣裳（を採用したという問題）も東方人向けとしては、王を彼らからいささかも遠くうとましい存在と思わせまいがための方便、またマケドニア人向けとしても例のマケドニア的なずばり卒直な態度と倨傲の風にたいして、一種の「君臣の」分を立てるための方便なのであった。また彼がペルシア人の「メロポロイ金林檎の槍持ち」たちをマケドニア人（歩兵）部隊に混ぜ入れ、ペルシア貴族を（騎兵）アザイマ親衛隊に編入したのも、事実これと同じ主旨にもとづく措置であったように思われる。序でにアレクサンドロスの酒飲みについてはアリストブロスが言っているように、それがいつも延々と長時間の酒宴になったのは、彼が元々飲める口でなかったからには酒のせいではなくて、むしろ側近ヘタイロイたちにたいする付き合いのよさの故だったのである。

三〇 およそアレクサンドロスのことを批判する程の人は、批判に価する点だけをとり上げて言挙ことあげすべきではない。かえってアレクサンドロスのすべての面をひとつ所に取り集め、しかもその上で「おのれ己自身がどんな人間なのか、自分がどの程度の運を手にいるのかをよく考量してかかる必要がある。御当人は自分がいかなる人物を批判の対象とするのか、文句なしに両世界に君臨する王者となりいたる所にその盛名を轟かせるなど、人間としてのどれ程の幸運に恵まれた人物を批判の対象とするのかを、よくよく考えてみなくてはならない。顧みておのれ己自身はといえば、無冠無名の人間で卑小な仕事に苦労を重ね、しかもそれさえうまくはやり了おおせないでいるのが実情なのだ。この私が思うに当時、人類のいかなる種族いかなる都市まちといえども、およそアレクサンドロスの名が響きわたらなかつたところとはなかつたし、アレクサンドロスの名を耳にしなかつた者など誰ひとりとしてなかつた

のだ。他に比類なき人間というのは、実際、神の働きかけなしにはこの世に現われることはない、この私には思われる。そしてこのことはアレクサンドロスの死に臨んでの神の託宣にも示されたし、さまざまな人の眼に映ったさまざまな異象、さらにさまざまな人が見たさまざまな夢にも現われたことだと伝えられる。のみならず今日にいたるまで人びとが彼に捧げてきた崇敬の念だとか、人間を超えたものとしての彼にたいする記憶さては、これ程にも長い時の流れを経て今日なお彼を崇め讃えてのさまざまな託宣がマケドニア人の間に行われているということも3すべて、右に述べたことを証^{あかし}するしと言われているのだ。アレクサンドロスの功業の歴史を記述しながら、私自身もその若干の点についてはこれを批判してきたが、それでも私としてはアレクサンドロスその人を讃美することとをいささかも愧^はずるものではない。私は真実にたいする自分の敬意の故にまた同時に人間のために、そうした所行のあれこれをあえて批判したのである。私自身また神のお力添えなきに非ずしてこの歴史記述に乗り出したというのも、まさにこのためだったのである。



インド進攻関係図(2)
(前326年秋～325年秋)



アレクサンドロスおよび諸將進路図(4)

(前326年秋～323年春)